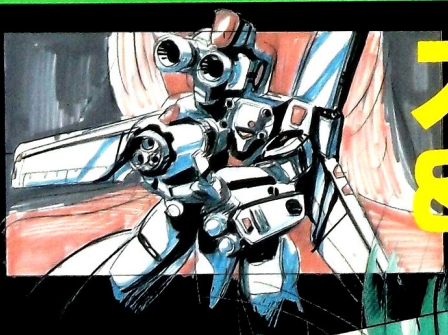
超時空要塞
マクロス
MACROSS

劇場版

愛・おぼえていますか

ストーリー&絵コンテ



定価980円

★この本の特徴

●劇場版「マクロス」の監督、河森正治先生を中心とした絵コンテを、ストーリーにそって、わかりやすく整理して掲載！

●現場の熱気を知りたいと願うアニメファンのための、また、マクロスファンのための、またとない一冊！

●アニメーションを自分で作ってみたい、演出してみたいと願う若者たちの必携の本！

カバー絵・河森正治

劇場版　超時空要塞マクロス

愛・おぼえていますか

ストーリー&絵コンテ

まえがき

この本は実際の制作に使用された絵コンテ及びレイアウトをもとに、フィルムとして完成される以前のマクロスの姿を構成してみました。なお、ストーリーとして入っている文章はシナリオ等から作り上げたオリジナルなもので、実際の制作で使用されたものとは異なります。

目次

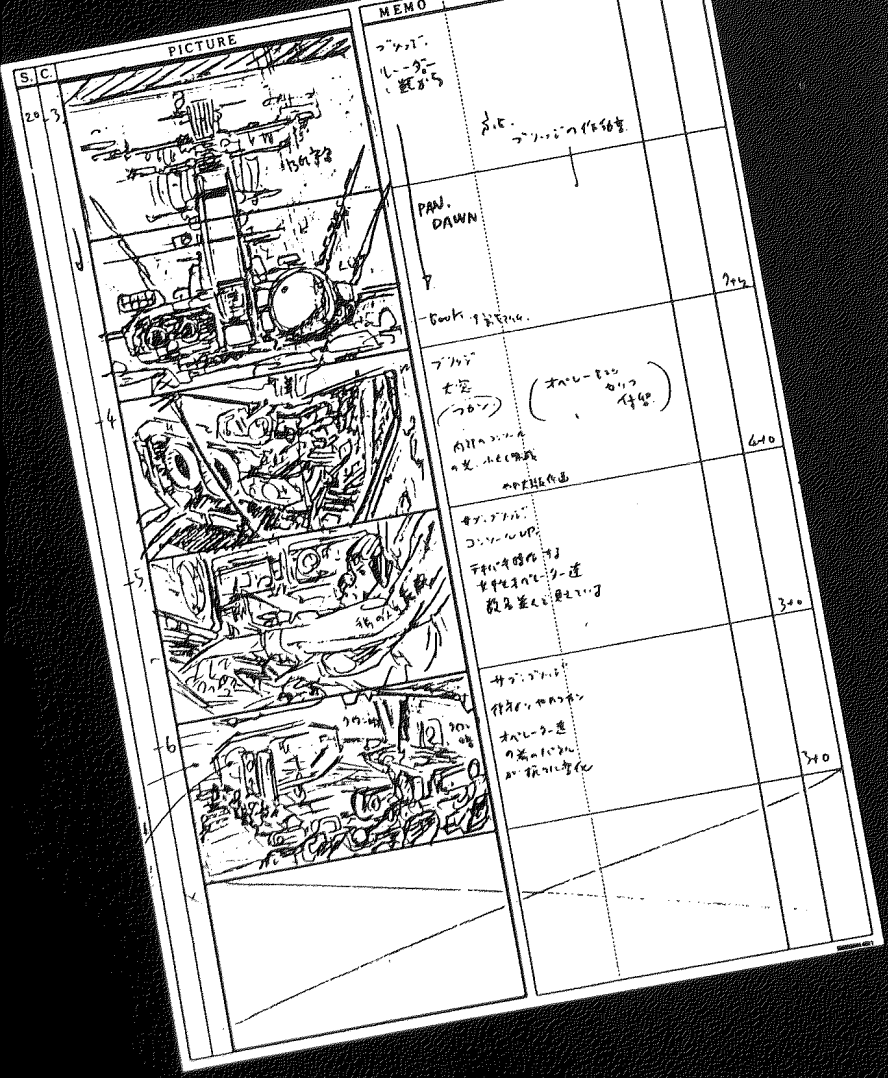
第1章 ファーストミッション……5
第2章 ゼロGラブ……27
第3章 ロマンスナイト……45
第4章 ゼントラーディ……77
第5章 アルティラ……103
第6章 ラブ・ディファレンス……147
第7章 愛・おぼえていますか……177
エンディングタイトル……216

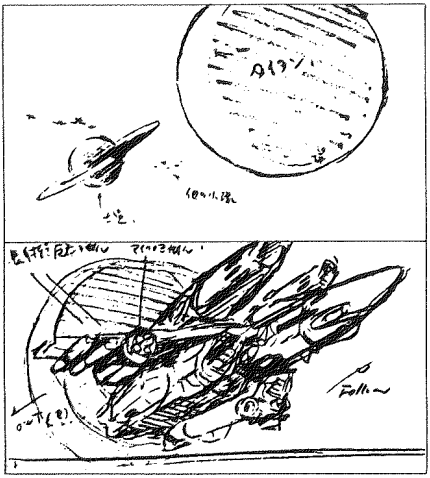
制作スタッフ

プロデューサー／井上明・岩田弘・榎本恒幸
監督／石黒昇・河森正治
ストーリー構成・脚色／河森正治
脚本／富田祐弘
キャラクターデザイン／美樹本晴彦
プロダクションデザイン／宮武一貴
作画監督／美樹本晴彦・板野一郎・平野俊弘
美術監督／宮前光春
撮影監督／橋本和典　　音響監督／本田保則

SE……効果音
ME……音楽
T. U……カメラが画面に寄っていくこと。
PAN……カメラが上下左右に移動すること。
on……フレーム内にいる人物がしゃべっているときの音声。
off……人物がフレーム内に見えないときの音声。

第1章 ファーストミッション





宇宙。衛星タイタンのむこうに、土星が浮かんでいる。その土星近くから、バルキリーの編隊が現れ、タイタンをすりぬけるように画面右手前へ飛び去ってゆく。ブースターをつけたスーパー・バルキリーである。

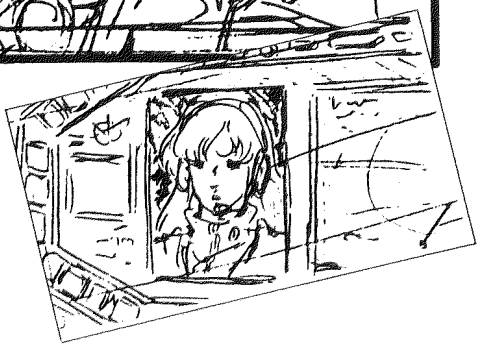
バルキリー、コクピット。一条輝少尉へ、カメラがゆっくりPANする。

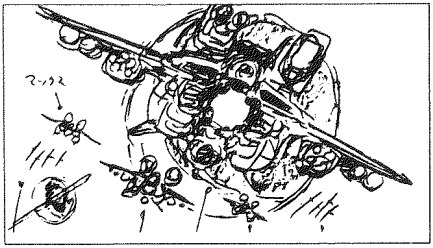
未沙の声(off)「デルタ１よりスカル、エンゼル、アポロ小隊各機へ――」

バルキリーのコクピット。前面のパネルに未沙が映っている。未沙へ、ややPAN。

未沙「――コース修正308、プラスA15、30秒後に射程圏に入る。迎撃隊形に入れ！」

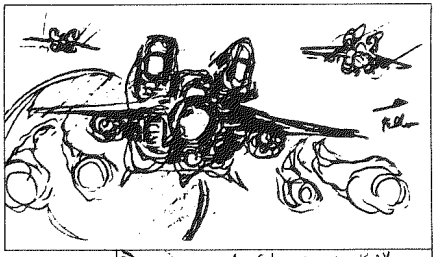
未沙は、長い髪の上からヘッドセットをつけている。



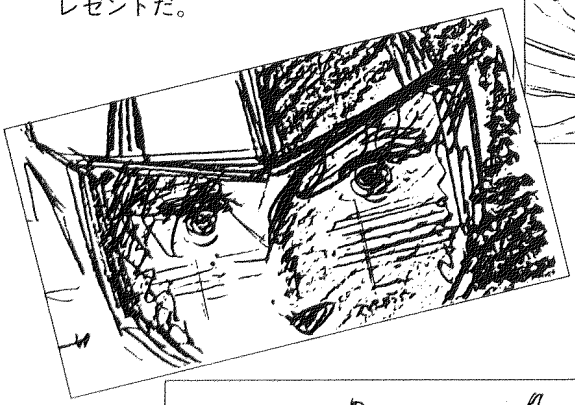


スカル小隊が、バーニヤをふかしつつ、画面右奥へヒラリと変わる。編隊の後ろにタイタン。フオッカー(off)「スカル・リーダーより各機へ。聞いてのとおりだ。これより迎撃フォーメーション17に移る。いいな!!」

パネルの示す敵の位置が点滅し、4機は照準を合わせる。バルキリーの翼の下からミサイルが発射され、白い航跡を引いて飛ぶ。

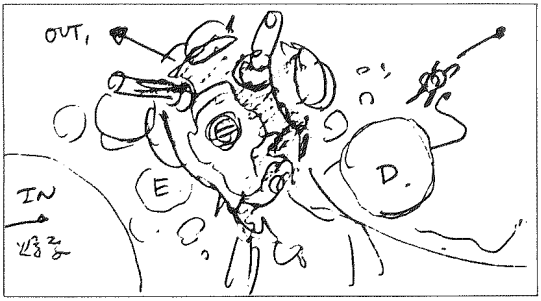


航跡が画面奥へ、生きもののように伸びる。近づく敵へのプレゼントだ。

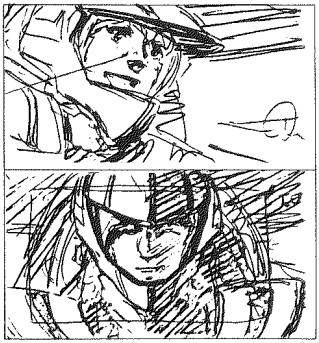


パネルの図形が、輝のバイザーに映る。ミサイルのラインが伸びてゆく。見つめる輝の目。手は、ミサイル・コントローラーを握っている。

接近するゼントラーディ軍のリガードに、ミサイル命中!!巨大な炎の球が広がり、リガードが次々にその中に消えていく。



それでも、半数のポッドは、まだマクロスへと接近する。ミサイルの中をぬって、近づいてくるポッドの群れ!! 再び、ミサイルが、これをたたく。カメラ、コクピットの柿崎へ。



柿崎のバイザーに、敵の爆発光の照り返しがキラリと光る。
柿崎「やったーっ!!」

フォッカー「喜ぶのは早いぞ、相対速度を合わせて迎撃隊勢に移る。全機散開して、逆加速に移れ!!」
フォッカーの目は、コクピット外とパネルにむけられている。そして、手が、変形レバーを動かした。

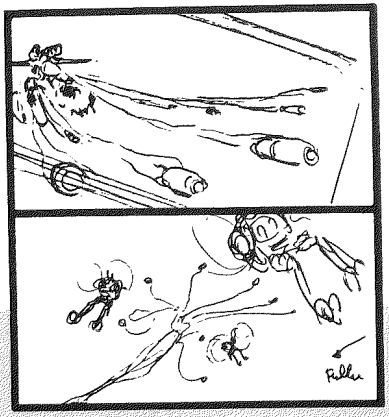
スカル小隊のバルキリーが、一斉にガウォーク形態となって、逆加速をかける。機体下部から出た脚の噴射が、画面いっぱいに広がる。

コクピットでGに耐える輝へカメラは近づく。バイザーに敵を示す3つのマークが映る。

輝「3機か……、ようし」

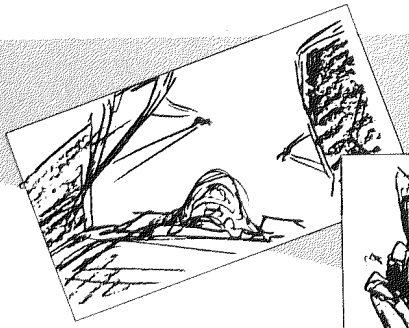
輝の目が、敵影をとらえている。右手が、発射ボタンにかかり、ON!!

輝機から飛び出したミサイルが、グーンと手前へ、白い航跡を描いて飛ぶ。それが、敵の中心へと急速に接近。だが、ポッド群は、これをかわす。近接信管だろうか、2、3発が宙に爆発。



輝「やるな！」

ポッドが、輝機に接近する。

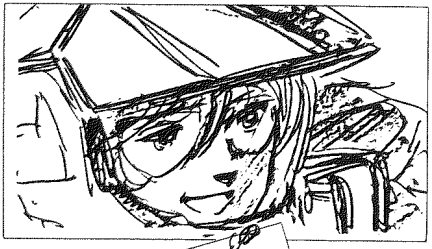


輝機が、今度は追われるほうにまわる。執拗に迫るリガード3機がビームを発射する。グラリとゆれるバルキリー。

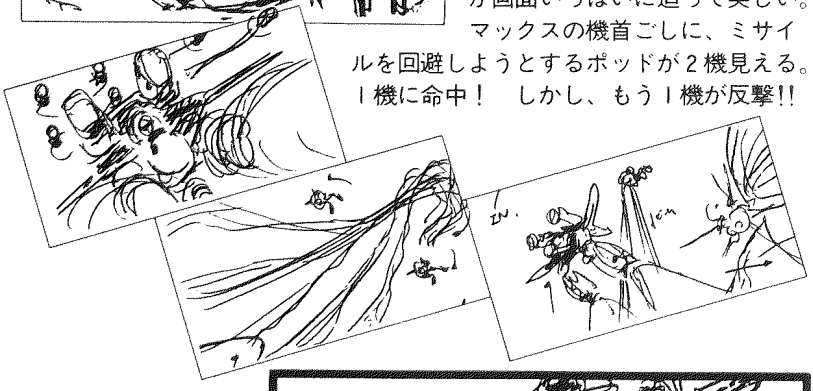
輝「うわーっ!!」

輝、体をまわして見る。

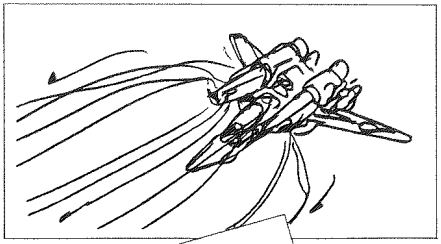
輝「行ったぞ！　マックス」



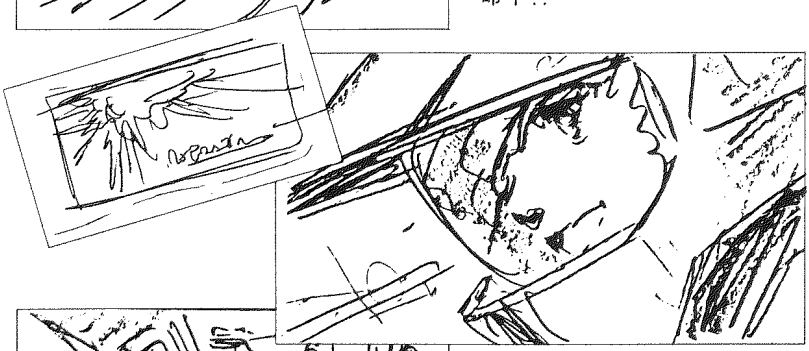
マックス、不敵に笑って――
マックス「了解！」
マックス機が、正面から迫る敵に機首をむけ、マイクロ・ミサイルを発射する。パッと広がって飛ぶミサイル群。白い航跡が画面いっぱいに迫って美しい。
マックスの機首ごしに、ミサイルを回避しようとするポッドが2機見える。
1機に命中！　しかし、もう1機が反撃!!

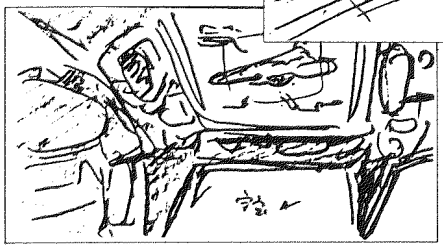


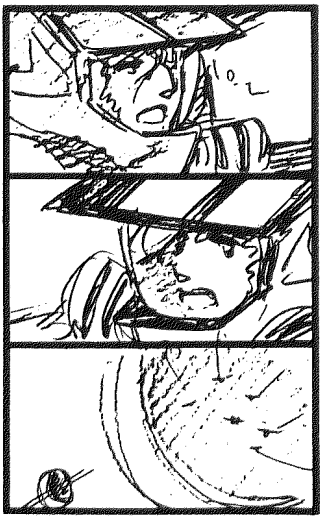
マックス機めがけて、ビームが迫る。マックス機は、両腕を振り出し、バトロイド形態に変化する。同時に、リガード後方にまわり込んで、ガンポッドを発射。リガードが、ビームを受けて四散した。
再び、敵を発見したマックス機が、反撃する敵のビームをかわして、3機目にガンポッドを発射！
マックス(off)「3機撃墜!!」



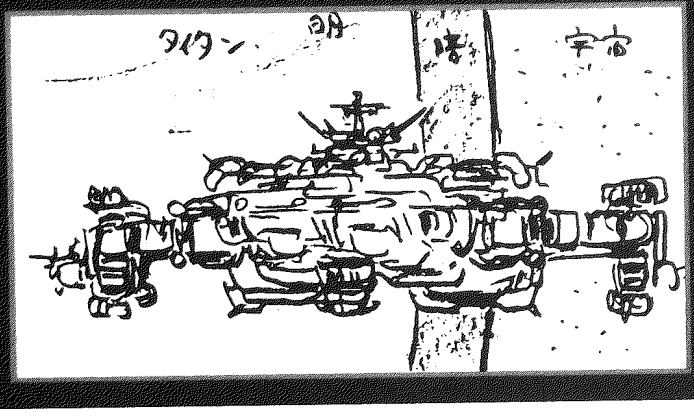
輝「やるー！」
柿崎「ホント、天才だぜ!!」
輝「おれだって！」
　輝は、ビームの間をスライドして、手前へ進出。回転しながら、敵にミサイルを発射した。命中!!

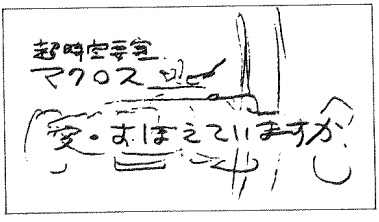




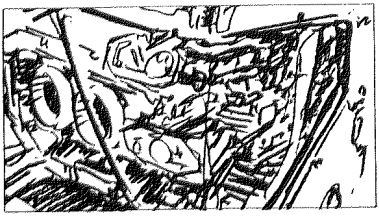


　フォッカーも、コクピットでひと息つく。
フォッカー「ふ～……」(と溜息の気分)
　だが、今の敵はおとりであった。マクロスには、新たな敵が襲いかかっていた。
ＳＥ（警告音）
未沙(off)「デルタ１より各機へ。エリア108に大型艦出現。艦載機多数、本艦にむけて接近中！」
輝「ええ～っ、こっちの敵はおとりか」
　フォッカー機を先頭に、スカル隊が全機反転し、土星方向へと急行する。土星の輪が、不気味なくらい静かに見える。

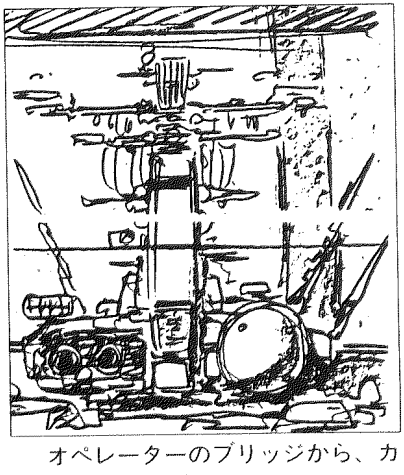




カメラが、マクロスに近づく。甲板上に見える、さまざまな構造物。光と陰影が幾何模様を描いている。巨大なメインブリッジが見え、強化ガラスのむこうに、未沙たちのフロア。コンソールの小さな灯りが明滅している。どうやら、戦闘態勢に入るようだ。パネルの図形が、次々に変化して、緊迫感を盛り上げる。



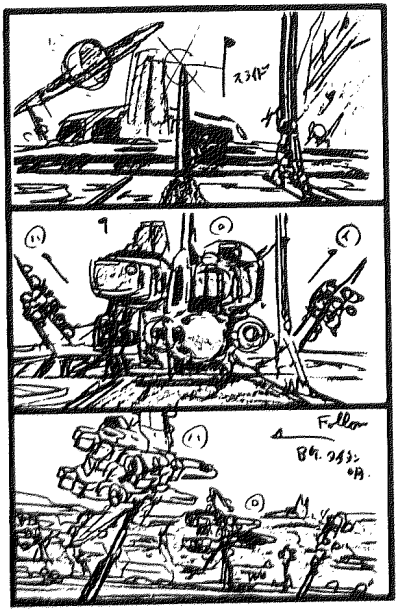
宇宙空間を行くマクロス。航海灯が輝く。――メインタイトル――マクロスの後方には、タイタンが大きな球となって浮かんでいる。



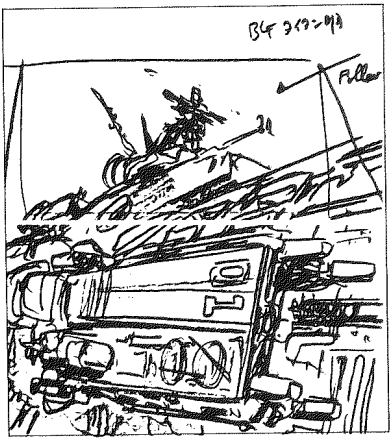
オペレーターのブリッジから、カメラはメインブリッジへとＰＡＮ、ＵＰする。未沙、クローデイア・キム、シャミー、ヴァネッサのメンバーが見えてくる。

マクロスの側面のアームドⅠ。青く塗られた甲板に、指示パターンがさまざまな色にペイントされている。
アームドⅠの発進ゲート。

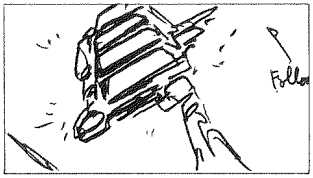
声「All systems green.
Good luck to the reqruits！」
右手にいるオペレーターが、グッドラックのサインを送っている。



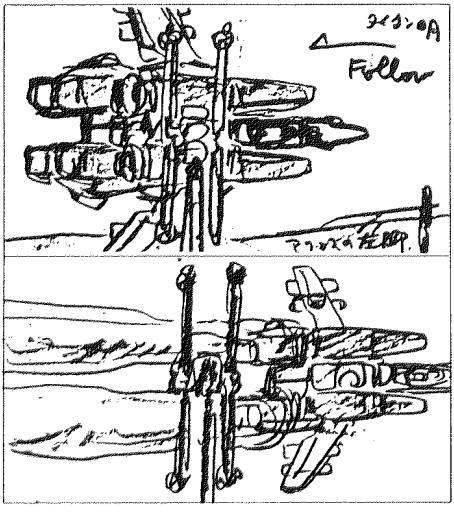
未沙「ASK、接触推定ライン確認。デルタ1よりアームド1へ。エンゼル、アポロ各小隊、発進スタンバイ！」
正面の未沙が、コンソールに手を伸ばして、通信を送る。



スーパーバルキリー3機が、甲板上にせり上り、アームで発進ポジションにつなげられる。セットされた3機のバルキリー。

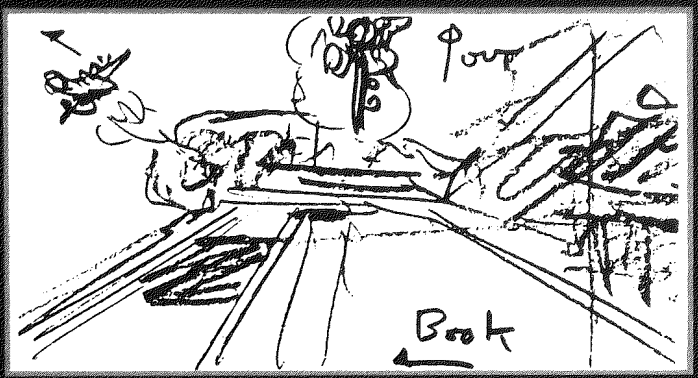


標識灯が青にかわり、ブースターロックをおさえていたツメがはね上がる。全ロックがはずれると、バルキリーは、ゆらりと宙に浮く。すかさずバーニヤを軽くふかして離れるとブースターが、すさまじい噴射光を広げる。バルキリーが、迎撃に発進するのだ。

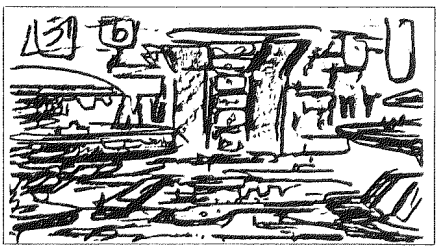


アームにロックされたバルキリーが、横腹を見せている。上部からは、タイタンの光が淡くそれを照らしている。

やがて、そのバルキリーもロックをはずすと、アームドーから離れていった。長く尾を引く、噴射煙が、たった今ここにあった死の女神の存在の証……。

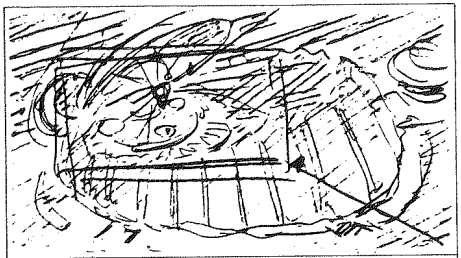


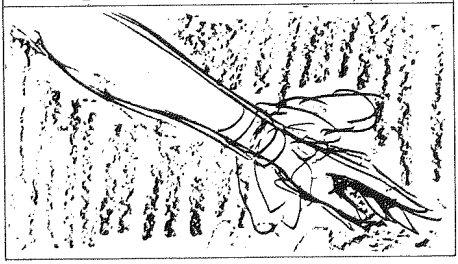
マクロスの船体をかすめて、戦場へと急ぐバルキリーの編隊。その下方には、華やかなマクロス艦内の街の灯が見える。動いているのは、車のヘッドライトだろうか。



大窓の下、さまざまなＣＭを映し出すスクリーンや、重力制御で宙に飾られた車――外の戦場とは違って平和なたたずまいである。ゴミ処理ロボットが、人々の間を歩きまわっている。

マクロス艦内の街。ベンチにすわっているのは、恋人たちだろうか。自動販売機が、コーラを売って歩きまわっている。そのむこうに、コンサート会場が見える。カメラがゆっくりとT、U。
歌（私の彼はパイロット）



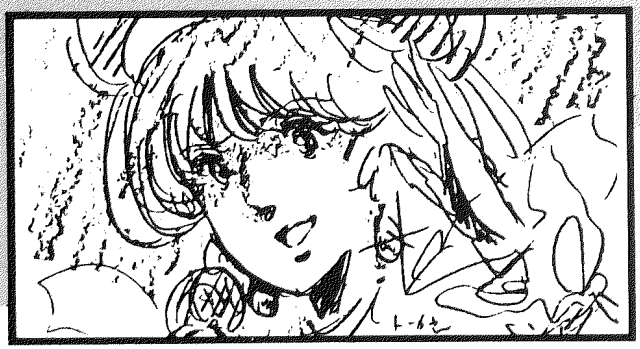


ミンメイ（歌）「――わたーしの彼は、パイローット――」

スポットライトが、ミンメイに注がれている。歌い終わったミンメイは、気持ちよさそうに、ちょっと首を振る。

ＳＥ（大歓声）「ワァ～ッ」

その中で、ミンメイは、ゆっくりと客席におじぎをする。またひときわ、歓声が高くなる。やがて、拍手と歓声がしずまって……。

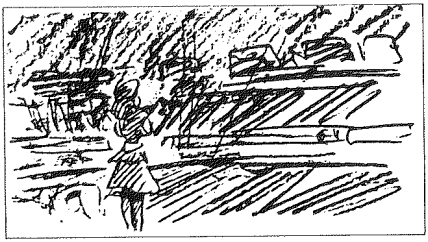


ミンメイが、ステージから挨拶をする。

ミンメイ「みなさん、今晩は。リン・ミンメイです」

観客「ワ～ッ」

今夜は、マクロスのアイドル、ミンメイの初のコンサート。

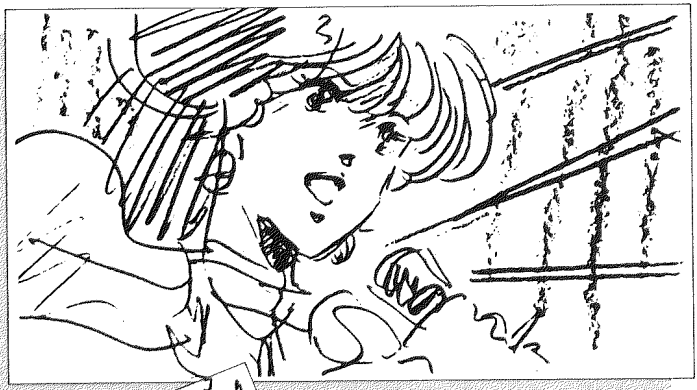


暗い客席にむかって喋るミンメイ、ライトの反射が美しい。

ミンメイ「え～、今夜は、私の初めてのコンサートに、こんなに大勢の方に集まっていただいて、本当にありがとうございます」

かけ声「ミンメーイ！」

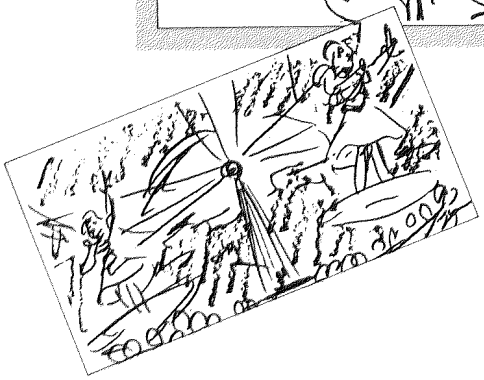
ミンメイ「ありがとう。え～、私たちのマクロスが地球から飛び立ってから、もう5か月になりますけど、その間、本当にいろいろなことがありましたし、つらい想いをされた方も、大勢いらっしゃると思います」



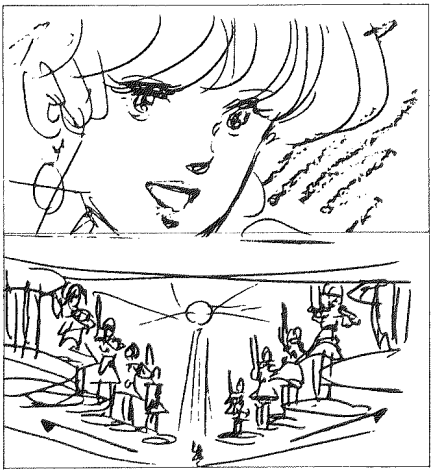
ミンメイ「でも、今夜は、そんな悲しいことは忘れて、思いっきり楽しんでください。それでは、今度発売になる私のファーストアルバムの中から、メドレーでお送りします」

ミンメイの頭上に、レーザーボールが出現してキラキラ光る。歌い出すミンメイ。

歌（小白竜）



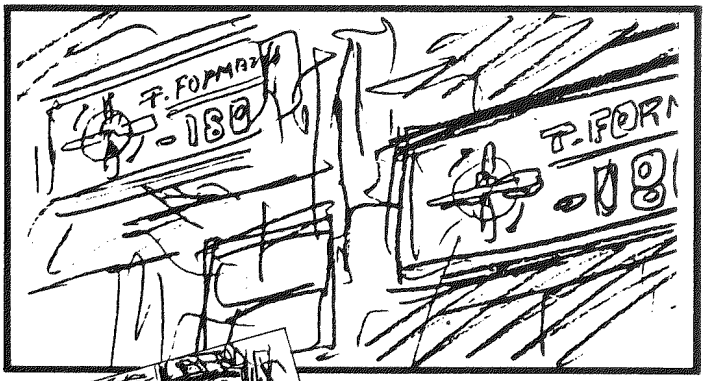
ミンメイ（歌）「リメンバー　大空舞う　白銀の翼――小白竜」
　ミンメイの歌が、客席に響き、コンサート会場は、次第に過熱。ミンメイの巨大な立体像が、ミンメイから飛び出し、また消える。

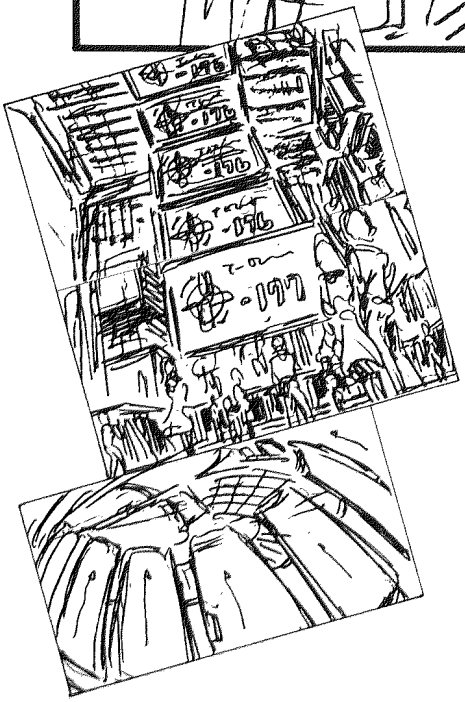


ミンメイ（歌）「病める都求めて」

ミンメイ（歌）「――来た男　エピルズ　スレイヤー……」
　ミンメイが右手を上げる。そのとき――！
ＳＥ（警報）
　一瞬、歌が止む。
ミンメイ「え、えーっ」
ＳＥ（警報）
　コンサート会場が暗くなった。

声「Attention！Attention!! Our ship is to make a transformation in 3 minutes. Go to the nearest shelter as soon as possible. Attention！ Attention!! Our ship is to make a ――」





街のネオンが消え、街頭のスクリーンの数字が、トランスフォーメーションまでの時を刻んでいく。シャッターが閉じる。

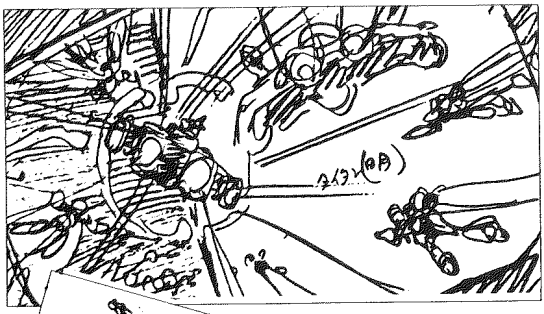
客Ⓐ「変形だ！」

客Ⓑ「また変形だ!!」

客席がざわめき、会場は混乱しはじめた。マクロスがトランスフォーメーションに移るというのは、敵の接近と、近くでの戦闘を意味している。

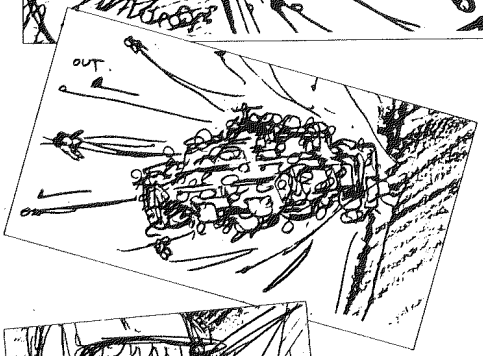
客席のざわめきの中で、ミンメイはオドオドしている。その上を、シャッターの影がおりてくる。

ミンメイ「……あ……」



戦場は、すでにマクロス周辺へと移っていた。すさまじいビームの雨、発射されるミサイル、そして爆発!!

ヌージャデル・ガーが、ブリッジ前方から突入してくる。その前に割りこんで来たバルキリーが、ガンポッドを撃つ。命中!!　輝の機である。



未沙「デルタ１よりスカル11へ。あなたの担当は敵戦艦迎撃のはずよ。すみやかに持ち場にむかいなさい！」

輝(off)「冗談じゃない。助けてやったのに、そんな言い方、ないだろう」

未沙「命令違反は営倉入りよ！　新入りのくせに逆らわないで」

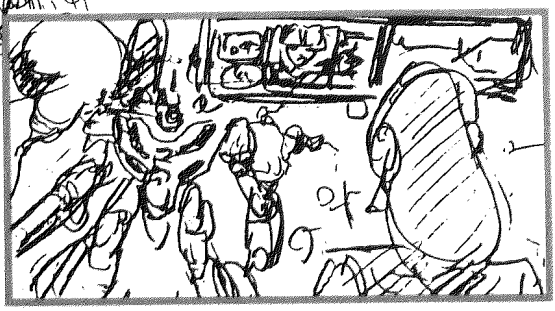
輝「敵機が侵入してるんだ。黙ってられるか」

未沙は、輝の態度に怒りを覚えている。

未沙「第２防衛隊にまかせなさい。これは命令です!!」

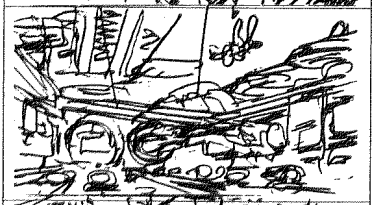
輝「女の指図は受けるか。艦内に入って敵を撃破する。以上」

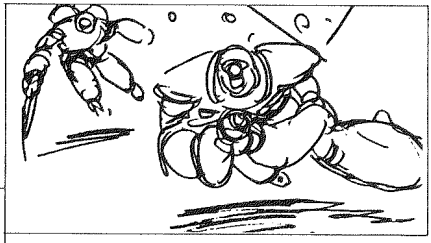
未沙「ちょっと待ってよ。男と女とどっちが偉いっていうの」



艦内にも、戦場の音が遠く響いてくる。ミンメイは、兄のカイフンと控え室にすわっていた。

声「Transformation starts in one minutes！」





ＳＥ（遠くの爆発音が響いてくる）

ミンメイたちが避難した控え室にも、時おり振動が伝わってくる。

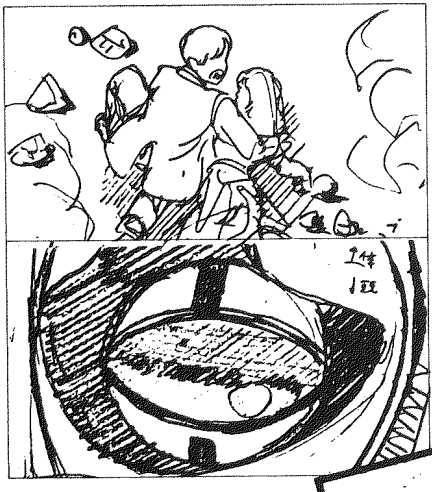
ミンメイ「今日は大丈夫かしら」

カイフン「いつもより激しいな……」

そのころ、敵は無重力区域に侵入していた。突入してくるヌージャデル・ガーが６、７機、銃を構えて進む。そして、壁を破ると繁華街の真上から落下する。

ヌージャデル・ガーの重量が、ビルをつぶし、道路をこわす。そのうちの１機が、ミンメイたちの部屋の天井を逆さまに破って落下する。

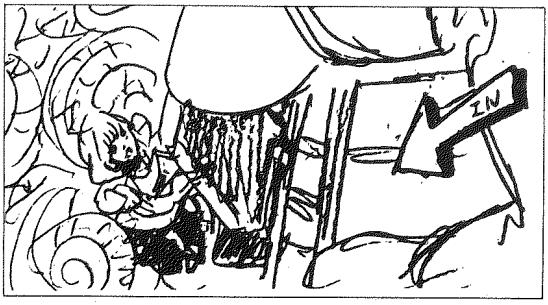
部屋の天井が落ち、その中からヌージャデル・ガーの頭部が現れる。



カイフン「ミンメイ、逃げるんだ!!」
　ヌージャデル・ガーの目が、ギロリと動いて、ふたりを見る。パネルに映ったふたりに、パイロットのコンダは驚いた。
コンダ(off)「ヤット」
コンダ「ゼントラン　テ　メルトラン!?」
ロリー(off)「ゼントラン　テ　メルトラン？」

　明らかに、ゼントラーディ兵は、ショックを受けた。
兵Ⓐ「ヤック？　ヤック…、デ・カルチャ…」
　その兵士の目に、逃げるミンメイたちが映る。

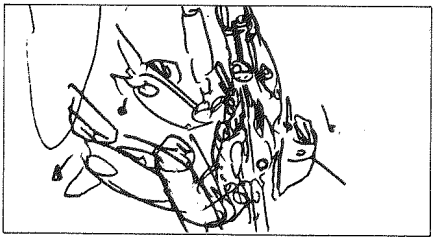
　ミンメイに巨大な手がせまる。
声「Transformation T−5 seconds, 4, 3, 2, 1…Transformation!!」
　ヌージャデル・ガーに追われ、ミンメイが転んだ。
カイフン「ミンメイ！」
　そのふたりの間の路面が、トランスフォーメーションのためにはね上り、ふたりを隔てる。
カイフン「うっ！」
ミンメイ「キャーッ」
　ふたりとも、路上から転げ落ちてしまう。
ミンメイ「あーっ!!」



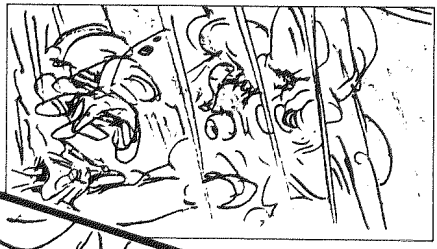
おびえて振りむいたミンメイの目に、迫るヌージャデル・ガーの影!!

ぐっと近づくヌージャデル・ガーの下に、小さなミンメイ。
ミンメイ「キャーッ」

車道のむこうから、輝のバルキリーが、ガウォーク形態で飛び出す。ためらわずに、ヌージャデル・ガーを射つ輝。敵は、ジャンプして反撃に移った。



声「重力制御システム11番損傷」
声「サブ・システム作動不能」
人工重力に異常が生じた。



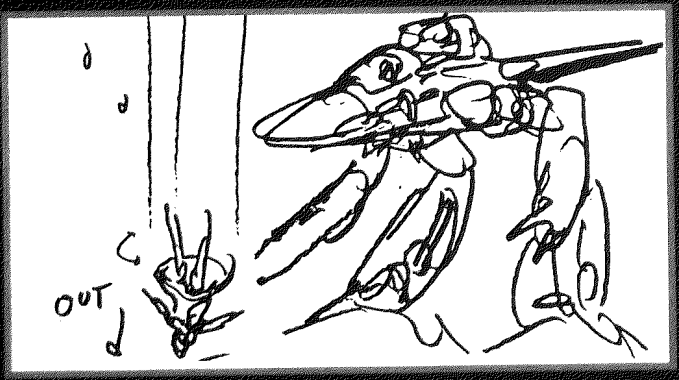
艦内の人工重力の代わりに、タイタンの重力が作用してくる。街の中のものが、次次に重力にひかれて落下する。内壁のガラスを破って、ゲームセンターのゲーム台が飛び出す。

驚くミンメイもまた、ユラリとゆれて、街中を加速しつつ落下！

ミンメイ「キャーッ!!」

地球の8分の1とはいっても、重力があれば、物体は、その方向にひかれる。しかも、距離があれば加速がつく。このままでは、壁に激突して、ミンメイは即死！

落下するものの中に、輝のバルキリーが浮かぶ。その前をミンメイが落ちる。

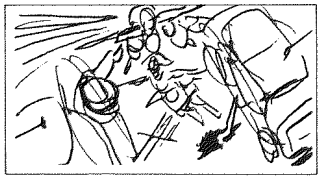


コクピットの中の輝の目に、落下する花のようなミンメイの姿が映る。

輝「あっ!!」

輝のバルキリーが、次の瞬間、ミンメイを追って、急降下に移った。

ダイブ――!!



ガウォーク形態のバルキリーが、微妙なコントロールで、落下する目標――ミンメイを追う。少しずつ、バルキリーの手が、ミンメイに近づく。だが、ミンメイの体は、落下のショックで、スピンをはじめている。２台の自動車をすりぬけ、歩道橋をかすめて、ミンメイは落ちる。ガウォークもまた、障害物を破壊して加速する。

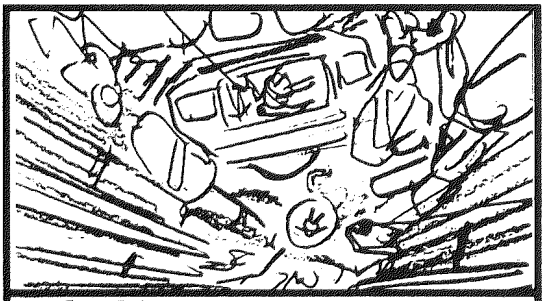
ガウォークの足が歩道橋をけずり取り、コクピットにショックが伝わる。それでも、左手がミンメイに近づく。

ガウォークの手が、グッとミンメイに伸び、やがて、そっと包む。

輝「フ～ッ」

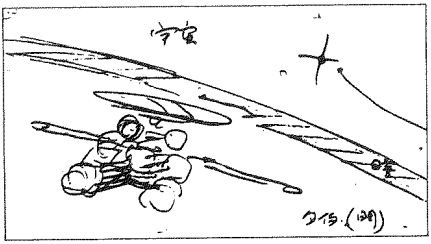
ほっとひと息ついたとき、ガウォークの前方に、突き当たりの壁！

輝「うわっ!!」

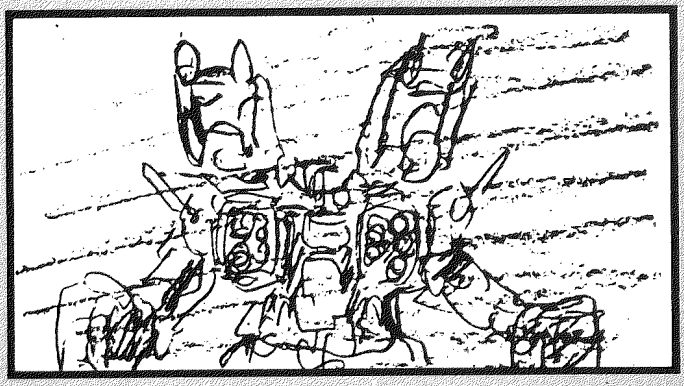


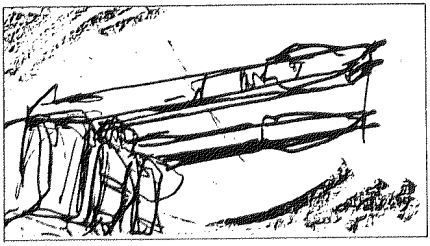
急速に近づく壁。その中央が、破壊されている。爆発にやられたのだろう。輝の目に、その奥のメカがはっきりと見えた。

輝のガウォークが、そのメカの中に飛び込んだ。一瞬の闇！

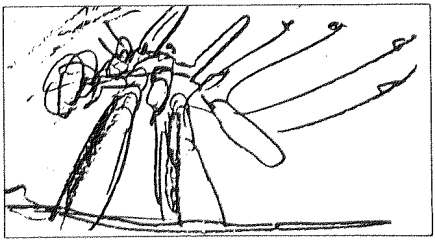


マクロスの前方を哨戒する機から、敵接近が報告される。
オペレーター「The eimmiy ship is approaching course of 107――」
ヴァネッサ「コース確認。自動追尾装置、作動！」

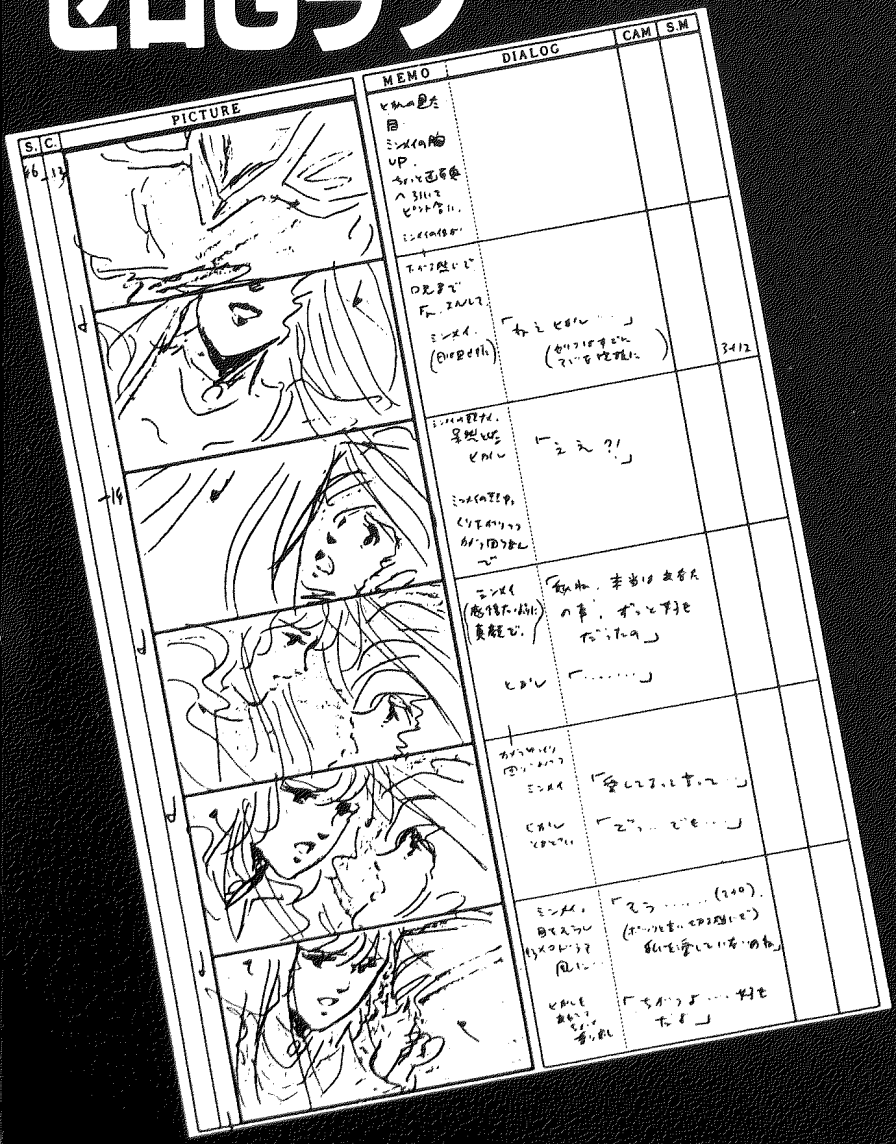


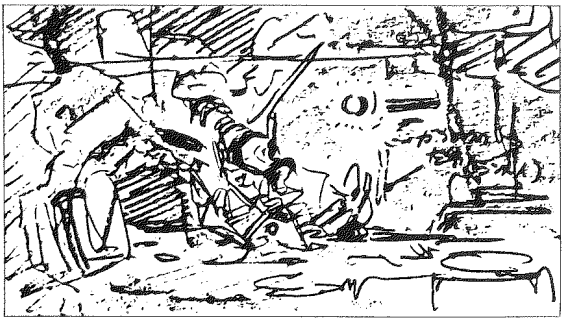


クローディア「エネルギー・レベル上昇、砲撃スタンバイ!!」
マクロスの主砲のスパークが輝き、周囲が発光してくる。
グローバル「撃て!!」
タイタンの大気を貫いて、ビームが敵艦を捕らえた。



ゼロGラブ


PICTURE
MEMO
DIALOG
CAM
S.M
S.C
16
ヒカルの見た目
ミンメイの胸UP.
ちょい画角変へ引いてピント合い.
ミンメイの体が
下から起じて口元まで
F.I.スルして
ミンメイ
(自分の声に驚く)
「あ、ヒカル…」
(ガックばすがついて地球に)
3+12
ミンメイの驚き、
呆然とヒカル
「え?」
ミンメイの驚き、
くりてガックっ
ガックリうなだれ
ミンメイ
(感情たぶん真剣で)
「私ね、本当は女なんの事、ずっと男だったの」
ヒカル
「……」
ガックリ
ミンメイ
「全てウソって事で…」
ヒカル
「そっ…でも…」
ミンメイ、
目そらし
ムスコ
「そう……(フゥ)。
(ガックリまたヒカル起こす)
私は変っていないのね」
ヒカル
「ちがうよ……好きだよ」



暗い機関室の中。非常灯の下に、機首をつぶしたバルキリーが見える。輝が、コクピットから降りて、さっき助けた女の子を見ようとしている。

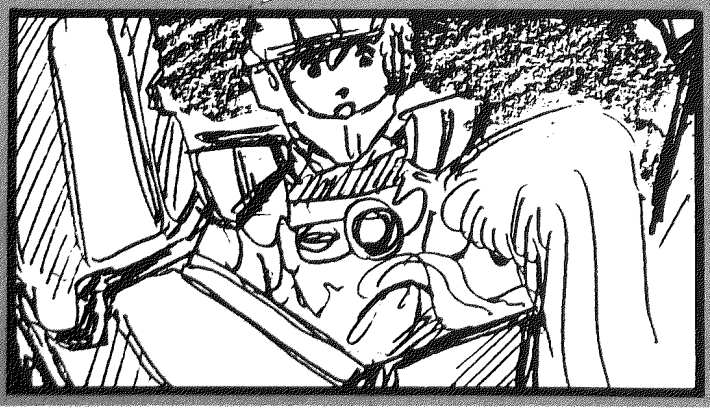
壊れたガウォーク形態の腕の中の少女――ミンメイである。輝の手の中のライトが、ミンメイの面立ちを浮かび上がらせる。

輝「あっ……まさか!?」

思わず、輝はライトを取り落とす。

輝「……本物だ……！」

輝は、アイドル、ミンメイが、自分の助けた少女だということにビックリ。



やがてミンメイは、少し目を開けて輝に気がつく。
ミンメイ「あなた…、私を!?」
輝「は、はい」
嬉しそうなミンメイに、輝は敬礼する。

輝「ぼ、僕は地球統合軍バルキリー・スカル小隊所属、一条輝……少尉です」
ミンメイ「ありがとう。少尉さん」
輝「い、いいんです。大ファンですから」
ミンメイ「嬉しい！私の歌、聞いてくれてるの？」
輝「は、はい。いつも!!」

周囲は、機械の一部が露出している。エンジンブロックだ。輝は、そんな中でも、しっかりサインをもらった。

ミンメイ「どこかに出口は？」

輝「ちょっと見てきます」

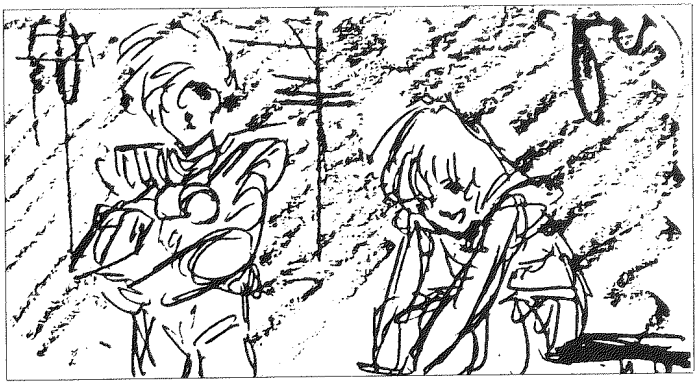
だが、出口は見当たらない。闇の中に、メカが続くのみである。たよりの無線も壊れてしまった。

ミンメイ「だれか、だれかいませんかぁ」

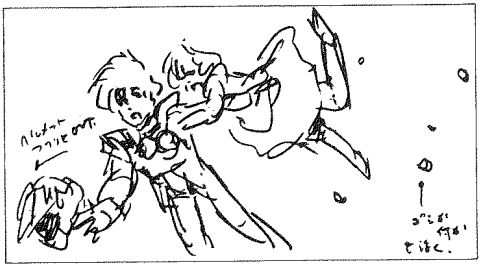
闇の中に、ミンメイの声がこだまするだけ……。

ミンメイ「だめか……」

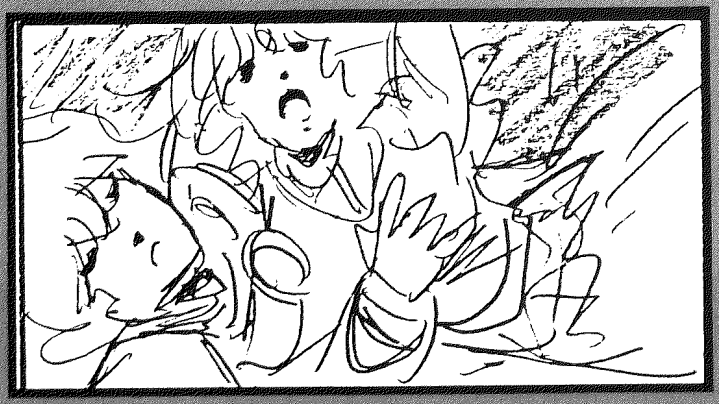
しかし、すぐにニッコリと笑う。

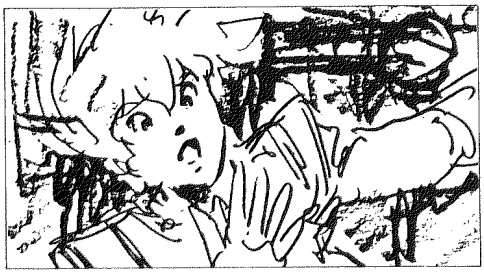


ミンメイ「うふっ。ちょうどいいわ」
　輝は、思わずミンメイを見つめる。
ミンメイ「過密スケジュールは、もうたくさん」
輝「えっ？」
　ミンメイは、微笑みながら大きく伸びをする。
ミンメイ「これでひと息つけるってこと」
　そのとき、床が大きくゆれた。遠くから、エンジンの響きが伝わってくる。
ミンメイ「どうしたの？　ねえ、少尉さん」
輝「マクロスが、タイタンから発進したんです」
ミンメイ「本当!?」
輝「本当です」
　かすかに、マクロス全体が振動している。



ミンメイ「いや～ん」
　突然、ミンメイも輝も、固定されていないものが浮き上がった。
輝「重力制御がきかないんだ」
　ミンメイにしがみつかれた輝も、宙に浮く。
輝「ちょ、ちょっと、ミンメイさん」

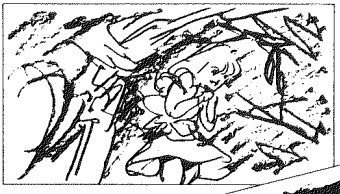




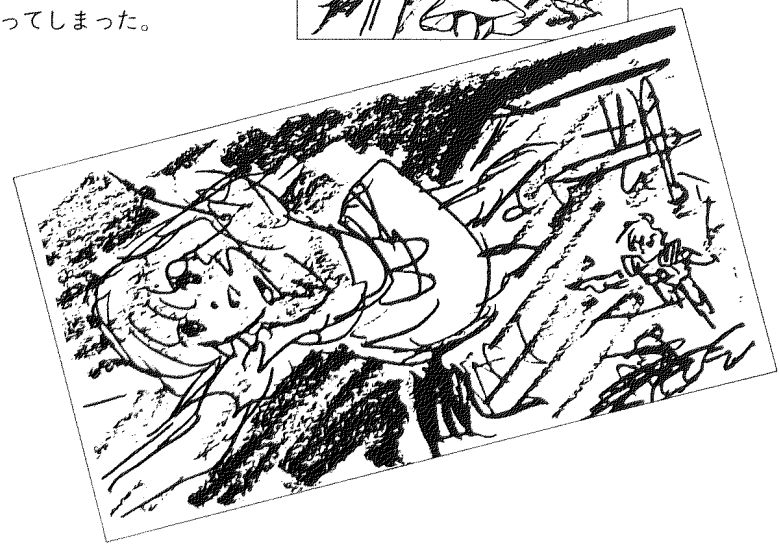
　思わず、輝の手がミンメイの胸に……。
ミンメイ「いやん！」
　輝は思わず手を見る。
輝「ああ、事故です！　間違いです!!」
　ミンメイは、自分では回転を止められないようだ。
輝の上をゆっくりとまわる。

輝「そこで足を前にふって、ゆっくり止めて……」
ミンメイ「こう？」
　ミンメイは回転しながら、両足を振る。やがて回転は止まった。

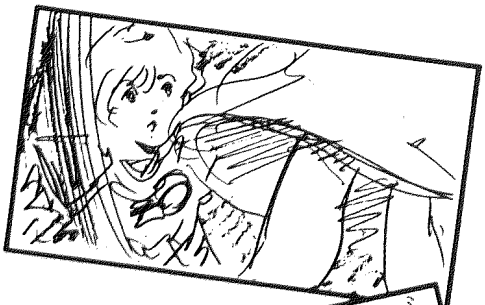
　やがて、ミンメイも、無重力空間に慣れてきた。頬に笑いが戻る。
ミンメイ「うふふ、面白い！」
　ミンメイは、壁を軽くけって奥へと飛ぶ。しかし、そこは闇。
輝「あ！　ミンメイさん。そっちへ行くと……」
ミンメイ「キャッ!!」



輝「いてっ！」
　闇の中で、ふたりは隔壁にぶつかってしまった。



そのとき、ミンメイの服が光を放った。ライトフォログラフィをセットした舞台衣装である。輝の上を飛びこえていくミンメイ。輝もミンメイを追って飛ぶ。



ミンメイ「どう!?　この服、最新式のライトフォログラフィよ」

輝きを放ちながら、ミンメイは闇の中を飛んでいく。構造材に手をかけ、クルリと回る。光の天使。

輝は、そんなミンメイの姿に魅かれてゆく。

闇の中に、ときどき、構造材やメカが浮かぶ。小さな浮遊物も、光の中にゆれる。

ミンメイ「わぁ、お野菜やマグロが泳いでる!!」

輝「みんな落っこってきたんだ……」

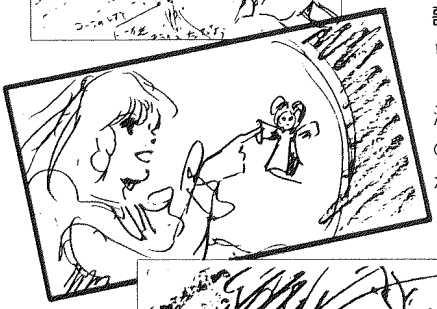
ミンメイの服の放つ光の中で、いろいろなものが浮かんでいるのが見える。

魚、野菜、家具、オートバイ——みんなミンメイの光の中。ゆっくりと、ミンメイ人形が流れてくる。

ミンメイ(off)「あら……、私の人形まである!!」

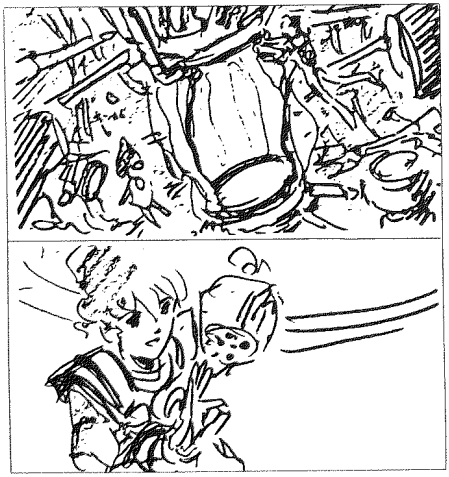
ミンメイは、人形をつつく。

ミンメイ「チョン!!」



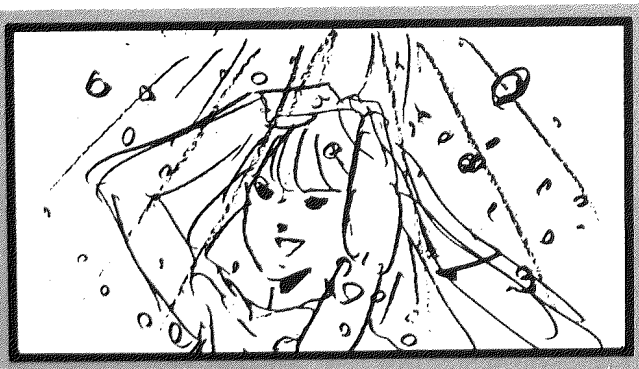
歌(ゼロ-Gラブ)「ゼロ-Gラブ、ゼロ-Gラブ、ゼロ-Gラブ——」

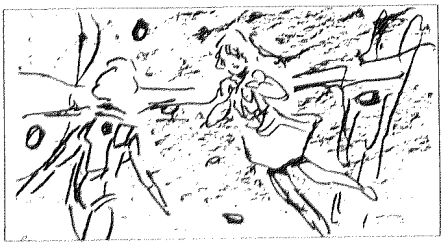
ミンメイ人形が歌いだす。闇の中、淡い光を放つミンメイが浮かび、そのミンメイの歌が流れていく。人形が、回転して浮かび上がる。



輝が宙に浮きながら、パラシュートの布を広げている。シャワー室を作るつもりだ。バケツの底に穴を開け、パイプにつるす。振りむいてＯＫサイン。

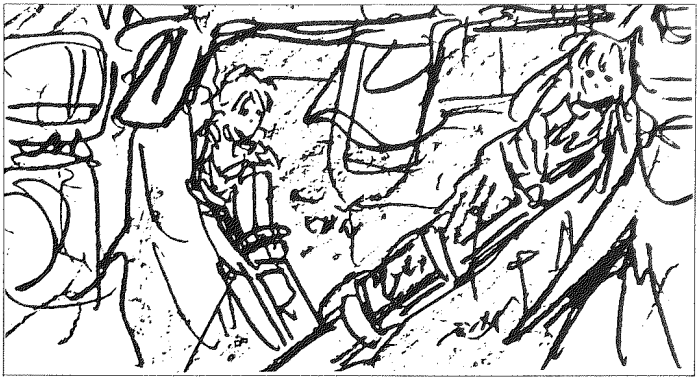
無重力下で球になる水の中、ミンメイが躍る、躍る。



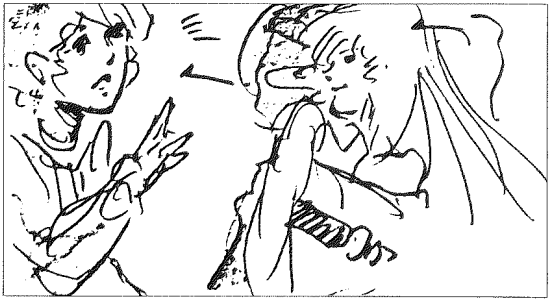


艦内のどこかで、ミンメイが新しい服を見つけてきた。ちょっと気分は、ハッピータイム。無重力の中で、宙返りをしてみせるミンメイ。

輝の憧れのアイドルが、輝のためだけにするアクション。



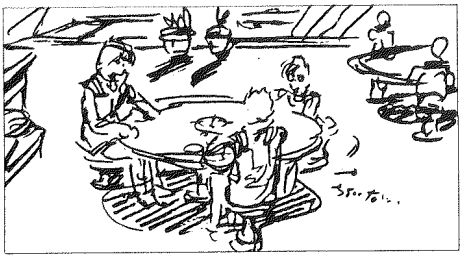
無重力の中で寝るために、ミンメイはパイプベッドに体をしばりつけている。そんなミンメイを見つめる輝。思わず手を伸ばしかけて、ミンメイの寝返りであわててひっこめる。



寝顔をうっとりと見つめて、輝はちょっと笑う。スヤスヤと眠るミンメイの寝息、寝顔に浮かんだ微笑み。

すでに、数日が闇の中で過ぎていた。食糧も、水も不自由はなかったが、やはりここは闇の中である。マクロスは、土星空域を進んでいるはずなのだが、このブロックからは何もわからない。

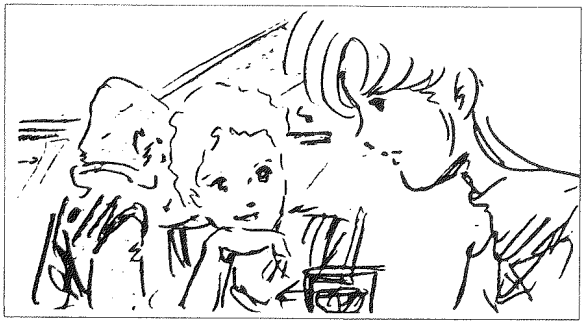
ただ闇の中で、また1日が過ぎようとしていた。



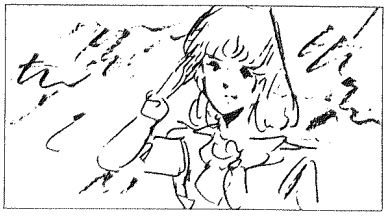
艦内のラウンジ。フォッカーと柿崎、マックスがテーブルを囲んでいる。
フォッカー「とにかく、まだ死んだと決まったわけじゃない」
マックス、柿崎「はい！」

マックス「今日は西側ブロックを、徹底的に探してみます」
フォッカー「うん、頼む」
マックスと柿崎が出て行った後、フォッカーは、クローディアと未沙のいるカウンターへ近づく。

未沙「あれからもう３日よ。軍に入ってはみたけれど、こわくなって逃げ出したんじゃないかしら」
クローディア「まさか!?」
未沙(off)「あの子、軍人向きじゃないと思うわ。男の子は仕事を誤ると、一生不幸よ」

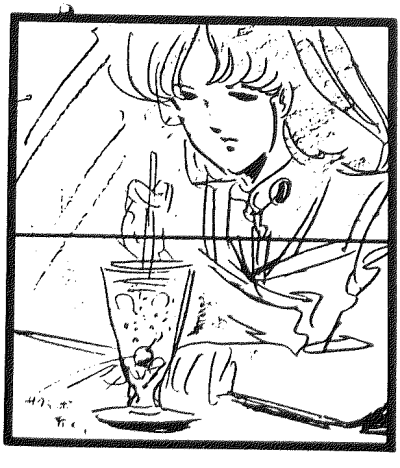


ふたりの話に、フォッカーは機嫌が悪そうである。
クローディア「あいかわらず厳しいのね。そんなことだと――」
未沙「いつまでたっても、お嫁のもらい手がない」
クローディア「うふっ」
未沙「いいのよ。私はもう女の子だなんて気持ち、とっくに捨てちゃったんだから……」
クローディア「また、オバンみたいなこと言っちゃって――」



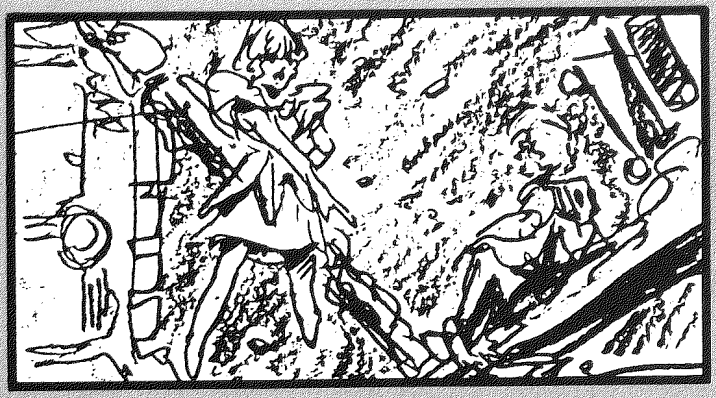
未沙の周囲から、音が遠のく。思い出――ライバーの面影が浮かぶ。未沙に敬礼をするライバー。そしてまだあどけない未沙が、悲しげに敬礼を返している。

敬礼のままのポーズで、風に吹き飛ばされていくライバーのイメージ。今では、追っても手の届かないところにいる初恋の人――ライバー。

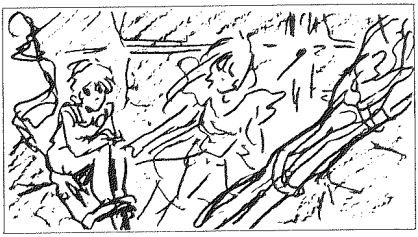


ライバーの思い出が、未沙の心を悲しみで閉ざす。

未沙は悲しげに、カウンターの上のソーダ水を、ストローでかきまわしている。ブルーのソーダ水の中に、泡がサーッと立って消えてゆく。

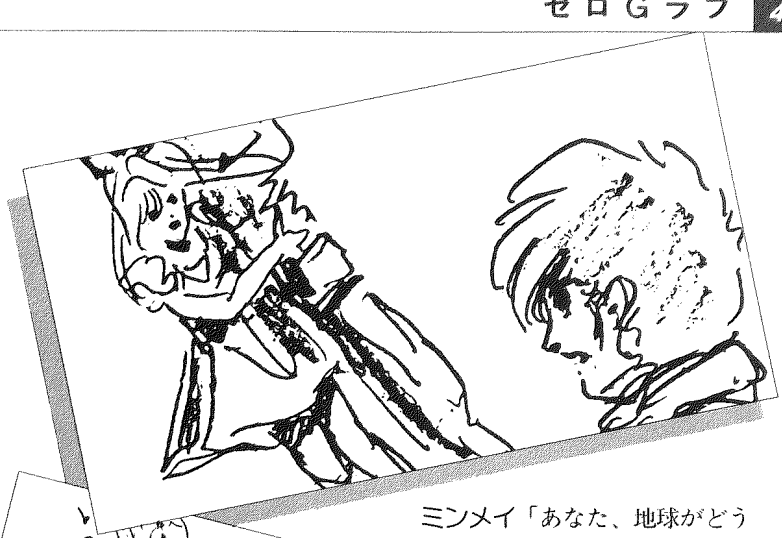


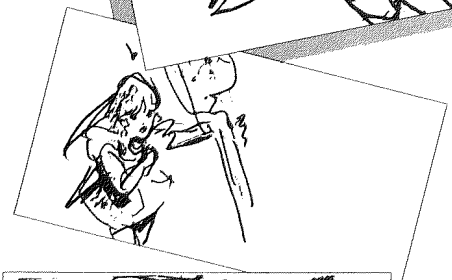
エンジンブロックの闇を通して、ミンメイの声が聞こえる。
ミンメイ「それでね。父さんも母さんもこう言うのよ。『兄さんがどれだけ苦労したかわかっているのか!?　言うことをきかないなら、親子の縁を切ってやる』――」

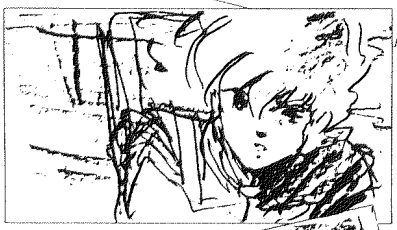


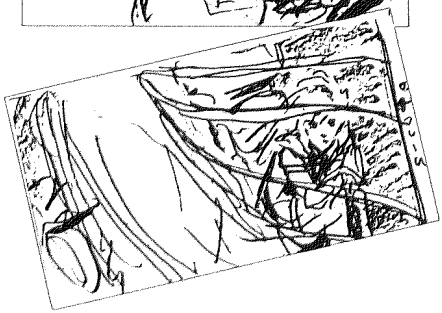
ミンメイ「だから、こう言ってやったの」
　ミンメイは、パイプベッドから飛んで、輝の足もとへ。三つ指をついて、芝居っけを見せる。
ミンメイ「長い間、お世話になりました。私は必ず歌手になりますってね」

　ミンメイの話は続く。懐かしい平和だったころの地球の思い出。今は、ゼントラーディの攻撃で、全滅したかもしれない地球――！　ミンメイの父母のいるところ。









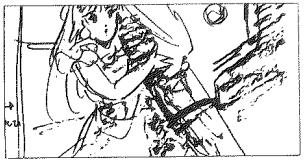
ミンメイ「あなた、地球がどうなったか知らない？」
輝「発表では、電波妨害が強くて連絡とれないってことだけど」
ミンメイ「そうじゃなくて本当のこと……」
輝「あんな大爆撃を受けたんだから、ただではすまないと思うけどね」
ミンメイ「そう」

輝「あっ、そんなに心配することないよ。どうせ、あと一ヵ月もすれば地球に戻れるんだし」
ミンメイ「うん……」

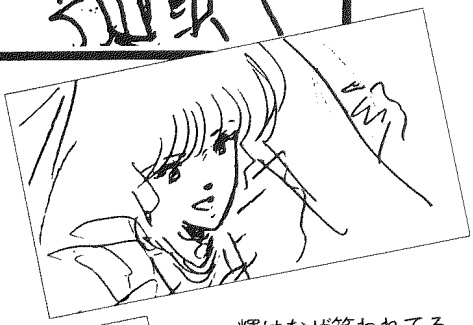
悲しそうなミンメイの表情に、輝は話題をかえる。

輝「ねえ、ちょっと聞いてもいいかな」

ミンメイ「えっ」
輝「こないだのテレビのこと」
ミンメイ「テレビ？」
輝「そ、『泣きたい夜に』、あの相手役の人とのうわさ……」



ミンメイ「え～っ、あなたも本気にしてるの。あんなの雑誌社のデッチあげよ」
輝「だけど…何ていうのか…あのラブシーン…すごく真に迫ってたから……」

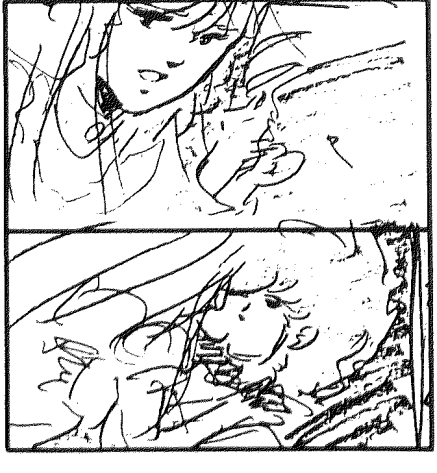


輝の真剣な表情を見て、ミンメイは思わず笑う。

輝はなぜ笑われてるのかわからない。
ミンメイ「あんなの演技でできんのよ、ビジネスよ」
輝「うそ～!?」
ミンメイ「やってみせましょうか？」
そういって、ミンメイは輝に迫ってくる。

輝の目の前にミンメイの胸。
ミンメイ「ねえ、輝……」
輝「ええっ!?」
ミンメイ「私ね、本当はあなたのことずっと好きだったの」
ミンメイの演技に、輝はとまどう。

ミンメイ「愛してるって言って」
輝「で、でも……」
ミンメイ「そう、私を愛してないのね」
輝「違うよ……好きだよ」
ミンメイ「本当に!?」
輝「本当だよ」
ミンメイは目をつむり、ゆっくりと輝に顔をよせていく。
ミンメイ「嬉しい……」
ミンメイの顔が輝に近づき、なりゆきのまま２人はkiss をする。無重力の中、２人の影がひとつに重なって浮いている。



だが、人工重力が回復して、２人の体はゆっくりと降下する。同時にハッチが開き多勢の人がなだれ込んでくる。

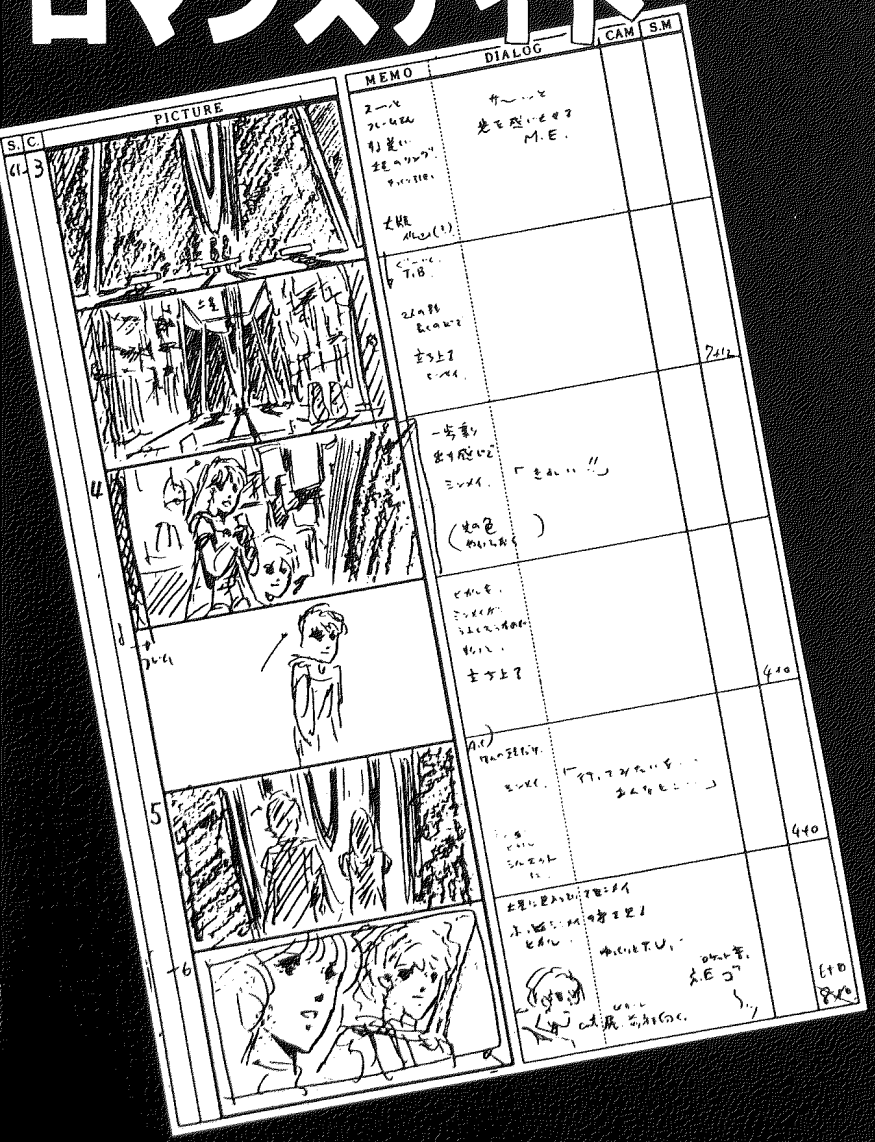
記者Ⓐ「スクープだ！」

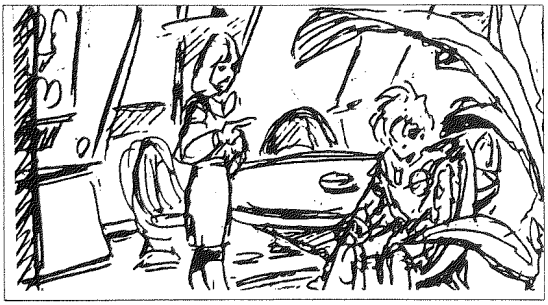
ミンメイと輝を見つけたのは、記者たちであった。フラッシュがたかれ、空中のふたりは、決定的シーンを撮られてしまう。そのシーンが、ストップモーションになって……。

未沙(off)「今回はミンメイさんを助けたことで、広報課から、特別に許すように言われました」

第３章

ロマンスナイト





未沙「ただし、今後命令違反を犯したら、ただではおきません。厳しく処罰します」

輝の部屋である。輝は、未沙から、今回の処分免除を聞いている。

未沙は、テーブルに手をつき立ち上がる。

未沙「そのつもりで……」

輝は、思わず溜息をつく。未沙が振り返って以前にまして厳しい表情を見せる。

未沙「何か不服でも!?」

輝「いいえ」

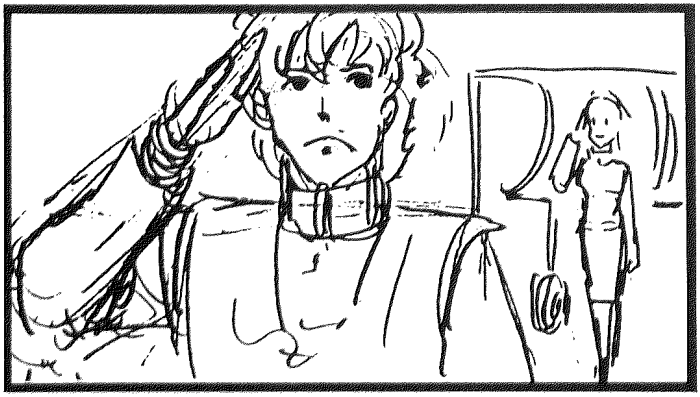
未沙「以後、気をつけるように。いいですね」

輝「……」

未沙「いいですね!?」

おおいかぶさるように言う未沙に、輝はわざとらしく立ち上がり、くそていねいな敬礼をする。

輝「ハイッ!!」



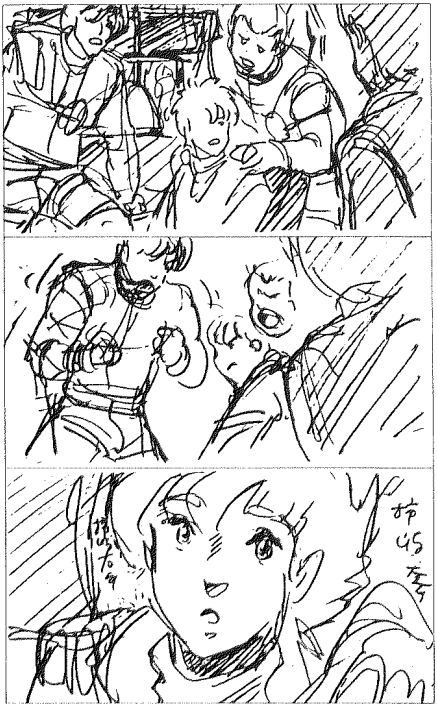
やがてドヤドヤと入ってくる足音。フォッカーをはじめ、柿崎、マックスのスカル小隊の仲間だ。

フォッカー「どうだった？　我らがアイドル、ミンメイちゃんのお味は？」

マックス「一条先輩は、そんな人だったんですか!?　残念です」

柿崎「詳しく教えろ！」

何やらてんでに勝手な想像をめぐらし、ワイワイと言う。



正面からフォッカーににらまれ、柿崎に首をしめられた輝は、あわてて真相を話す。

柿崎「じゃ、３日もふたりきりで、何もしなかったのか！」

輝「しない！」

一瞬、全員がシラける。

フォッカー「何だ？　お前、それでも男か!?」

一同「バーカ！」

キョトンとする輝……。

世の中、どこでもスキャンダラスな話題は早々と広まるもの。マクロスでもそうだ。

ふたりの記事は、すぐに雑誌に取り上げられた。

キム「バルキリー隊パイロット、一条輝少尉と何をしていた？　清純派卒業……」

ヴァネッサ「相手は軍人、汚れた関係か、だって」

オペレーター３人娘である。ラウンジの一角で、熱心に週刊誌を読んでいるのだ。

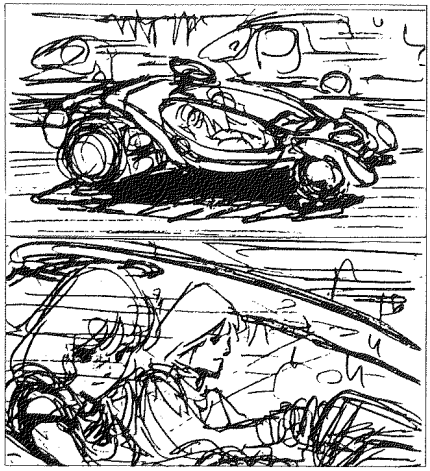
キム「芸能界なんて乱れて当然よ。今度の男だっていったい何人目か」

シャミー「やあね。そんなふうに恋人をのりかえるなんて」

ヴァネッサ「何言ってんの。あんた、本当はうらやましいくせに」

シャミー「うん！」

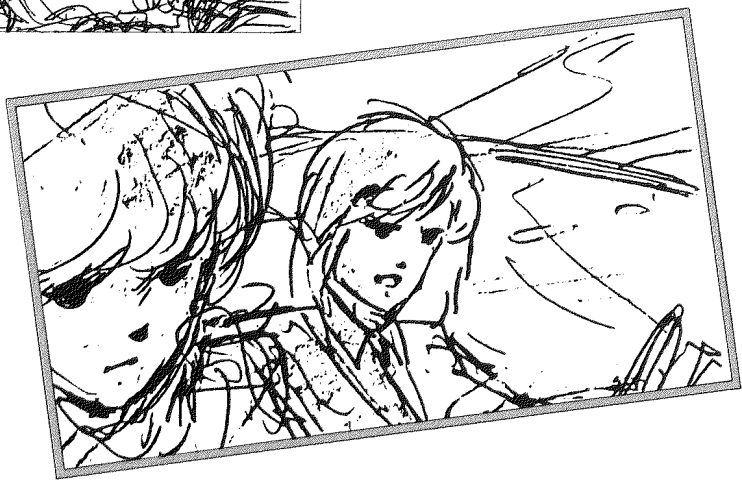
どうもシャミーは、ぜんぜんわかっていないようである。



ミンメイも、今度のスキャンダルにはまいっていた。車に乗っていても、どことなく元気がない。テレビを見ても、ミンメイと輝の噂話ばかりだ。

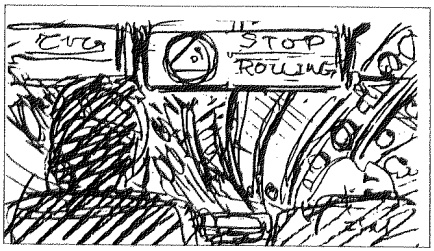
カイフン「今回は確かに事故かもしれん――だがな、歌手として今が一番大切な時だ」

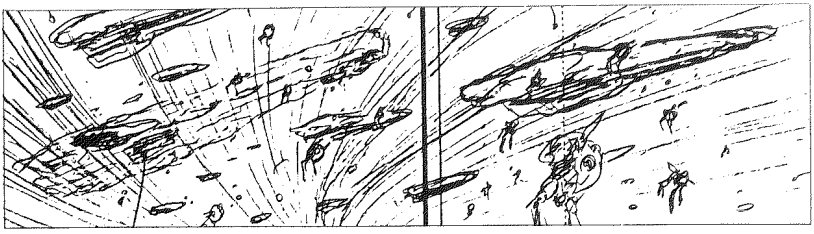
カイフンは、本気でミンメイの将来を心配しているのだが、ミンメイにそれが理解できるはずもなかった。



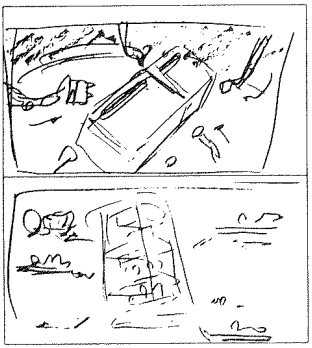
カイフン「これからは気をつけてくれ、いいな？」

うなだれているミンメイの頭が少しうなずく。



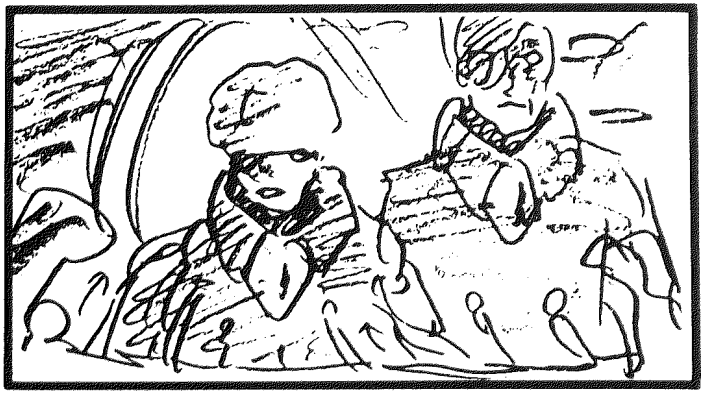


土星の輪にかくれて、ブリタイ艦隊が遊弋している。巨艦の周囲には、パトロール中のポッドも見える。



ブリタイ(off)「ダスダカン　デ・メルトランチャーッ？」

エキセルド「サ。ミ、プロトガドラス プレギルツ。ミ、デブランダカン デガンチャーツ、マイクランズカラ、オチャーツ、ザルグエスケスタ。ウトミスケス」

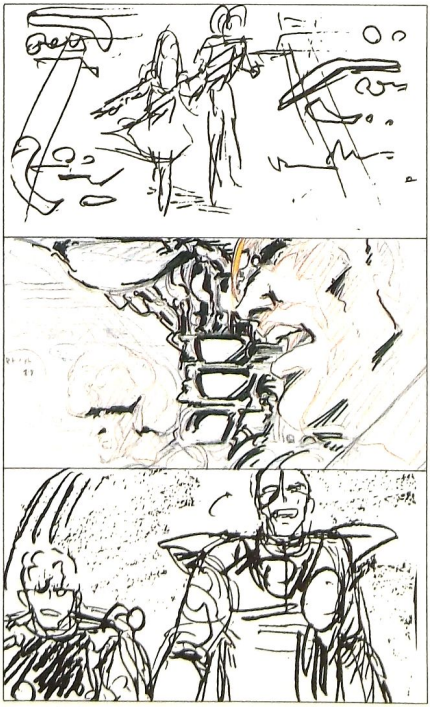


エキセルドは、マクロス艦内から持ち去ったものから、彼らが敵――メルトランディ軍ではなく、マイクローンであり、しかも、男女が同居していることを報告した。

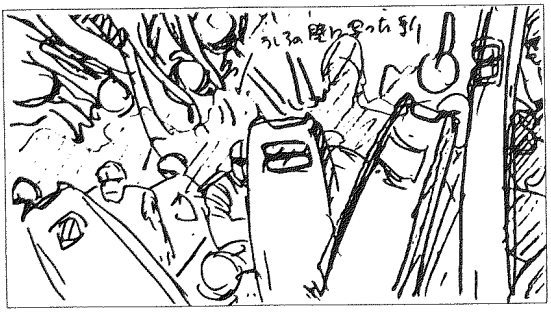
スクリーンに映しだされた冷蔵庫、自動販売機などに、ふたりの目が注がれる。エキセドルは、さらにマクロスとの戦いで、戦闘不能になった兵士の例を知らせる。

エキセドル(off)「タルニ……、(ここよりON) ニルケ デブラン ダカン ナメ デ・カルチャ エルケル ザーンギルテステ、デ・ガドラス テルネスタ ゼントラン、ナメ エスケスタ」

ブリタイ「デ・ガドラステルネスタ……。ミ・デブランダカン。ヤットデ・アルケス!?」



ブリタイにしても、エキセドルにしても、奇妙な敵――マクロスには、不気味なものを感じていた。〝あの船に、いったい何があるというのだ〟――ブリタイは、ひとり考え込む。

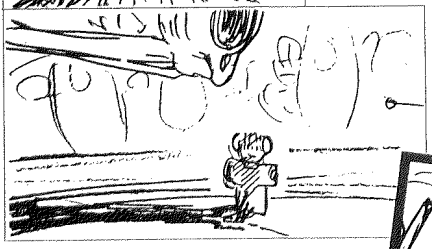


ブリタイ艦隊のうちの1隻――その内部である。中央のテーブルには、戦利品のミンメイ人形。周囲をゼントラーディの巨人兵たちが恐る恐る取り巻いている。彼らには、これはマイクローンのマイクローンと思えるのだ。

兵士Ⓐ(off)「マーカ マイクラン オ マイクラン!?」

そのうちのひとりが、人形を銃でつつく。突然テープがまわり、人形が歌う。

歌（私の彼はパイロット）



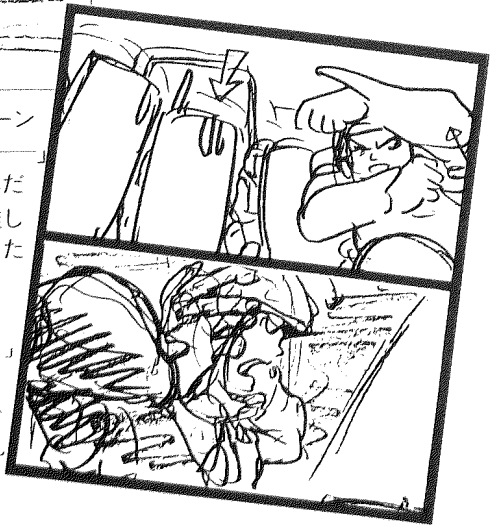
歌「キューン キューン キューン キューン 私の彼はパイロット――」

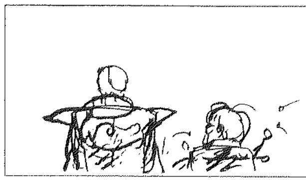
兵士たちは、これを音波兵器だと思ったらしい。あわてて避難しようとするが、すぐに力が抜けたようになってしまう。

兵士Ⓑ「ガドラザーン！」

兵士Ⓒ「デ・カルチャザーン!!」

銃が音を立てて落ちる。銃を落とした手を、不思議そうに見つめるワレラ。





ブリタイは、ボドルザーと協議する。マイクローンのサンプルを入手すること――これがボドルザーの結論であった。

早くしなければ、メルトランディ軍に先をこされかねないのだ。

そこに新たな報告が入った。メルトランディの船が接近しているというのだ。

デルリガード偵察隊より入電
兵士Ⓖ「ロム デルリガート メル
女どもの戦艦1隻
トラン イン ガドラダカン、ダン
第1次警戒ライン上に出現
ツイン ニルケガドラ メルケス！」
なに
ブリタイ「ヤック!?」

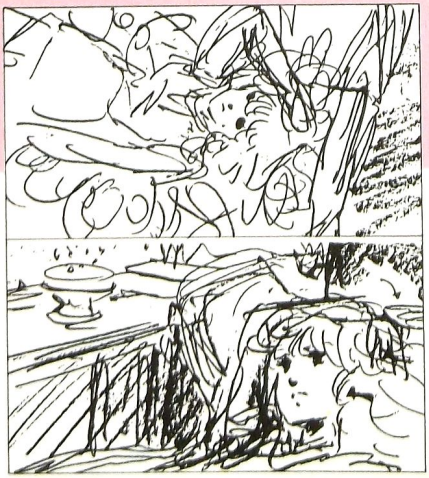
ブリタイは、兵士に背をむけたまま防衛網の強化を命じる。

護衛部隊の防衛網を
ブリタイ「オ・ガドラス ズカラ
強化せよ　女どもを
ハドラ ウ・ザルグ。メルトランダ
接近させるな
カン ウ・デルケス!!」
はっ
兵士Ⓖ「エスケス!!」

ミンメイの部屋。ひとりでテレビを見ているミンメイの耳に、輝とのスキャンダルについて語るレポーターの声。

レポーター「今、疑惑の渦中にあるミンメイちゃんと一条輝って軍人は、出ようと思えば閉鎖区域から出られたのよね。なのに――」

しばらく見ていたミンメイは、思いを振りはらうように手を振る。それに反応したテレビが消えて、折りたたまれていく。同時に部屋が明るくなる。



ミンメイは、ベッドに倒れ込み足をはね上げてから、ドンとおろす。やり切れない――。

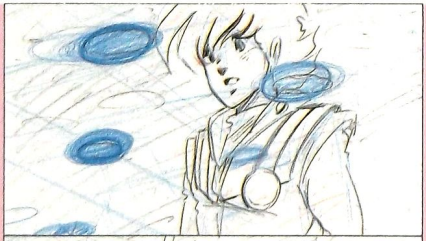
ミンメイ「はあ……」

ミンメイの横に、淡い光の無重力アクセサリー。球の中に蝶が飛んでいる。

バー。クローディアとフォッカー、そして未沙がテーブルを囲んでいる。そこに、報告のために輝が現れる。

輝「少佐、明日のパトロール編成表を、お持ちしました」

フォッカー「ご苦労！ま、一杯飲んでいけ」



輝は、未沙をチラリと見る。かなり気にしているようだ。

フォッカー(off)「いいからすわれ」

輝「……でも……」

未沙「私、帰ります！」

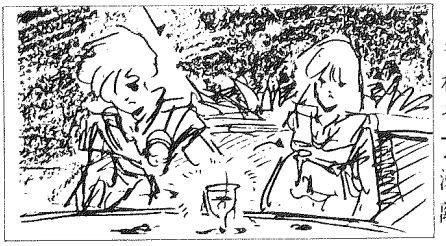
輝の態度に、未沙が立ってしまった。フォッカーが、未沙の隣に輝を押しやる。

フォッカー「ほら、輝。上官が気をつかって……、早くすわれ！」

どうやら、フォッカー少佐は、だいぶ飲んでいるようだ。

どうも輝にとって、未沙は苦手としか言えない。未沙もまた、輝に対しては、意識しすぎているようだ。

輝は、ようやくあきらめたか、未沙の隣へ体を移す。



輝は、未沙の隣にすわる。未沙もあきらめたように、もう一度すわりなおす。しかし、ふたりともそっぽをむいている。

フォッカー「なんだ、なんだ。早瀬、その面は!?　ったく、職務を離れたら少しは女らしくしろ！」

フォッカー「……いいか!?　早瀬。いくら士官学校首席といっても、お前は女だ。時には、男の言うことが間違ってても、そうですかって認めるのも大事なんだ！」

どうもフォッカーは、説教上戸らしい。フォッカーは、グラスに酒をつぎながら話す。黙っている未沙と輝。

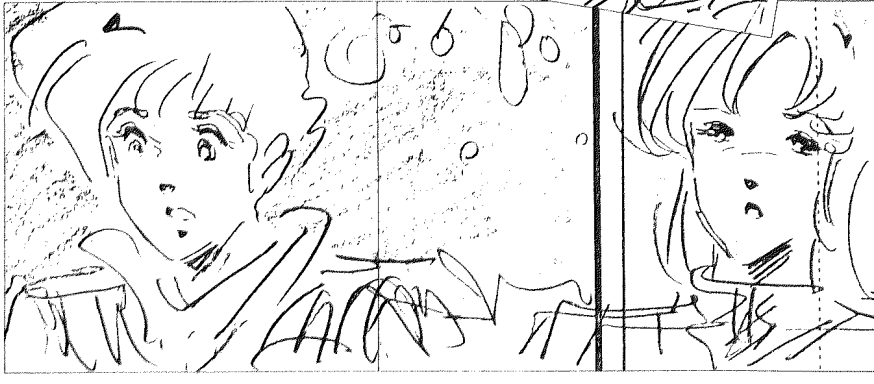
フォッカー「男ってのはな、時には強引さが必要なんだ。女の気持ちを考えてグダグダするな。本当に好きならば、力ずくでもモノにしちまうくらいの積極性が大事なんだ！」

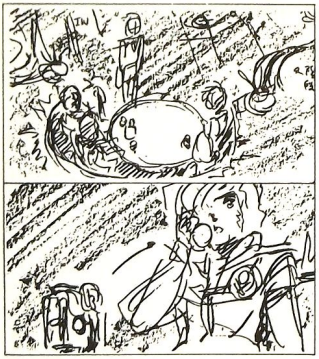
ふたりの反応に、いらだったフォッカーは、グラスを置いて言う。
フォッカー「いいか!? これから男と女のすばらしさを教えてやる！」

クローディア「あ、ロイ！」
フォッカーは、クローディアを抱きしめて、思いきりKissをした。輝も未沙も、目をパチクリ。

クローディア「ふたりがあきれてるじゃないの」
フォッカー「かまうもんか」
再びのしかかるフォッカー。ふたりは、テーブルの影になる。
クローディア「ロイ！　あ……」

赤くなる未沙と、唖然としつつも乗り出しそうな輝――まさに好対照である。





そこへ、ボーイが輝に電話を取り次ぎに来る。

輝「あの……、一条ですが——え、あ、うそ……。わかった、すぐ行く。——それじゃ」

何やらあわてふためいて受話器をおくと、輝は立ち上がる。

輝「ちょ、ちょっと家族の者が急病で……。失礼します！」

夜の公園—ベンチには女の子がひとり。ミンメイである。

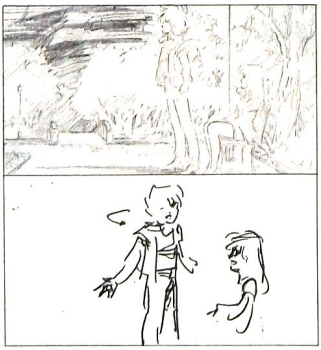
輝「お待たせ！」

ミンメイ「やだ。わかっちゃった!?」

輝「わかるよ。写真集みんな持ってるもん」

ミンメイ「一生懸命変装したのに……」

輝はベンチにすわるが、まわりを気にしてどこか落ち着かない。
輝「こんなことして大丈夫なの？」
ミンメイ「私といっしょじゃイヤ？」



輝、ちょっと考え込むが、意を決したように立ち上がる。
輝「それじゃあ、今夜はひとつ、パーッといきますか！」
ミンメイ「ウン！」
サングラスをかけたミンメイの顔が大きくうなずく。

マクロス艦内の街。華やかにネオンがともり、車が行きかう。その中を、ミンメイと輝が歩いてゆく。

噴水、映画館、大道芸人――

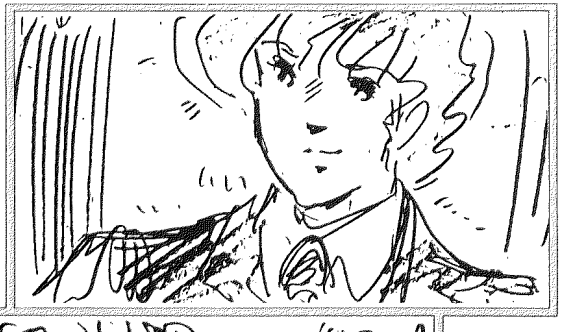
ショーウィンドーのマネキン――
機械仕掛でポーズを変える。

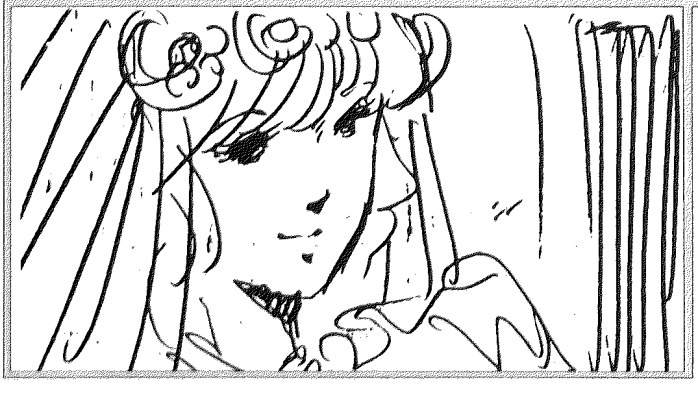
走ってきて案内標示の上で立ちどまるふたり。ミンメイが、輝の手をひいてまた走りだす。

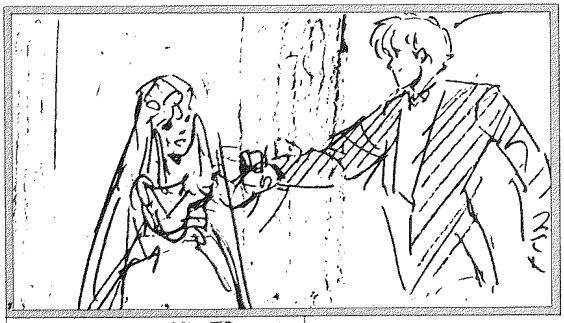
ふたりの周囲や頭上で、ネオンやイルミネーションが光る。

コスチューム・マシンルーム――台の上に乗ると、レーザーフォログラムが、乗った人に衣裳を投映する。

輝が台に乗り、ミンメイがそれに続く。



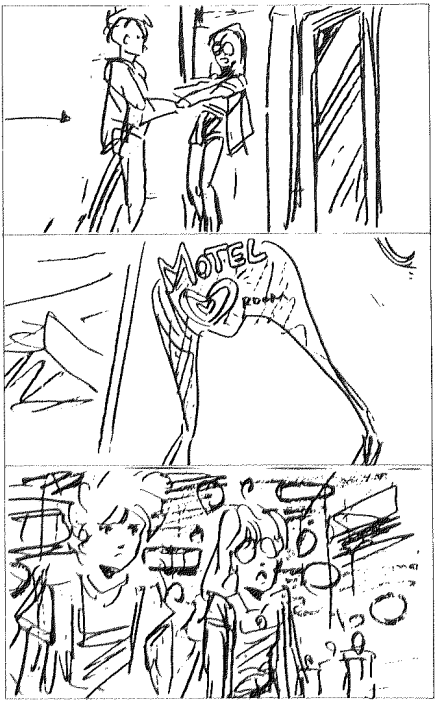




白いドレス、ベール、ウエディングドレスのミンメイ。輝は隣りの台で、白いタキシードに変る。

タキシード姿の輝が、ちょっとてれくさそうにミンメイを見てニッコリと笑う。

ふたりとも、自然に手をさしのべる。しかし、近づけば、光からはずれてもとのふたりに戻る。



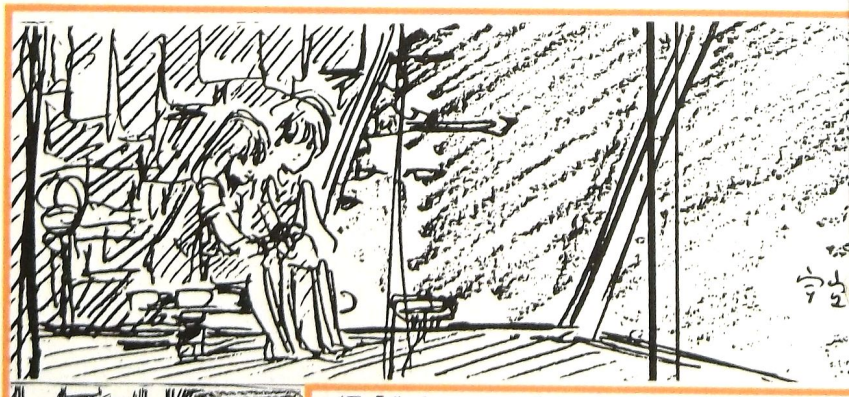
ミンメイは喫茶店へと輝をさそう。だが、輝はけげんな表情でミンメイに向かって上を指さす。

そこはモーテルの入口だった。ミンメイは一瞬、え～っ、となるが、すぐさま輝を見て、輝のせいだといわんばかりに、彼の背中をおして他へ行こうとする。

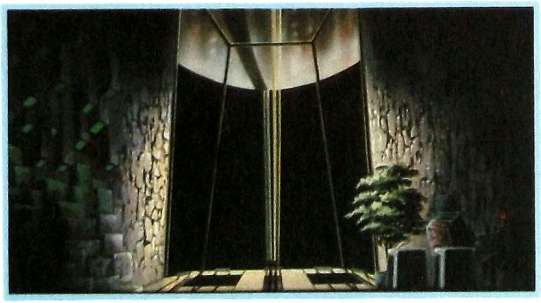
街。ふたりは、ハンバーガーショップに入った。カウンターのふたりに、別の客が注目する。どうやら、ミンメイだとわかったようだ。ふたりは、そそくさと店を出る。

ネオン、街灯の光——その中をふたりが走ってゆく。
ＳＥ（走る音。エコーかける感じ）

宇宙が展望室のガラスに広がっている。うす暗く、人気がない。
ＳＥ（艦内音。ゴォ～）
すわっているミンメイと輝。
ミンメイ「いやになっちゃった……。今の暮らし……」



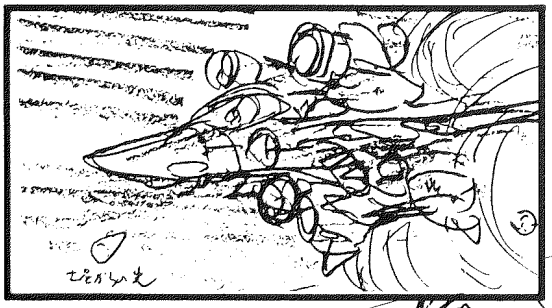
輝「歌手になるの夢だったんだろ!?　少しくらい我慢しなくちゃ」
ふたりのいる展望室に、柔らかな光が入ってくる。急に明るくなった展望室。
ミンメイ「!!」



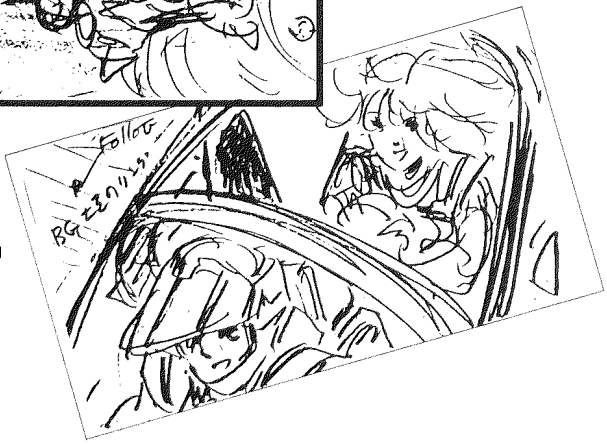
窓の外、土星が垂直に輪をまとった形で現れる。独特のシマ模様、何重もの輪。柔らかい光が、全天を覆う。
ミンメイ「きれい!!」

ふたりは立ち上がって、土星を見つめる。まるで、手を伸ばせばつかめるようなところに、巨大な惑星の表面が見える。
ミンメイ「行ってみたいな……あんなとこ」

ＳＥ（ジェット音。画面に先行する）

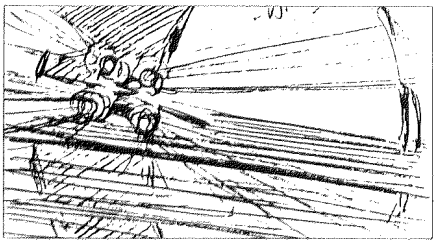


白い噴射ガスの尾をひいて、バルキリー複座タイプが飛ぶ。
コクピットには、輝とミンメイのふたり。



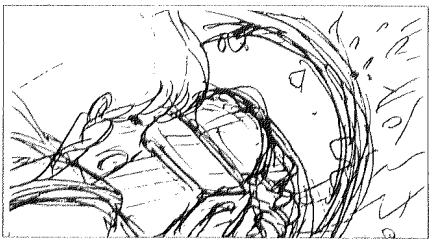
ミンメイは、ヘルメットをとって頭をふる。髪が広がる。
ミンメイ「ファーッ」

バルキリーは、土星の輪をスレスレに飛んでいく。機体がオレンジに塗られた練習タイプだ。



ミンメイ「でも、かってに使ってしかられない？」

輝は、質問には答えずにスティックを操作している。
輝「いいもの見せてあげようか!?」
ミンメイ「え？」



バルキリーは、土星の輪の表面をそぐように飛ぶ。細かい氷片がコクピットをたたく。

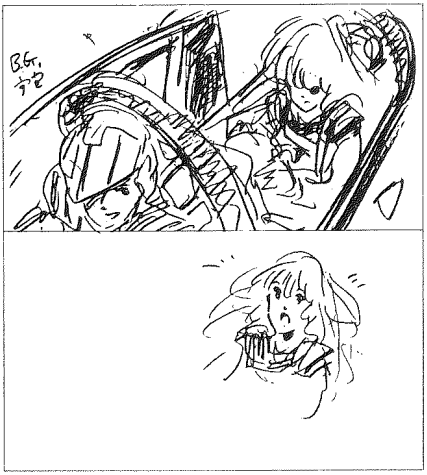
輝は、バルキリーをガウォークに変え、逆噴射。90度まわって慣性で漂う。

輝「さぁ、目を開けてごらん」

そっと開いたミンメイの目に…

ミンメイ「うわあっ」

虹!!　土星の輪に反射した光が円形の虹を作っていた。七色の虹が幾重にもなって、その中心にふたりの乗るバルキリーが、静かに浮かんでいる。



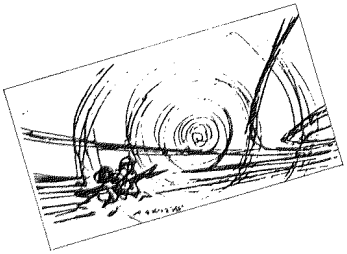
ミンメイ「すてき！」

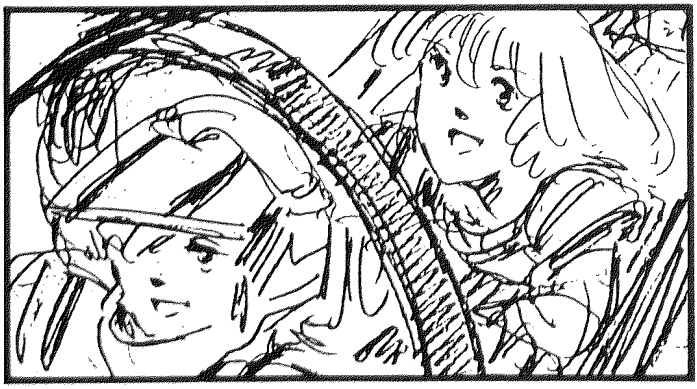
輝「土星の虹さ」

ミンメイは、思わず後席から、輝の背に飛びつく。

ミンメイ「うわあ。もう、最高！」

虹の中、バルキリーが漂っている。





美しい土星。巨大な球の周囲に、うすいベールのような輪が広がっている。ところどころに、かさのような星間物質の雲。

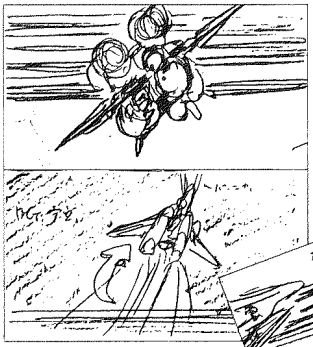
その中を、ふたりの乗るバルキリーがゆく。

歌（SUNSET BEACH）

コクピットの中で歌っているミンメイ。聞いている輝がニッコリ笑う。

土星を背景に、自由に飛びまわるバルキリー。ときどき、バルキリーの噴射で、輪の表面が切り裂かれる。

まるで、アクロバットのように飛ぶバルキリーと、コクピットのふたりが、交互にカットバック。

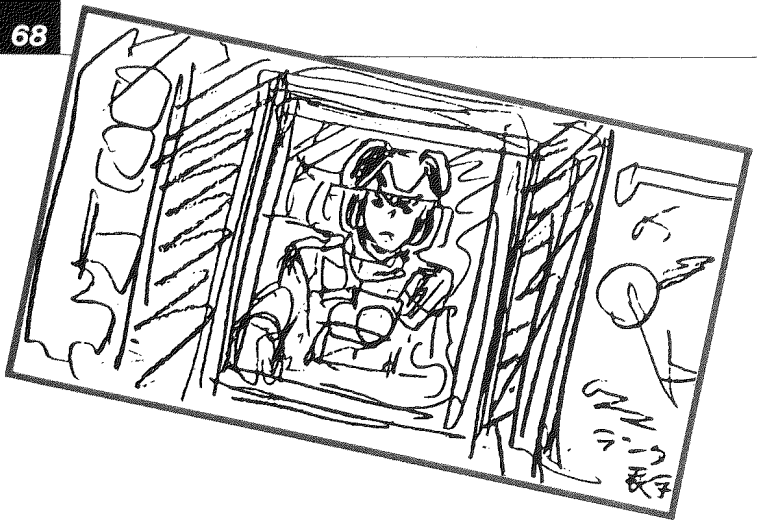


ガウォークに変形し、脚部で氷塊をけってゆくバルキリー。クルリと反転して飛ぶ。

コクピットのむこうには、機体の回転に合わせてまわる土星が見える。やがて、回転が止まると、土星ももとの位置に戻る。

ミンメイにとっては、本当に初めての光景が続く。輝にしても、憧れのアイドルとの宇宙散歩など初めてである。自分たちが、バルキリーを無断借用したことなど、今のふたりは、とっくに忘れている。

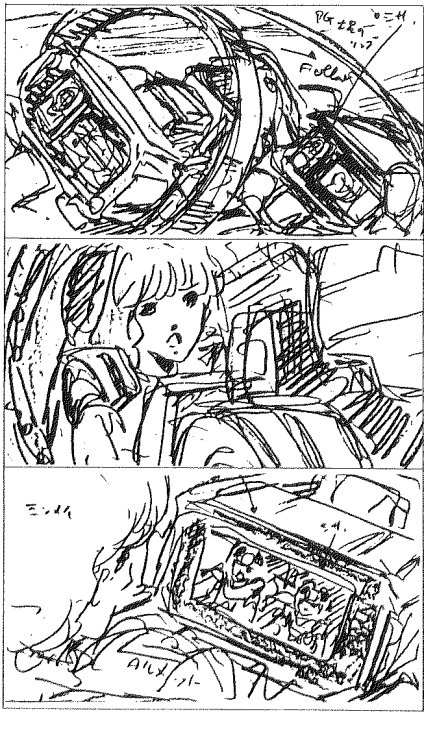
土星、リング、氷の小さな粒、その中を行くバルキリーが、時おり、土星光を反射してキラリと輝く。

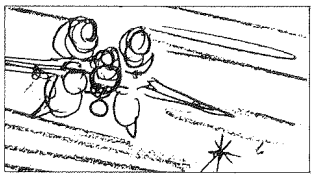


歌（SUNSET BEACH）「波乗り　太陽　ペンダント　サンセット……」
　ミンメイの前のパネルに光が入る。ハッと歌をやめるミンメイ。
ミンメイ「あっ！」

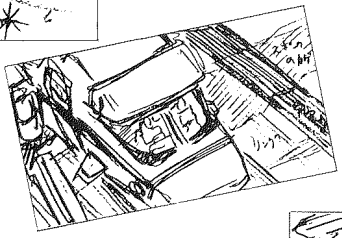
　パネルには、未沙の顔。少しばかり心配しすぎて、怒ってしまったという表情だ。
未沙「かくれたって無駄です。ミンメイさん！」

　その声に、シートに顔を伏せていたミンメイが、あきらめて起き上がる。
ミンメイ「すみません……」
　未沙は、今度は輝を責める。
未沙「あきれたわ。バルキリーを私用で使うなんて」
ミンメイ「輝が悪いんじゃないわ。私が無理やり頼んだんです！」

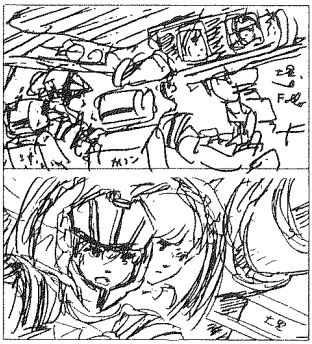




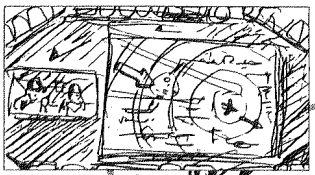
カイフン「ミンメイ、早く戻るんだ！」
　未沙のシートの隣には、カイフンがいる。
カイフン「軍のお偉方には手を打ったが、君に対しては容赦しないからな!!

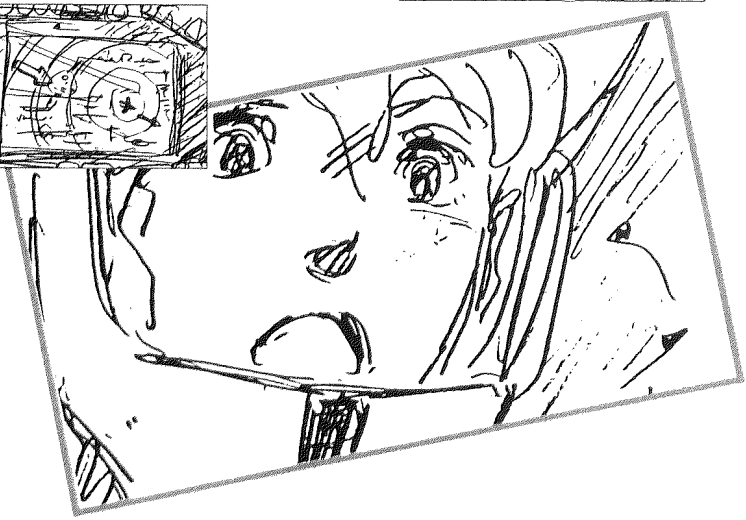


輝「わかってます。厳罰は覚悟のうえです」
カイフン「なんて軍人だ。早く戻りたまえ！」
　そのとき、機内の警報が鳴った。

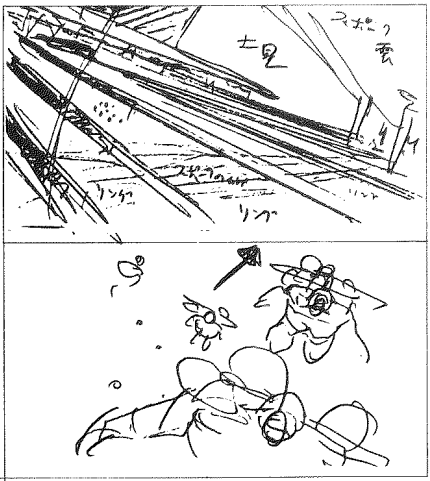


　レーダースクリーンには、接近する敵のシンボルパターンが映っている。
輝「やばーっ！」
　土星方向から、ヌージャデル・ガーが約10機、輝たちに迫ってくる!!





土星をななめに断ち切るような輪の上を、豆つぶのような編隊が進む。近づくとそれは、確かにヌージャデル・ガー！



輝たちは、機首を返すと、マクロスへ進路をむけた。

カイフン「敵機だ！」

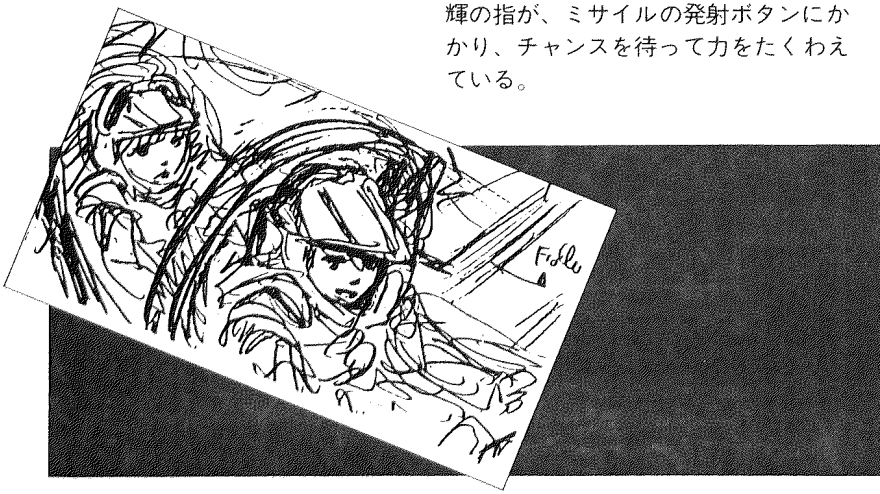
未沙「わかってます――早瀬です。フォッカー少佐の部屋へ、至急まわしてください」

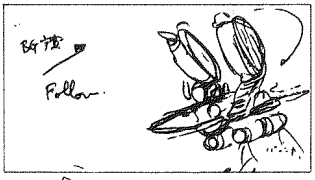
ミンメイ「輝……」

輝「大丈夫、僕にまかせて!!」

輝は、バルキリーをガウォークにして、制動をかける。クルリと背面宙返りのように機首を180度回す。

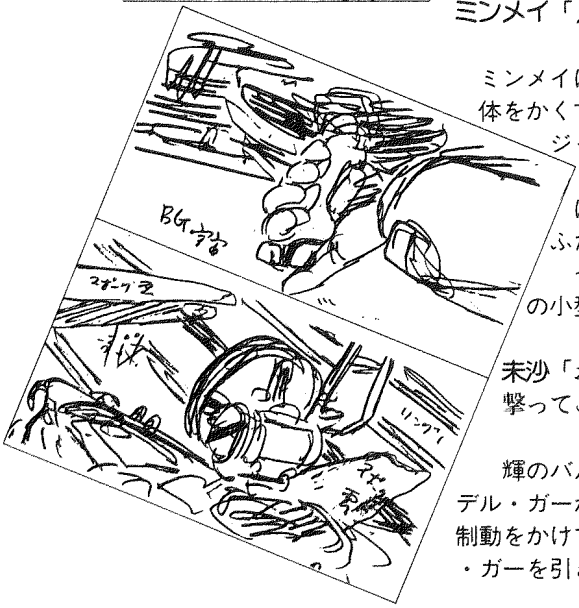
コクピットの中――パネルには、敵のパターンがいくつか明滅している。輝の指が、ミサイルの発射ボタンにかかり、チャンスを待って力をたくわえている。





コクピットの輝の手が、スイッチを押す。１度、２度――不発!?

輝「いけねえ。こいつ、訓練用だった！」
ミンメイ「えーっ！」

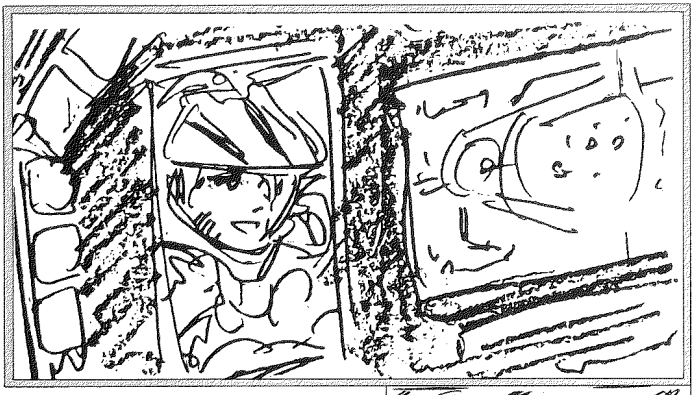


ミンメイは、あきれて輝の陰に体をかくす。前方から迫るヌージャデル・ガーが、反転しようとする輝機をはさむつもりか、上下ふた手に分かれる。

そのむこうでは、未沙の小型艇も襲撃されている。

未沙「おかしいわ!?　なんで撃ってこないのかしら……」

輝のバルキリーに、ヌージャデル・ガーがとりつく。輝は、急制動をかけて反転。ヌージャデル・ガーを引き離す。



敵の１機が火の玉と化す。ついで、輝の目の前のパネルに、フォッカーの顔が――。

フォッカー「こらーっ、輝!!　また、面倒かけやがって……。ウイッ！」

輝の顔に見る見る生気が戻る。

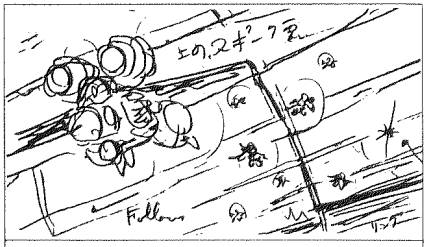
輝「先輩っ！」

追撃される輝のバルキリーに近づく光の点。フォッカー機である。コクピットでは、酒を飲んで、少しばかりいいご機嫌のフォッカーが、スティックを握っている。

フォッカー「だけど、よくやった。男は、そのくらい積極的じゃなくちゃ、女はものにできん！　ヒック」

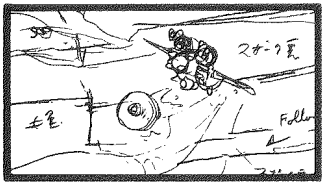
輝「先輩、酔ってますね!?」

フォッカー「ばあろーっ！」酒がこわくて戦ができるかあ!!」

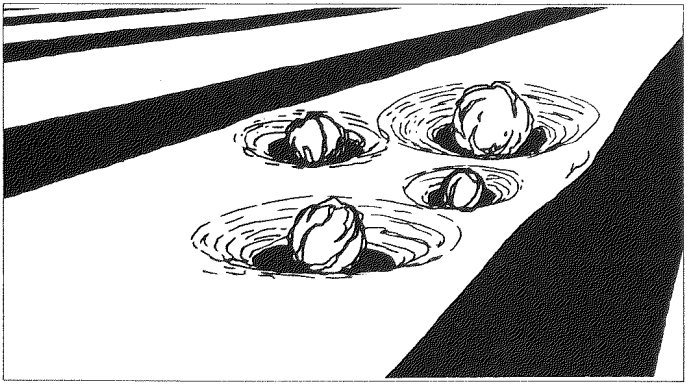


少しばかりではなく、そうとう飲んでいるらしい……。

フォッカーは、叫びざまに第２撃を発射する。気づいてよけようとしたヌージャデル・ガーのうちの数機が、一瞬にして消える。土星の輪の表面に、ポッ、ポッと穴があく。衝撃波である。

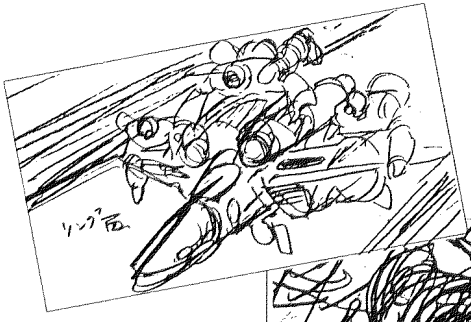


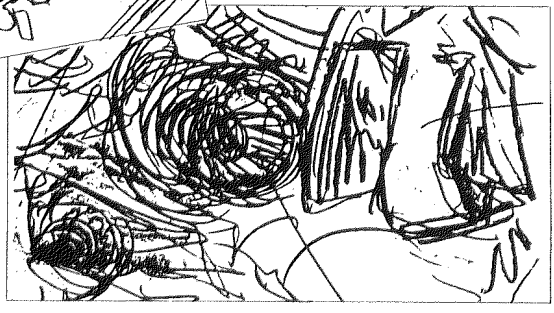
輝「スゴイ!!」

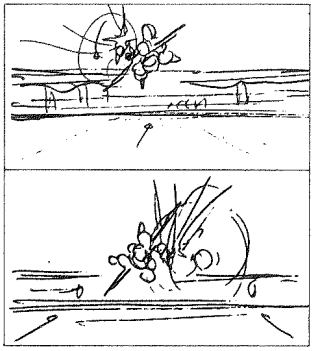


突然、輝機は身動きができなくなる。３機の敵が、バルキリーに取りすがったのだ。

ミンメイ「キャーッ」
輝「ちきしょう……」



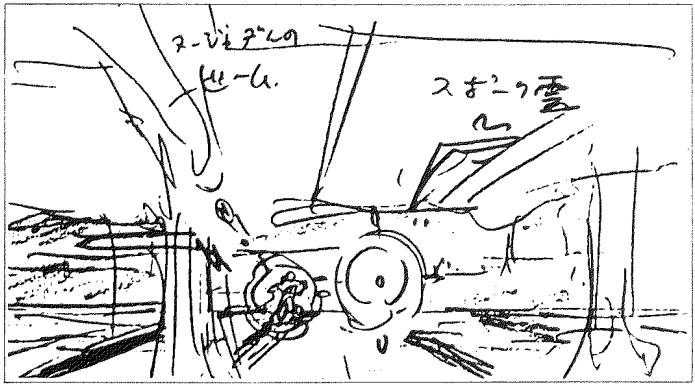




フォッカーは、バルキリーの能力いっぱいに戦っている。撃つ、ビームがゆく、爆発するヌージャデル・ガー!!
またもう一発、敵を貫くビーム。貫通孔に火花がスパークして、ドンと爆発する。

フォッカーの腕は確かだ。敵のビームをかわしながら、次々と照準を合わせ、撃つ、撃つ!!

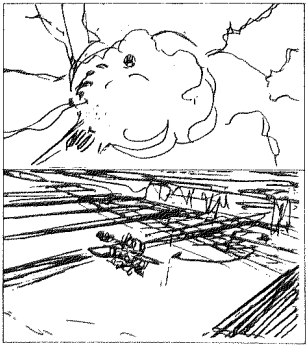
リング状の雲を抜けて、さらに上昇していくフォッカー機。白く航跡が残る。

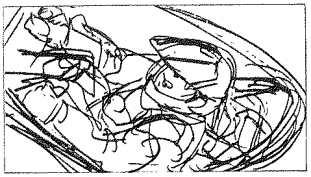


フォッカー機は、輪の表面に影を落として輝機を追う。しかし、すでに輝のバルキリーは、両主翼と機首をヌージャデル・ガーに、ガッチリとおさえられ、自由を失っている。

さらに、未沙とカイフンの乗る小型艇も、ヌージャデル・ガーにとりつかれてしまった。

コクピットのフォッカーが、パネルに目をやる。そこに、ピンチに陥った輝機が映し出された。





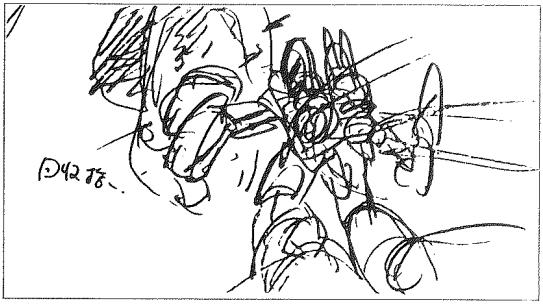
フォッカー「見たか!? 輝、おおっ!?」
リングの上、3機の敵に連れ去られようとしている輝機！
フォッカー「しまった!!」

すでに輝のバルキリーは、敵母艦の近くへと移動している。未沙機もまた、同じように敵艦へ――！

フォッカーは、全速で2機を追った。

フォッカー「まずい!!」

敵艦に連れ込まれたら、2機の運命は決したも同然である。フォッカーは、敵艦へと全速で接近！
前方に敵艦が大きくなってくる。フォッカー機が急激にファイターからバトロイドに変形した。



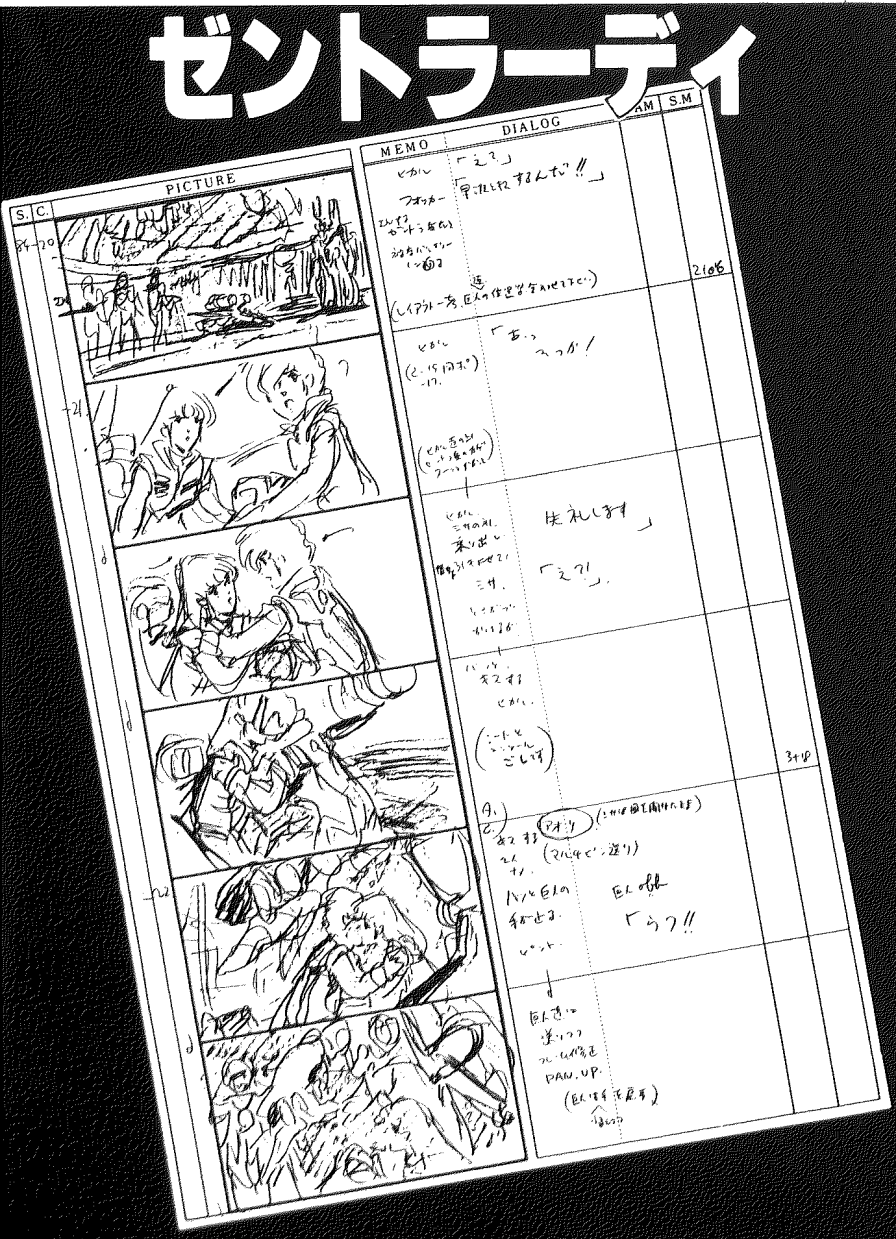
バトロイドになったフォッカー機が、敵艦のシャッターをくぐり抜ける。その直後に、シャッターが閉じる。間一髪!!

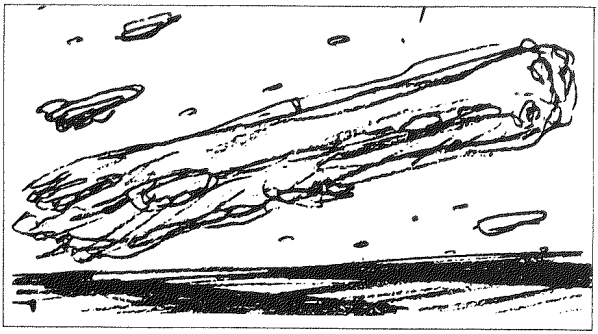
エアロックに立つフォッカー機の前に、ズラリと並んだ敵兵。すべて銃をかまえている。

フォッカー「う……、うっ」

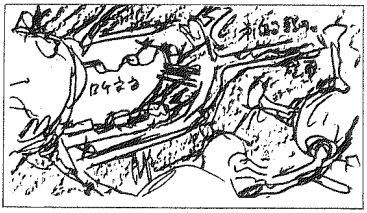
バトロイドがガンポッドを捨てる。うす闇のエアロックの中で、巨人兵に囲まれているフォッカーのバトロイド。

ゼントラーディ

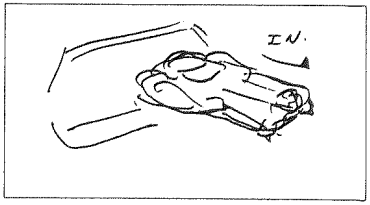




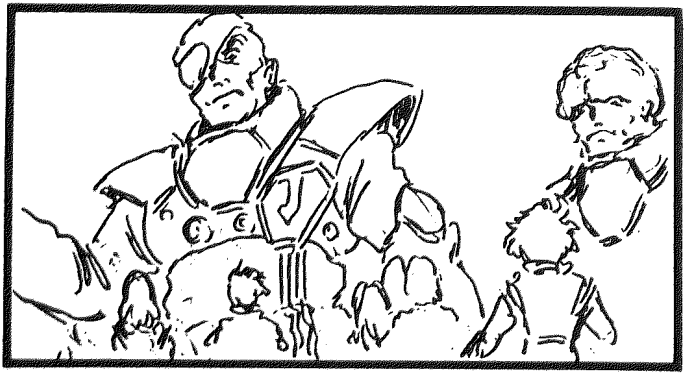
土星のリングによりそうように、巨大なブリタイ艦が浮かんでいる。
その船腹にある巨大なエアロックが開いて、回収艇が帰還した。輝たちを捕らえた船である。



ゼントラーディ軍に捕らえられてしまった輝、未沙、ミンメイ、フォッカー、カイフンの５人が、白い不透明の壁を背にして立っている。カイフンは、ミンメイをなぐさめている。そのとき――。
ＳＥ（巨大な音が近づく。ドーン、ドーン）



振動にゆらめく５人が、いっせいに振りむくと、その正面の壁が透明に変わり巨大な人影がのぞく。ブリタイとエキセドルだ。
全員「ハッ！」



驚く５人にむかって、ブリタイが顔をつき出してのぞきこむ。
ミンメイ「キャーッ！」

思わず後ずさるフォッカー、ミンメイ、カイフン。輝は、前に出ている。
全員「(アドリブ)ワーッ！」

フォッカーも未沙も、輝、ミンメイ、そしてカイフンも、信じられない思いでこの巨人を見つめている。

ブリタイは、めずらしそうにカプセルをのぞきこみ、エキセドルもまた、５人を観察する。

エキセドル「デブランの言語は、すでに変換可能だ。ゼントランの質問に答えよ！」
ブリタイ「なぜ男と女のマイクローンがいっしょにいられるのだ？」
５人には、彼らの質問の真意がわからない。
ブリタイ「なぜ戦わんのだ？」
フォッカー「戦う!?冗談じゃない。女は戦うよりも、抱くほうがいいに決まってるだろうが！」

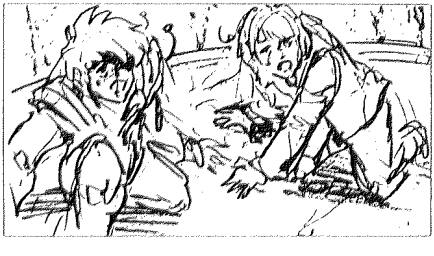
フォッカーは、ミンメイを抱き寄せる。

ブリタイ「お前たちは、男と女でそのようなデ・カルチャをしておるのか!?」
フォッカー「ああ。キスだって何だってしてる」
ブリタイ「キースー!? キースーというものをしてみろ！」

ブリタイの手が、カプセルの中へ！ 透明なカバーが砕け、破片が散る。そして、ミンメイをつかみ上げるブリタイの手。
ミンメイ「キャーッ」
カイフン「ミンメイ!!」
輝「なにするんだ」

ブリタイは、ミンメイをカプセルの外へとり出し、輝たちをにらみつける。

巨大な手の中のミンメイは、苦しそうに身をよじる。
ミンメイ「う……うっ」
しかし、ブリタイは、しっかりとミンメイを握りしめている。



ブリタイは、ある種の混乱に陥っているようだ。
ブリタイ「キースー、マーカウケイ」（キスというものをしてみろ）
ブリタイの下で見上げている輝たち４人。

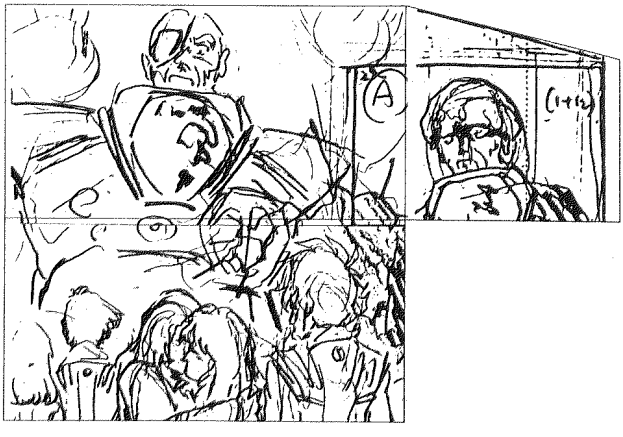
カイフン「おれがキスする！ おろせ」
輝たちは、思わずカイフンを見る。

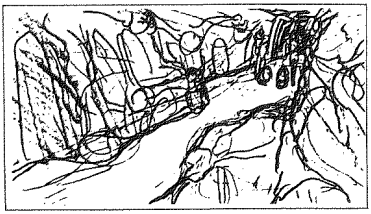
ブリタイの胸の光が、強弱を繰り返している。巨人たちの精神的な反応の表れなのだろうか。

ブリタイ「よろしい！ マーカウケイ!!」

ブリタイの手が、再びおりてミンメイを離す。少しよろけてミンメイはカイフンの腕の中へ。
カイフン「早く演技するんだ。殺されるぞ」
ミンメイ「え〜っ、あ……」
さすがに、ちょっと抵抗するミンメイ。しかし、カイフンは必死である。

ブリタイ、エキセドル「おうっ」
輝たちがふたりを見上げる。

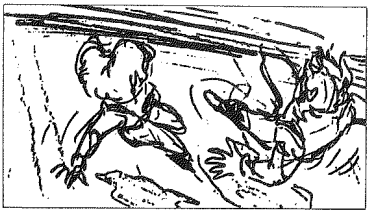




艦内の歩行用通路。ふたつの透明カプセルに入れられた輝たちが、兵士によって運ばれてくる。ところが、途中で、ミンメイとカイフンのカプセルが、輝たちとは別室へ連れていかれる。

輝「ミンメイ……」
別室へ入れられたカプセルからも、ミンメイが輝を見送る。
ミンメイ「輝……!!」

輝の視界からミンメイのカプセルが消えた。輝は、透明の壁に力なく寄りかかる。
輝「……ミンメイ……」
フォッカーと未沙は、敵を分析しているようだ。
フォッカー「やつら、なんでキスくらいで驚いたんだろう!?」
未沙「男と女が戦ってるみたいだったけど」



ＳＥ（爆破音。ドカーン）

外壁が爆破されたようだ。衝撃で、未沙とフォッカーがよろめく。再び、爆発。
ＳＥ（爆発音。ドカーン）
衝撃で、カプセルを載せたカートがひっくり返る。

外壁を破って、突入してくるミリアのクアドラン・ロー。乱射!!
兵士ふたり「うわぁ～」
ドンと床に倒れる兵を飛び越えるミリア機の足。

衝撃のため、輝たちのカプセルは割れてしまっている。ガラスのような透明な壁の破片から、輝、未沙、フォッカーが起き上がる。
フォッカー「みんな、無事か!?」
未沙「ええ」
輝「なんとか」

カプセルから出たフォッカーは、ふたりを連れて走り出した。バルキリーを取り戻すつもりなのだ。
輝「了解!!」

艦内は、すでに混乱状態だ。
ＳＥ（警報）
声「メルトラン（メルトランディ） ガドラ（侵入） ケルカス！」

輝たちの脱出が、司令室に報告される。身を乗り出すブリタイ。

ブリタイ「アルマ ダカン(全艦非常体制!) トォガドラ! メルトラン(敵機をせん滅し) ウ・デ・ザンツ タルニ マイクラン(マイクローンを捕獲せよ!) ホルト、ウ・ギルツ ――ナ、メルトラン ガドラケルカス デ・カルチャ(女どもの侵入を許すとは)……」

エキセドルは、怒るブリタイに進言する。

エキセドル「アルマ ダン(残った2体の) ギルデスタ マイクラン(マイクローンだけでも) エルケストウケイ トオ(ボドルザー司令の) ゴル・ボドルザ(もとへ届けねばなりません)な」

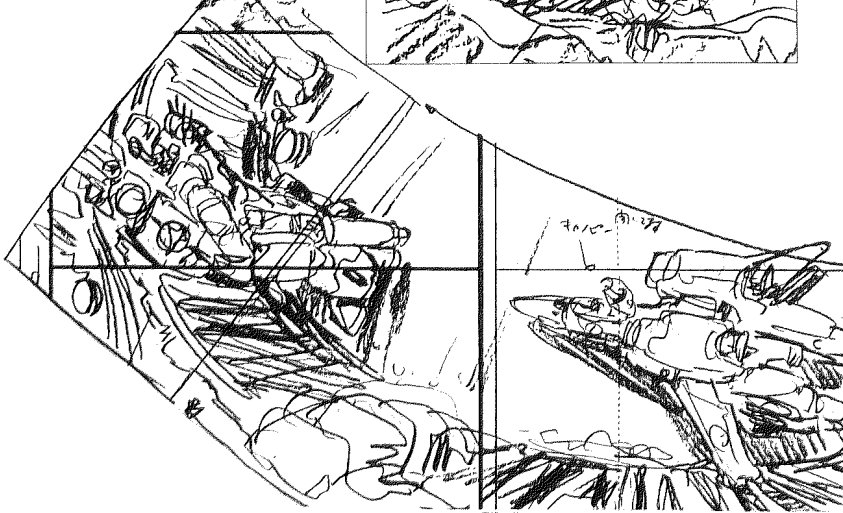
ブリタイ「ウム(うむ)」

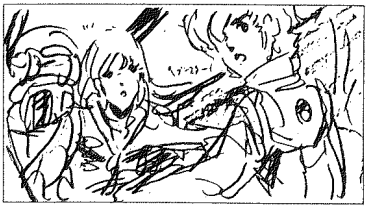
巨大なメカの間を走る、小さな3つの人影がある。輝、フォッカー、そして未沙。メカの間から下をのぞくと、そこに2機のバルキリーがある。

フォッカー(off)「あったぞ!」

輝(off)「ええ!!」

艦内は、さらに混乱している。



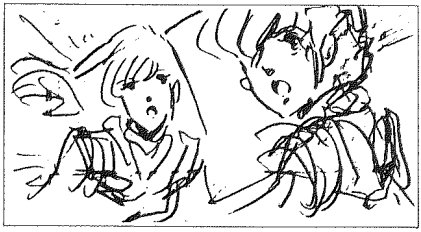


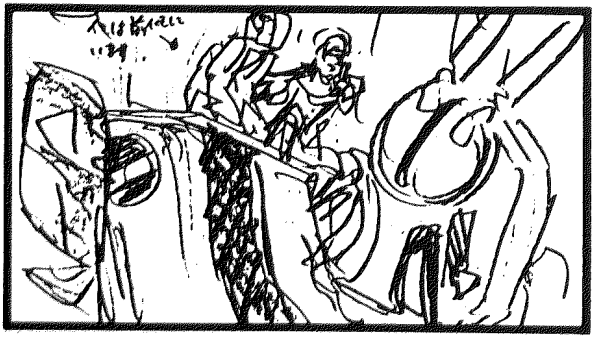
足音にハッとする3人。コクピットで振りむく輝と未沙。
輝、未沙「あっ!!」

ゼントラーディ兵が、銃をかまえて近づいてくる。
輝「しまった!!」
未沙「キャーッ」
バトロイドの上からフォッカーが叫ぶ。
フォッカー「輝、キスをするんだ」

パイプとパイプの間を、輝たちが滑りおりる。輝とフォッカーが、それぞれの愛機に飛び乗る。輝が、後席に未沙を乗せようと手を伸ばしている。

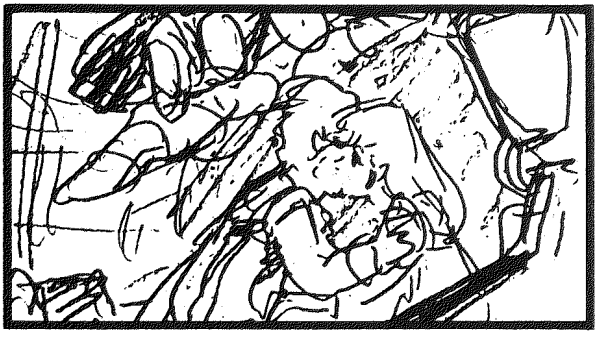
3人のいる方向へ、足音が近づいてくる。ゼントラーディ兵の一群が、銃をかまえて走る。





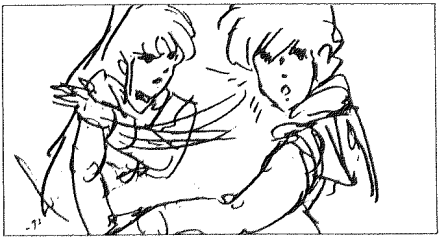
輝「あっ、そうか！」
　輝たちの上に、ゼントラーディ兵の影がスーッとかかる。

輝「失礼します！」
　輝は、あわてて未沙の肩に手をかける。一瞬、未沙は身をひくが、輝はかまわず、抱き寄せる。
未沙「えっ!?」



　Kissするふたり。巨人たちの動きが、止まる。
巨人㋑(off)「うっ!!」

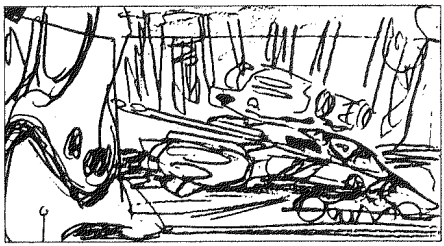
　巨人は、体をふるわせる。ふたりに伸ばしかけた手が、大きくふるえている。



巨人イ「ヤ、ヤック……デ・カルチャ!!」
　巨人兵は、思わず1歩さがる。

　パンッ！　と輝の頬が鳴った。
未沙のビンタ1発。
輝「いて！」
　輝は、頬をなでる。
輝「ひでえな」
未沙「さっさと発進しなさい！」
輝「チェッ。言われなくたって」
　輝は、コクピットにすわる。

輝「ミンメイを助けなくっちゃ」



　輝のバルキリーが始動する。バーニヤの噴射が、床に白い煙を広げる。

　ちょっと垂直に上がったバルキリーが、脚を出してガウォークになった。

　巨人兵が銃を構える。さすがに、このまま輝たちを見送る気はない。
　ホバリンクで、向きを変えようとするバルキリーに、巨人兵たちが、ゆっくりと近づいて行く。

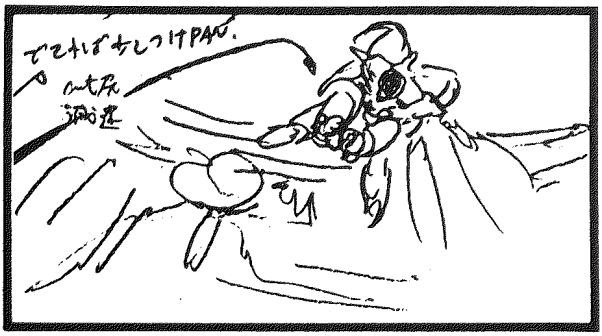
そのとき――!!

バルキリーに迫る兵士たちの後方で、壁が爆発した。振りむく巨人兵たちの目に、突入してくるミリアのクアドラン・ロー!!

あわてて飛びのく巨人兵をけちらして、ミリア機が画面いっぱいに迫り、脚部をおろす。

その際に、輝と未沙のバルキリーは、方向転換して、重攻撃機の下にかくれる。

突入したミリアは、バーニアをふかすと天井いっぱいに上昇。下の巨人兵にむけてすさまじい一連射を浴びせる。たちまち、ボロ屑のように数人が撃ち倒された。



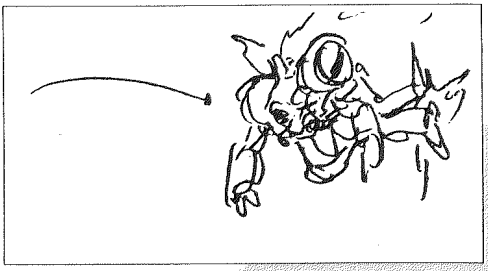
ミリアを追って来たヌージャデル・ガーが、天井にむけて発射。ミリアはこれをかわして、反撃。ヌージャデル・ガーが1機、炎と化す。

さらに降下して攻撃するミリア！

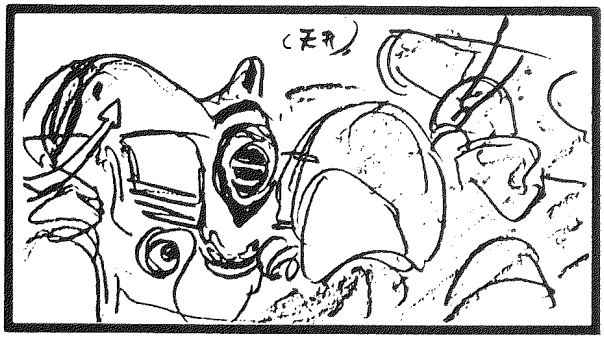
天井をけって、急速に降下するミリア機。その機動性は、敵のヌージャデル・ガーより、数段上のようだ。

すでに、ミリアを追ってきたヌージャデル・ガーは1機しか残っていない。す早く動きまわるミリアのクアドラン・ローに、連射を浴びせるが、効果はない。

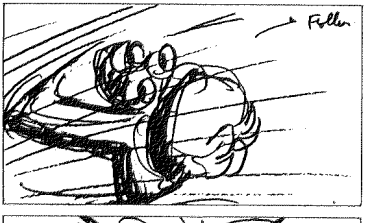
巨人兵のバトルスーツ同士のすさまじい戦いである。軽快に飛びまわるミリア機に対して、床のゼントラーディ兵は、ヌージャデル・ガーの重火器で対抗する。



急速に降下するミリア機に、スージーデル・ガーが連射する。だが、ミリアは、その直前に着地。マージャデル・ガーの動きを封じてしまう。

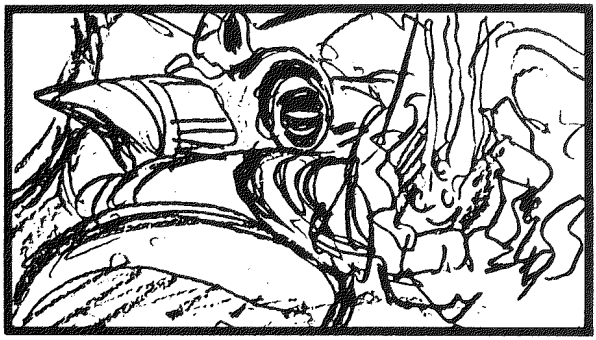


グーンと突き出されるクアドラン・ローの腕。その先には、3連装のビーム砲が……！



思わず身をひくヌージャデル・ガーの頭部に、クアドラン・ローの腕が命中する。

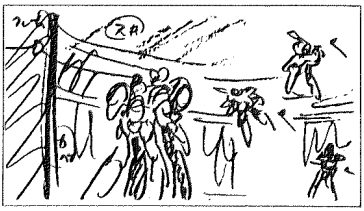
粉々に砕け散る、ヌージャデル・ガーの頭部。ヌージャデル・ガーのパイロットの鼻先に、クアドラン・ローの3連装砲口が不気味に光る。



ビームが、パイロットをふき飛ばす。ビームが、ヌージャデル・ガーを貫通して、あたりを白く浮かび上がらせる。

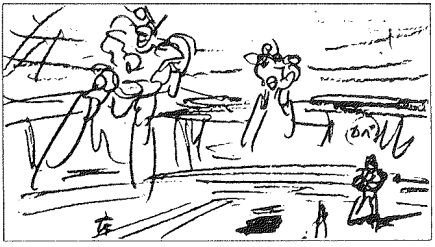
コクピットのミリアが笑う。
ミリア「フン。アルマ・デ・リーマ」

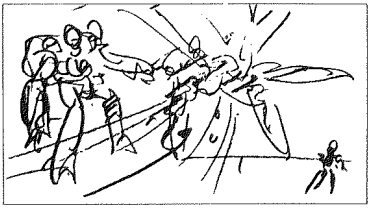
ミリア「ンッ！」



ミリアの後方から、さらに新手が近づいてきた。ヌージャデル・ガーと巨人兵。それを見て、ミリアはニヤリと笑う。

ヌージャデル・ガーを突き刺した形の、クアドラン・ローの手が動いた。ヌージャデル・ガーの頭部をつかみ、それを持ち上げるミリア機。クルリと敵に振りむいたとたん、一連のビームが発射される。



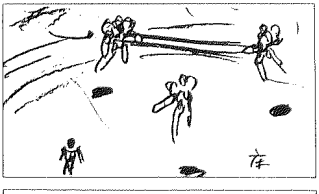


ミリアは、壊れたヌージャデル・ガーを、近づく敵に投げつける。ヌージャデル・ガーは天井までふっ飛び、赤い炎の球となって散った。

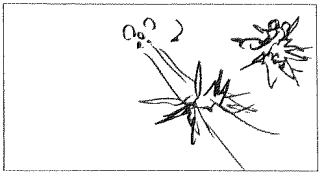
爆発のあおりをくって、追撃隊のヌージャデル・ガーと兵士がよろける。ミリアの戦宣布告だ。

コクピットのミリアが、敵をにらみつけ、さらに攻撃に転じる。すさまじい光をまいて、ミリア機のバーニヤが咆哮する。

ミリア機は、バーニヤをふかせたまま、敵の中心に躍りこんだ。ミリア機を囲むヌージャデル・ガー２機と、床の兵士たち。すべてが静止したような一瞬！

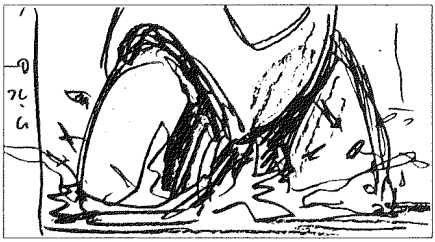


ミリア機が動いた!!



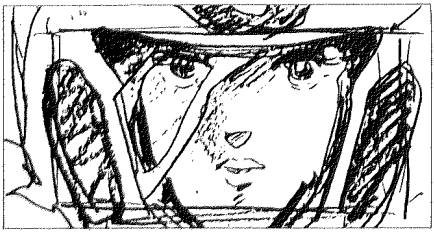
ビームが手近のヌージャデル・ガーを貫通し、そのまま床上の兵士を射ちぬく。あまりのす早さに、もう１機のヌージャデル・ガーは、手を出せない。その機体にも、ミリアのビームがくいこむ。

床に、ヌージャデル・ガーの破片が落ちる。パイロットの死体が、床に血のにおいをふりまく。それをふみつぶして、ミリアのクアドラン・ローが着地する。



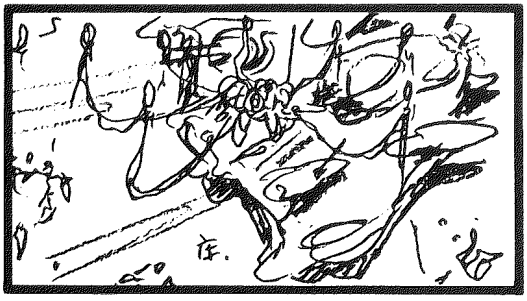
巨人兵対巨人兵の戦い——生まれたときから死を迎えるまで、戦い続ける宿命にある男と女。

ミリア機は、床の中央に立って、あたりを見まわす。すでに相手になる敵はいない。わずかの間に、全滅していた。



ミリア「デャンツ……！　マーカ　ミリア　テレルケ　マドラス　デ・アルケス」
（情けない　私と　互角に戦えるやつは　いないのか）

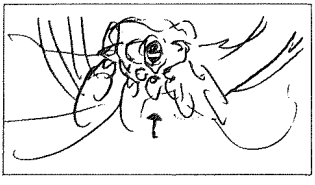
ミリアは、厳しい目つきで、周囲を見まわす。

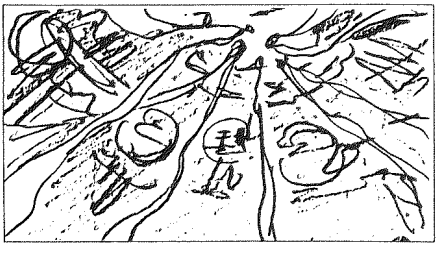


ミリアのクアドラン、ローが、輝たちのかくれている重攻撃機を足場にジャンプする。

そして、天井にむけて小型ミサイルを発射！ミサイルを追うように、ミリア機も急上昇していく。

空中に白い航跡——。

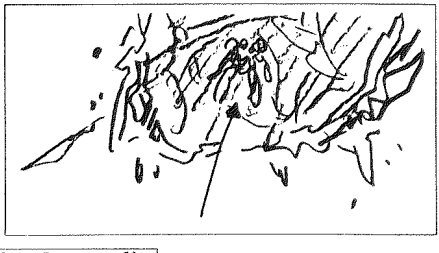




吸い込まれるように天井に消えるミサイル群——一瞬の間の後、ドーンと爆発が広がる。その炎のおさまらないうちに、ミリア機は、新たに開いた天井の穴から、脱出していく。

輝「……すげえ！」

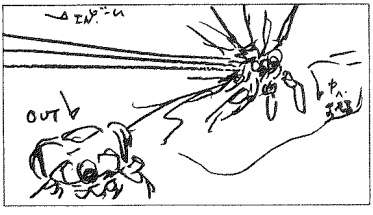
重攻撃機の陰にかくれていた輝は、この一部始終に目をこらしていた。



ミリア機は、格納庫の天井を破って、上層へと脱出した。そこに集結してくる仲間――数機のクアドラン・ローがミリア機の周辺に集まってくる。

そのうちの1機にビームが命中して、バランスを崩して落下していく。

逆噴射もかけずに、クアドラン・ローは床面に激突した。すでにパイロットが傷ついているようだ。



落下したクアドラン・ローが上体を起こす。そして、ハッチが開いて、女性の巨人兵が姿を現した。胸部のパネルが、不規則に明滅している。

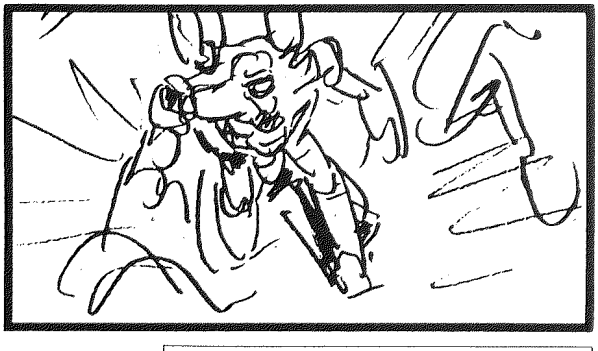
ゆらりと体がゆれて兵士はあおむけに倒れる。

胸のパネルが一瞬、強烈な光を発したが、すぐに消えた。兵士の命の終わったときであった。

輝「女だ！」
未沙「男と女が戦っている……!?」
輝「どうなってるだ…」

倒れた女性兵士を見て、輝も未沙も驚きからさめない。そんなふたりに、フォッカーが叫ぶ。
フォッカー(off)「輝!!」

フォッカー機は、脱出の位置につく。
フォッカー(off)「今のうちに脱出だ!!」
輝「了解!!」
だが、天井から新たな敵!!

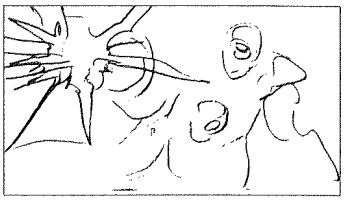


未沙「キャー!!」

上空から、カムジンのヌージャデル・ガーが、フォッカー機めがけて降下する。そして、着地と同時に、フォッカー機のパトロイド頭部に、ハンドガンの銃身をたたきつけた。

無残に頭部をつぶされたフォッカー機がよろける。
カムジン「ホルト（逃がすか） ギルツ！
マイクラン（マイクローンめ）」

ヘルメットのバイザーの中で、カムジンの顔が笑っている。
輝は、思わず機を発進させ、カムジンにつっかかる。
輝「わあーっ！」



輝に気をとられたカムジンの背後から、フォッカーが、ガンポッドを発射した。
カムジン機の胴体が、熱い煙を噴く。
カムジン「デ、デラン（やろう）!!」

スパークを発する機体もかまわずに、カムジンはハンドガンをフォッカー機にむけて、引き金を引く。

フォッカー機の全身に、穴が開く!!

カムジンのヌージャデル・ガーもコントロール不能になる。コクピットから、カムジンが脱出！

床をころげながら、フォッカー機に近づく。とたんにヌージャデル・ガーが爆発する。

カムジン「ウォーッ」

カムジンは、素手でフォッカー機のコクピットをたたく。

フォッカー「うわっ」

輝は、フォッカー機の近くをまわる。手が出せないのだ。

輝「先輩!!」

フォッカー「来るな!! ミンメイを助けに行くんだ!!」

輝は、しかたなしに機をまわす。

カムジンの手が、コクピットの外板をひきはがしていく。

巨人とマイクローン——ふたりの戦士が、目と目を合わせる。迫るカムジンをにらみつけるフォッカーの目が輝く。

フォッカーの手がすばやく動いて、ガンポッドを、カムジンの背中につける。撃てば、カムジンもろとも、自分にも命中する位置だ。

一瞬、事態に気づいたカムジンの表情が凍りつく。

フォッカーは、ゆっくりと、スティックのガンポッド発射ボタンに手をかける。

発射!! カムジンを貫いた弾丸が、フォッカーと愛機をも傷つけた。

ヘルメットのバイザーの中が、カムジンの血であふれた。フォッカー機と重なるように、カムジンは倒れる。

スパークが飛びかっている、フォッカー機も、致命的負傷を受けたようだ。

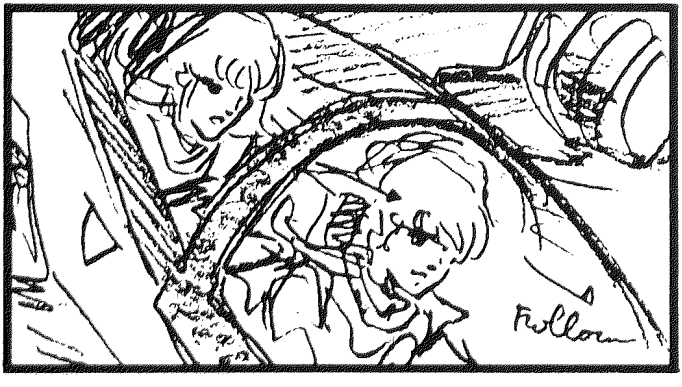
フォッカー「なあ、輝……、クローディアによろしくな……」

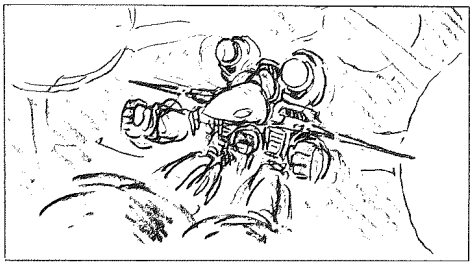
爆発!! 周囲が赤く染まる。

フォッカー機の爆発の中を、輝のバルキリーが上昇していく。
輝(off)「先輩!!」
輝は、思わずスティックを下にむける。
未沙(off)「いけないわ！――少佐の死をムダにしては……」

輝「あんたって人は……！」
思わず後席を振り返った輝の目に、瞳をうるませて悲しみに耐えている未沙が映る。
輝「……ああ……」

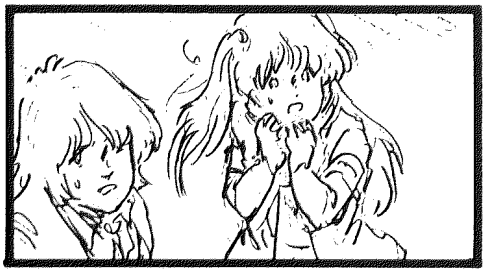
未沙は後席から、つとめて平静を装って命令する。
未沙「（ちょっと息を整えて）ミンメイさんには、発信器を取りつけてあります。反応のほうへむかってください」
輝は、スティックを握りなおして、前方に目をやる。
輝「……了解……」





外では、なおゼントラーディ軍とメルトランディ軍の戦いが続いているようだ。

ブリタイは、ボドル基幹艦隊へのフォールドを命じる。
声「ガーマ ウカラ ズ・ザルク」（エネルギー・レベル上昇）
声「ゴル ボドルザ アルケスズカラ ダンツ エスケスタ」（ボドル基幹艦隊座標算定完了！）
ブリタイ「ウ・デルケ フォールド ホルト テーズ」（長距離フォールド スタンバイ）



ゼントラーディ軍ボドル基幹艦隊――ブリタイの上官のもとへ、艦隊は、マイクローンのサンプル――ミンメイとカイフンを持って、フォールドしようとしていた。

輝の機のコクピット。ミンメイにつけられた発信装置の反応が示されている。バルキリーは、それを追って飛ぶ。
腕が突き出され、隔壁を破る。

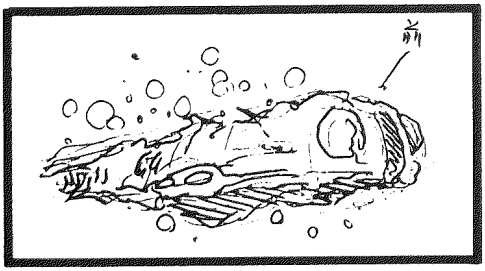
ミンメイ「キャッ！」
思わず身をひくミンメイの目の前で、壁が引き裂かれる。
輝「ミンメイ！」

ミンメイにも輝がわかった。カプセルの透明壁にすがりつく。
ミンメイ「輝！」

ミンメイ「輝よ！　輝が来てくれた！」

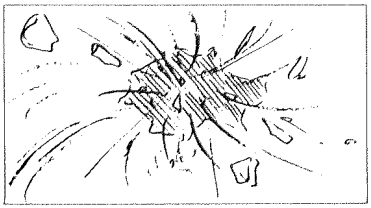
ミンメイは、カイフンに知らせる。輝は、機体をねじこもうと、壁を広げている。そのとき、周囲がゆらいだ。

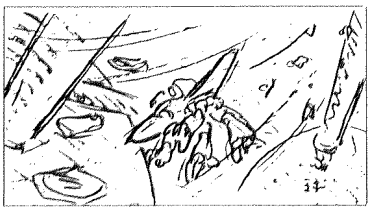
ミンメイ「あ!?」



未沙「フォールドだわ！　この艦がフォールドしようとしている!!」

そこへ、甲板に当たったミサイルの爆発。内部の空気が真空にまき散らされ、輝機も吸い出されていく！





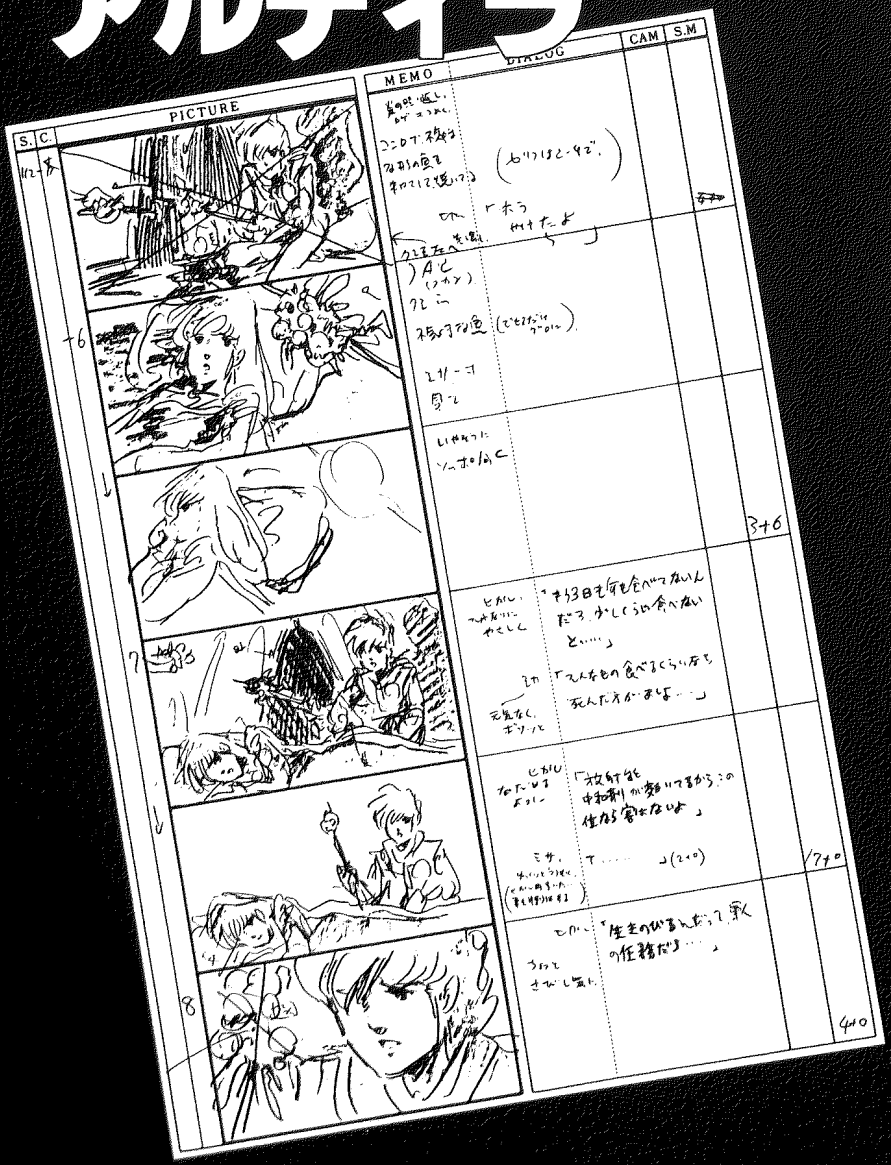
輝「ミンメイ！」

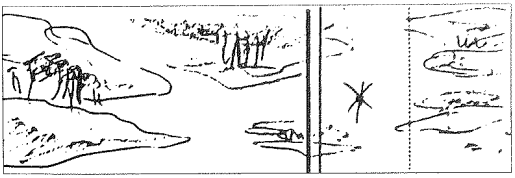
ミンメイ「輝！　ひかるう!!」

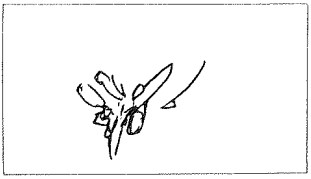
フォールドの光が強くなり、輝機は、その圏外に取り残された。すでにコントロールはきかず、ただフォールドの空間振動にもてあそばれるのみ――そして、最後のショックと同時に、輝のバルキリーは、消える。

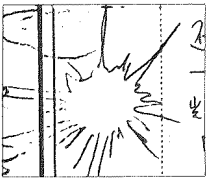
ブリタイ艦もまた、目的地へとフォールドした。

アルティラ

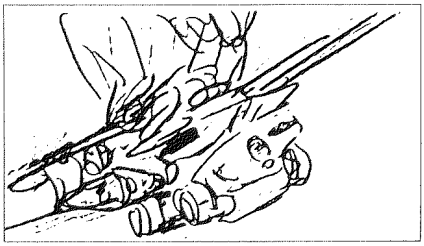




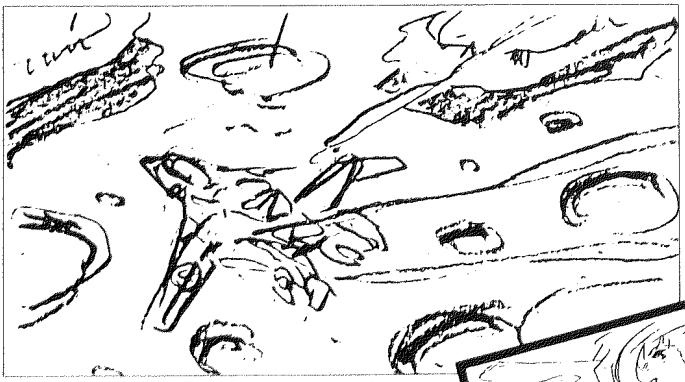




どこなのか――不気味な雲が、ムラサキ色の空にかかっている。地表は、クレーターが口を開けて、生命のきざしは見えないようだ。

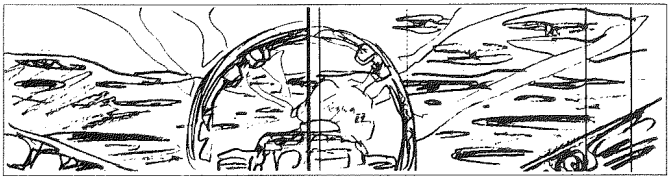


一瞬、空中に輝きが走ると、その中心から鳥のようなものが飛び出した。輝と未沙の乗るバルキリーである。

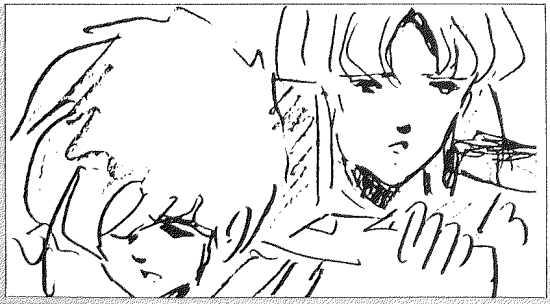


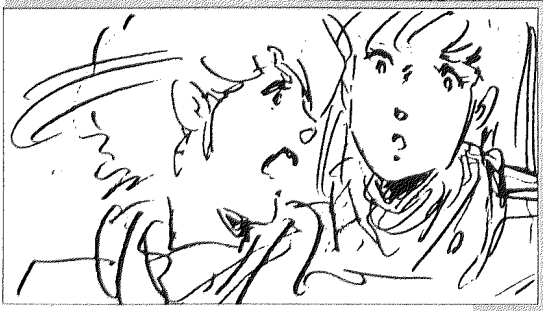
バルキリーは、地表すれすれに降下すると、ガウォーク形態で着陸した。足元から、砂ぼこりが舞う。コクピットの中で、未沙は不安そうに、あたりを見まわしている。

未沙「敵艦は!?」
輝「どこにも反応ありません」
　キャノピーの前に広がる不気味な風景――
未沙「それにしても……、気味の悪い星ね……」
　未沙は、輝に海に行くように指示する。



　輝の胸の中は、ミンメイのことばかりだ。
輝「おれが、土星になんか連れ出したりしなけりゃ……」
　未沙は、そんな輝に、いつもの調子で言う。
未沙「だけど、ここがどこだか調べるのも、私たちの任務――」



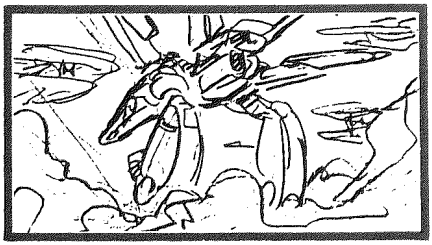


　輝の心に怒りが爆発する。
輝「任務、任務！　あんた、それしかないのかよ」

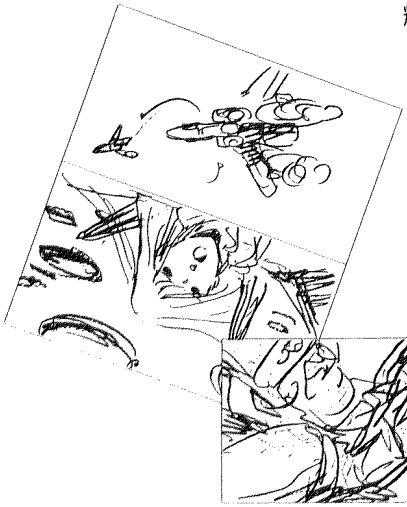
　未沙は、一瞬、輝の顔を見つめる。そして……。
未沙「わかりました！　もう頼みません!!」

未沙は、ナビゲーターシートのスティックを握る。未沙の目が、前方に注がれる。スロットル、ＯＮ！

バルキリーは、地をけって飛び出す。



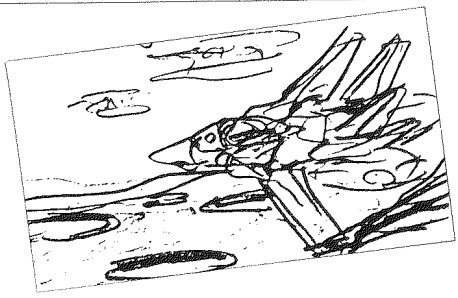
輝「ちょっと！　大尉!!」



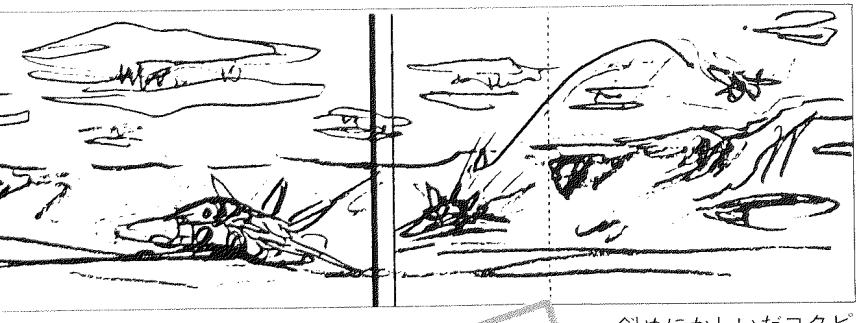
輝はあわてるが、もう遅い。バルキリーは、素人の未沙のコントロールのために、ローリングしながら急降下!!
未沙「キャーッ！」
輝「うわっ!!」

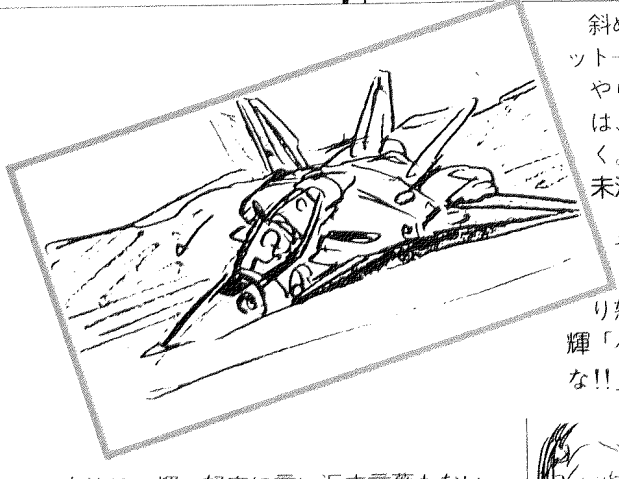
輝は、スティックに手を伸ばした。しかし、すでに機体は高度ゼロ!!

バルキリーは、左主翼を地表にひっかける。パッと砂煙が上がる。小さな丘を越えて、バルキリーは砂地に胴体着陸をする。



胴体がガリガリと砂をかみ、バルキリーは、そのショックで〝波打ち際の近くに停止した。



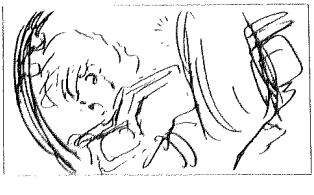


斜めにかしいだコクピット——ふたりは、どうやら無事らしい。未沙は、思わず溜め息をつく。

未沙「ふう……」

その声で、前席の輝が振りむく。かなり怒っている表情だ。

輝「バカなことを、するな!!」



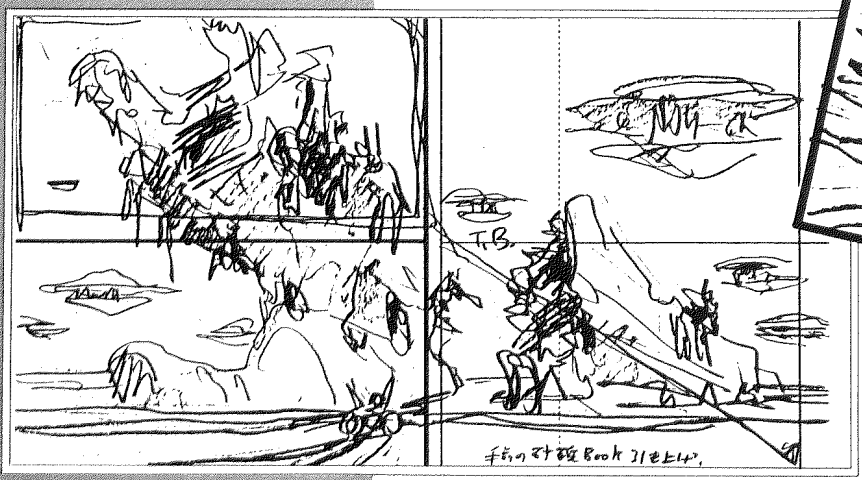
未沙は、輝の怒声に言い返す言葉もない。ただ、くやしそうにうつむく。そして、あたりを見まわす未沙の目に——!!

未沙「あっ!?」

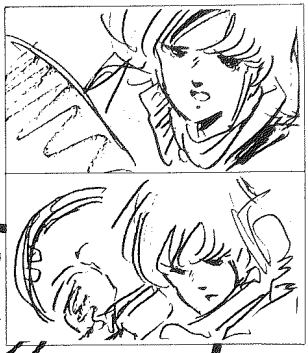
　未沙が小さな叫びをあげ、輝が振りむく。
輝「!?……うわっ!!」

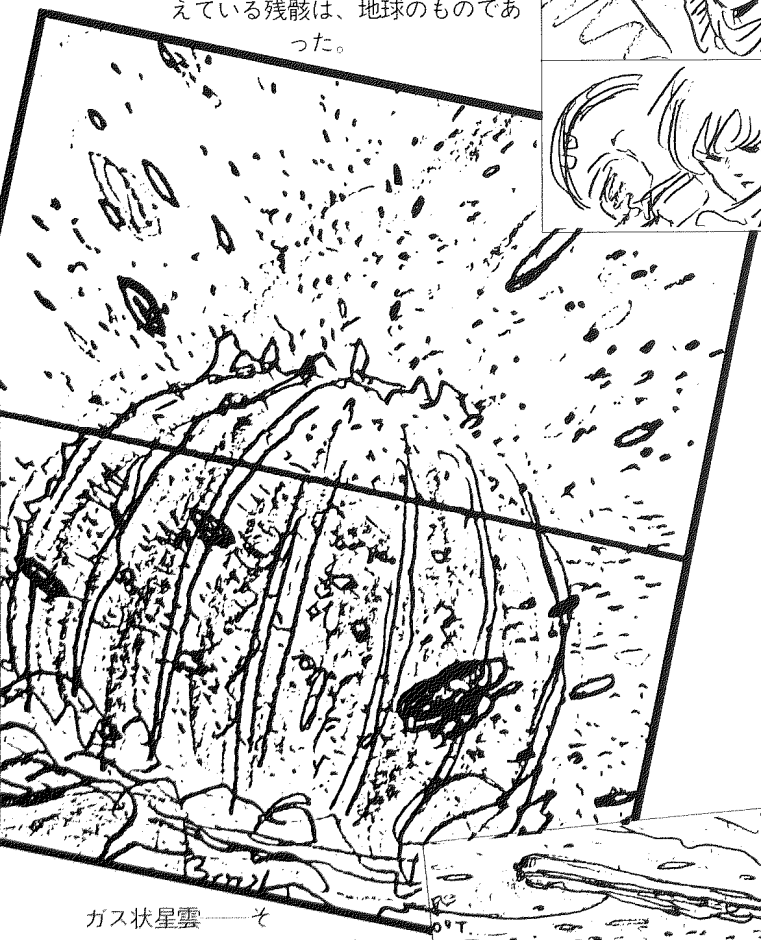
　巨大な残骸である。高熱に焼かれ、強力なエネルギーにたたかれ、昔の姿を失ってしまった船である。
　そのフォルムの中に、未沙は、知っている船の名を思い出した。それは、確かに未沙の知っている船の末路であった。

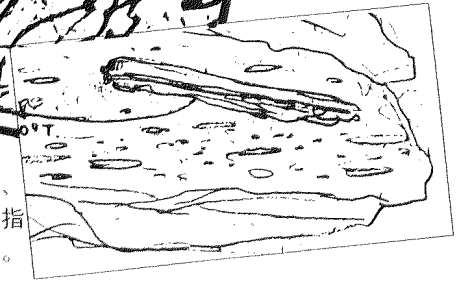
輝「これは……!?」
未沙「統合軍、太平洋艦隊所属――攻撃空母プロメテウス……」



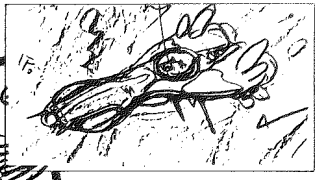
輝「まさか……!?」
未沙「ここが…、私たちの地球だなんて……」
しかし、疑いようもなかった。そこにそびえている残骸は、地球のものであった。

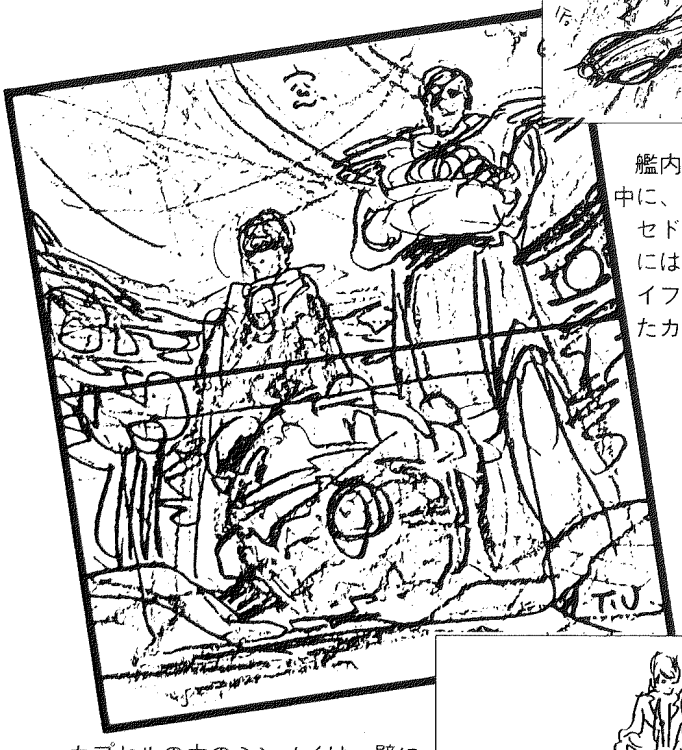






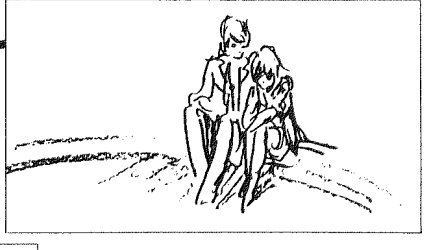
ガス状星雲――そこがどこなのかは、わからない。
そのむこうに、大艦隊を従えた、ボドル基幹艦隊の旗艦。それを目指して、ブリタイ艦がデフォールド。





艦内を結ぶ連絡艇の中に、ブリタイとエキセドル。その足もとには、ミンメイとカイフンの捕らえられたカプセルが置かれている。

カプセルの中のミンメイは、壁にもたれながら歌をうたっている。



そっと肩におかれるカイフンの手。

ミンメイ（歌）「午前０時の鐘が鳴れば……不思議な魔法――」

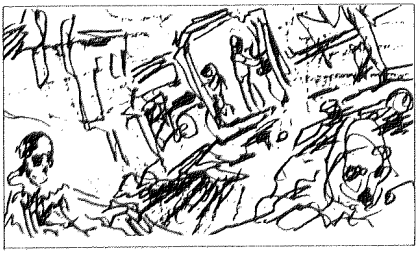
ミンメイとカイフンは、カプセルの端に腰をおろしている。

ミンメイが歌いながら、何かを想うように顔を上げる。

プロメテウスの残骸の前に、輝と未沙が立っている。近づくと、装甲板はねじくれ、あちこちに穴が開いている。

ふたりは艦内に入った。外板に開いた穴から、陽の光がもれて、破壊されたバルキリーにあたっている。

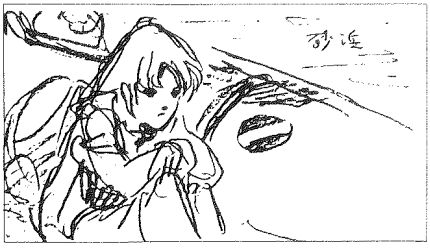
艦内も、外見同様にひどい。ふたりは、扉のひとつを開いた。



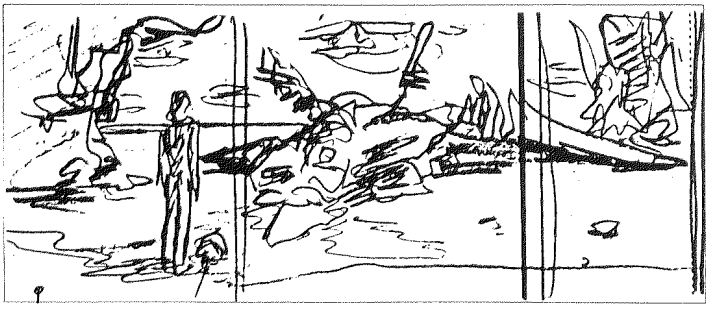
未沙が、あわてて口を覆った。輝も思わず眉をひそめる。

オペレーション・ルームだろうか——中には、多くの腐乱死体が折り重なっている。ふたりを取り巻く、死のにおい——。

未沙は、バルキリーの下にうずくまって海を見ている。

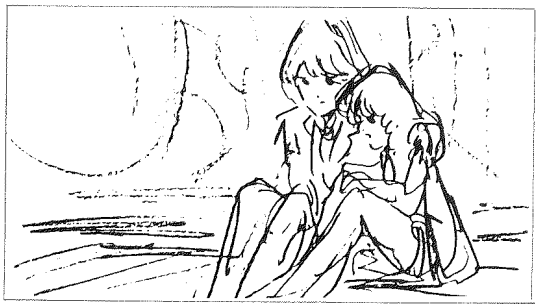


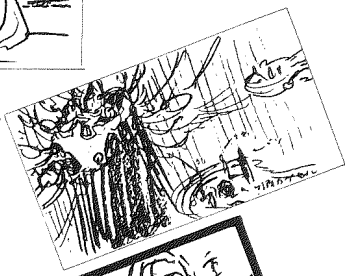
プロメテウスの食糧庫におりていった輝が、缶詰をかかえて戻ってきた。未沙は食べようともしない。輝は、缶詰を地面にたたきつけた。



波打ち際に、撃墜されたバルキリーの残骸——波が、繰り返し残骸を洗っている。それを見つめる輝も、風景の中に溶けこんだように動かない。

波が寄せ、波が返し……。輝の足もとに、ボロボロになったヘルメットがひとつ。

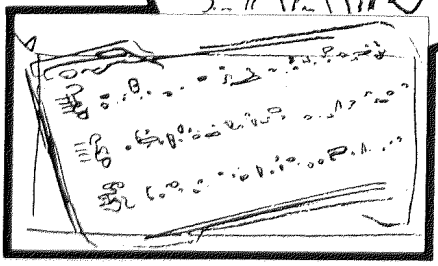




ブリタイたちにカプセルに閉じ込められたミンメイとカイフン。ふたりを見たボドルザーは、部下に言う。

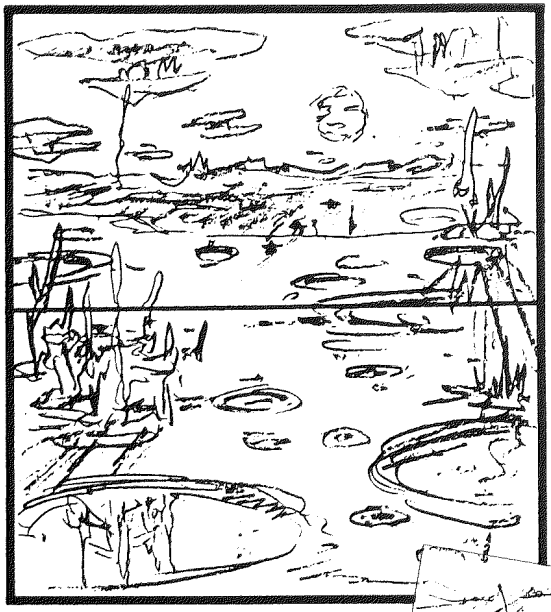
ボドルザー「プロトカルチャー」

ボドルザー「アルケス ナ カールチューン（文化を持つ） マイクラン、ダンツ（すなわち） プロトカルチャー！」



ボドルザーは、プロトカルチャーが文化を持ち、自分たちは〝文化に手を触れるな〟ということだけが、製造者に教えられた〝文化〟に関することだと語った。

そして、わずかに残された文化の断片――楽譜のような記号の記された金属片を、ミンメイたちに示した。



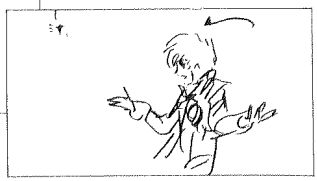
焼けただれた街――かつて、ここが東京と呼ばれていたことを示すものは何もない。

夕焼けに照らされた街にガウォークが近づく。
ＳＥ（キューン）

溶けたビルの骨組みのそばに、ガウォークが停止している。輝が、降り立ってビルに歩み寄る。
輝「結局、東京も全滅か。アラスカの統合軍本部も溶岩に埋まってたし――」

輝（つづき）「この１週間、どこを探しても、人っ子ひとり、いやしない」

未沙は、輝のボヤキを、瓦礫の上にすわって、黙って聞いている。



輝「さっ、早瀬大尉。次はどこへ行きます？　ロンドンですか、それともパリですか、ニューヨークですか？　早く命令を――」
未沙「やめて!!」

未沙に歩み寄ろうとした輝が、思わず足を止める。
未沙「もう、やめて……」

未沙の体がふるえている。言いすぎに気づいた輝は、ただ、そんな未沙を見おろしている。

雨が降っている。瓦礫と化した地球の上に、太古と同様に雨が降っている。

輝と未沙のガウォークが、稲妻に照らされている。その下に、小さな非常用テントが張られている。

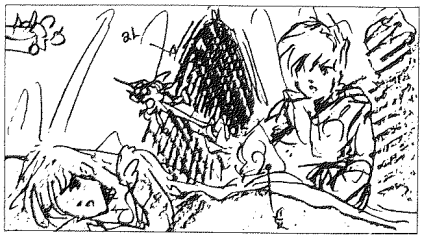
中では、輝が不気味な形の魚を、火にかざしている。

輝「ほら、焼けたよ」

未沙は、毛布の中で、魚をチラリと見るが、横をむいてしまう。体の調子が悪いのだ。

輝の焼いていた魚は、放射能の影響か、不気味に変形している。それでも、食べなくては、生きていけない。

輝「もう3日も食べてないんだろ？　少しくらい食べないと……」



未沙「そんなもの食べるくらいなら、死んだほうがマシよ」
輝「放射能中和剤が効いてるから、このくらいなら、害はないよ」

輝「生きのびるんだって、軍人の任務だろう!?」

輝は、急に弱気になった未沙を懸命になだめている。未沙は、地球が全滅したことに絶望していた。

輝「だけど、せっかく地球に降りられたんだ……。マクロスだって、無事なら、もうじき戻ってくるんだから」
未沙は、悲しげに宙に目をやる。
未沙「何もわかってないのね」
輝「え!?」
未沙「マクロスが来たって、どうにもならないわ」

未沙「地球は全滅したのよ！　相手は百億の人間を、アッという間に滅ぼせる敵なのよ」

　未沙は、激しくせきこむ。輝は、ハンカチを水につけて、未沙の額にのせてやる。

輝「……ホラ……」

　未沙は、床に横たわる。

未沙「みじめなものね……」

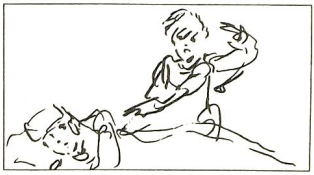
輝「……」

未沙(off)「負けるとわかった軍の士官なんて……（ここよりＯＮ）それにひきかえ、あなたはタフね」

　未沙は、輝の身の上を、フォッカーから聞いていた。父も母もない、エア・レースの賞金かせぎ――。

未沙「そう……、それからあなた、ずっとひとりで生きてきたんでしょう」

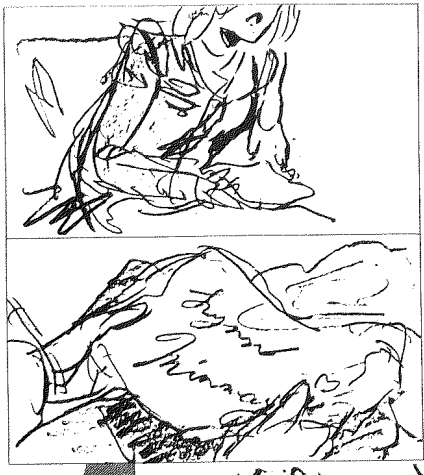
輝「ただの賞金かせぎさ。飛行機だったら、子どものころから、ずっと飛ばしていたから…」
　輝は、少し無理をしている。つとめて明るく、未沙に接する。



　未沙は、そんな輝から視線をそらせる。額におかれた輝のハンカチが、少しずれる。

未沙「フッ……（と微笑みかけ）、でも、だからよね……。平気でいられるの……」

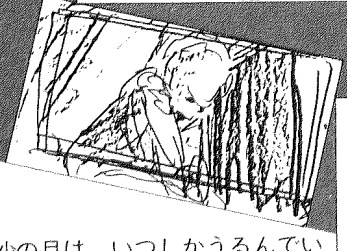
　未沙の言葉に、輝は目を伏せる。少しばかり寂しい。
未沙「私はダメ。私だって軍人のはしくれ、最後の一兵になっても、生きのびられるつもりだったけど、このザマじゃね」

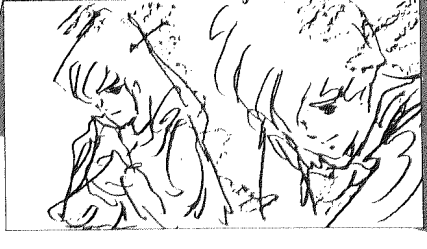


未沙は、ふと起き上がる。未沙の額から、輝のハンカチが落ちて、手の上に。
未沙の手が止まる。

そこに、リン・ミンメイとサイン。機関区に閉じ込められたときのものだ。未沙は、ハッとして顔を上げる。

未沙「!!」
未沙の目に、うつむいている輝が映る。外には、稲妻がひらめき、雨が強い。未沙は、自分の言葉になさけなくなった。



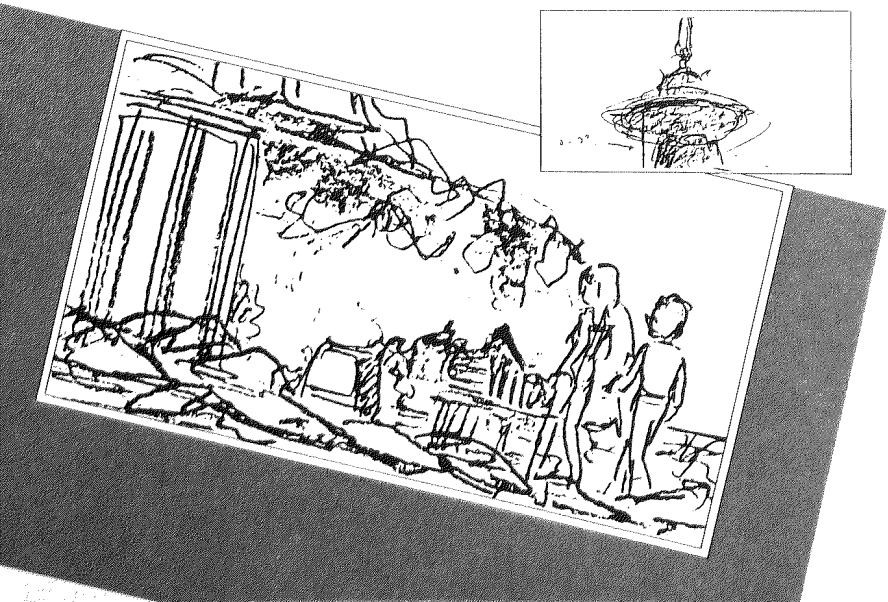


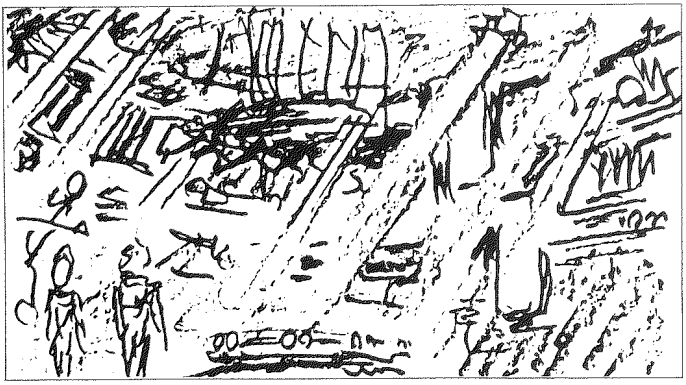
未沙の目は、いつしかうるんでいる。
未沙「ごめんなさい……、私……」

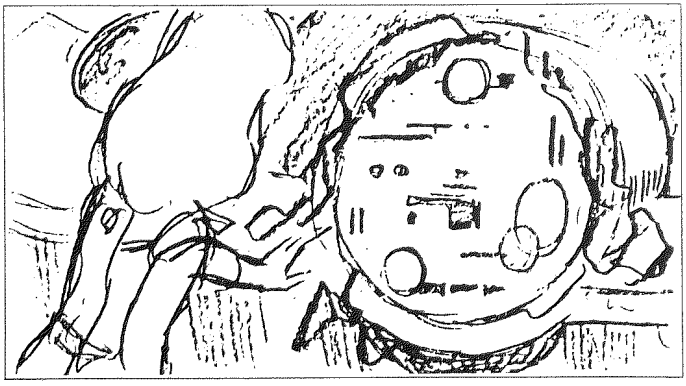
輝と未沙のバルキリーが、海上を行く。水しぶきが、バルキリーの航跡を示している。

未沙が、水平線に何かを見つけた。柱状の構造物が水面から天にそびえている。
未沙「？……何かしら、あの柱」
輝「行ってみよう」

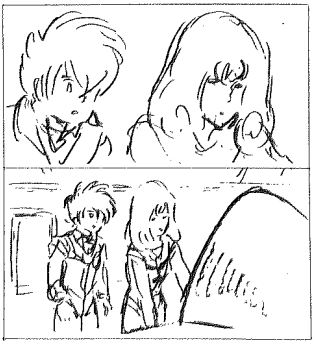
バルキリーは、機首を転じて、不思議な建造物へとむかった。
その上に立つふたり…。
未沙「だいぶ昔から沈んでいたみたいね」





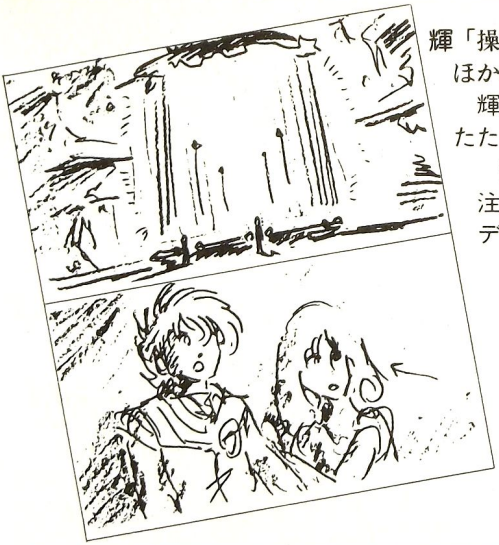


不思議な建造物であった。どこか、人類とは異質のもの、それでいて懐かしい…。ふたりは、内部に入って、フォールド通信システムを見つけた。



未沙「マクロスに通信できるかもしれない」
輝「だけど、もし他の連中に受信されたら、まずいんじゃ……!?」

しかし、通信の途中で、パネルの明かりが消えてしまった。



輝「操作法が違うのかもしれないし…ほかのも試してみよう……」

輝は、手近のコンソールのキーをたたいた。

突然、天井から光のシャワーが注ぎ、ふたりの耳に、ゼントラーディ語に似た言葉が届いた。

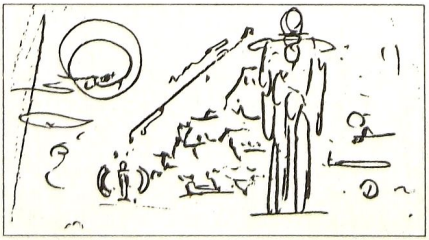
未沙「待っていた!? 私たちの帰りを？」

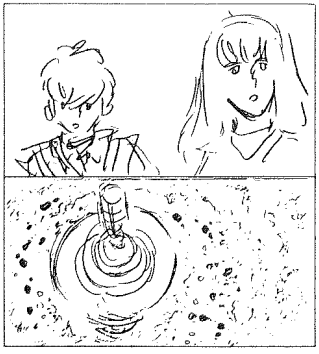
未沙は、断片的だが、その言語がわかった。ゼントラーディ語に近い。それは、巨人たちと、地球人の関係について語る。

未沙「遺伝子操作!!」

それは、太古にプロトカルチャーと呼ばれた種族の、コンピュータであった。プロトカルチャーは、遺伝子操作で、男女別々に子孫を増やせるようにしたために、男女間での争いが起こることになった。

彼らの戦いのための兵器が巨人たちである。

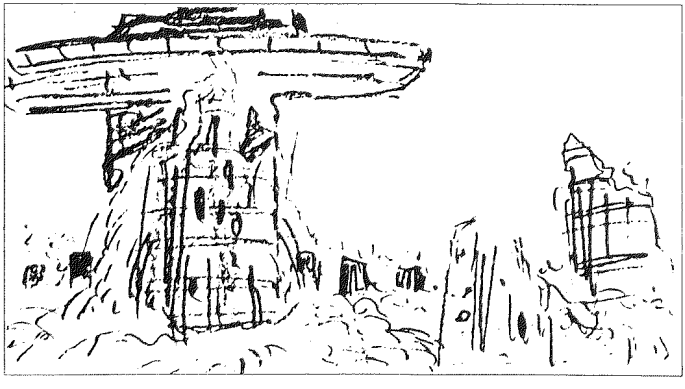


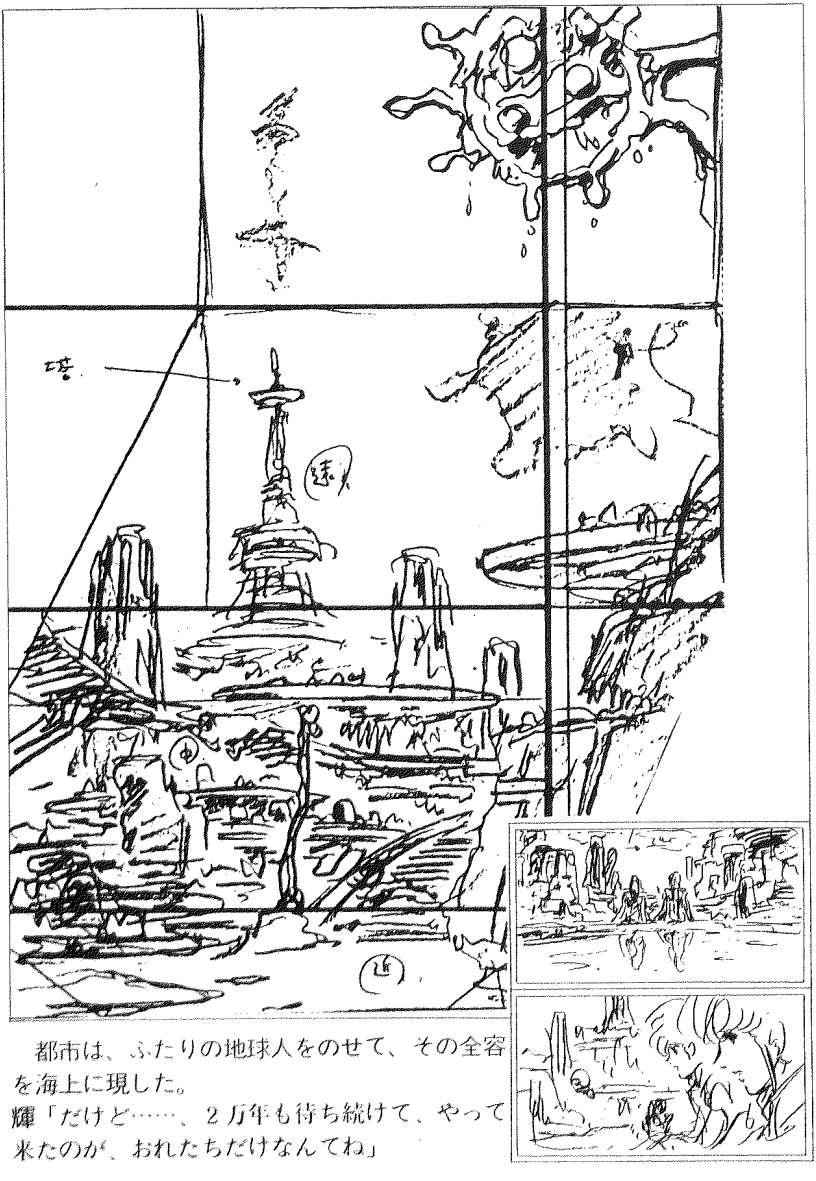


巨人たちの戦いは、生みの親であるプロトカルチャーをもまきこんだ。そして、間違いに気づいた一部が、戦いを逃れて地球にやってきたというのだ。

未沙(off)「そして……、その時、地球にいた原住生物の遺伝子を操作して、私たちの祖先を作ったって……」
輝「おれたちの祖先まで!?」

そして彼らは、太陽系におよぶ戦いから逃れて、二度と帰らなかった。ここまで語ったコンピュータは、最後のエネルギーで、都市を浮上させる！

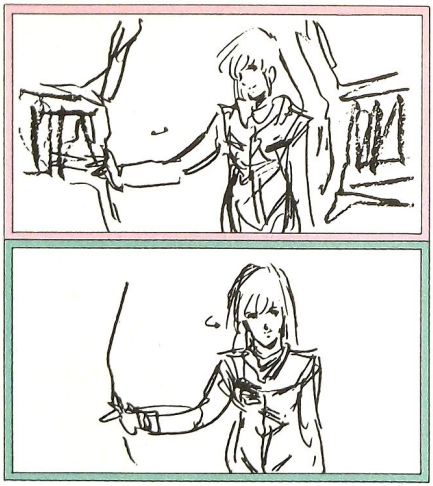




都市は、ふたりの地球人をのせて、その全容を海上に現した。
輝「だけど……、２万年も待ち続けて、やって来たのが、おれたちだけなんてね」

未沙「何かしら？」
輝「何か見つかった？」
　まだ海水の引ききらない都市の一室で、未沙は、文字の書いてあるプレートを発見した。

　プレートに見入る未沙。何とか解読しようとしているようだ。
未沙「何か書いてあるみたい。覚える…覚えて…覚えていますか……。巨人たちの文字より、だいぶ複雑で、よくわからないわ……」



未沙は、プレートをしまう。輝は、別の方向を調べてみようと、未沙をうながす。

未沙(off)「もう少し、ここにいていいかしら」
輝「え!?」
未沙「別に、たいしたわけはないんだけど……なんとなくね……」
輝「そう……、それじゃあ、僕はほかを調べてきます」

輝は、未沙をその部屋に残して、外へ出ていく。未沙のいる部屋は、小さな個室らしい。

未沙は、輝をおくり出す。そして、水びたしの居間らしき部屋をぬけ、奥へ。

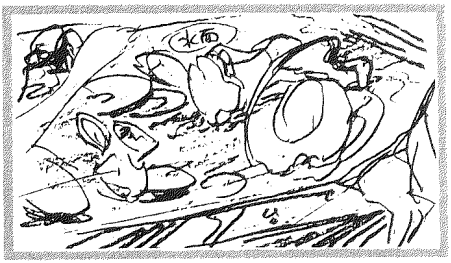
たぶん、ダイニング・キッチンだったのだろう。足首のあたりまでたまった水の中を未沙は歩く。

異星人のキッチン。使われている家具や食器は、地球のものと違わない。
未沙「変わらないのね」

流しの中の食器に、未沙は目をやる。

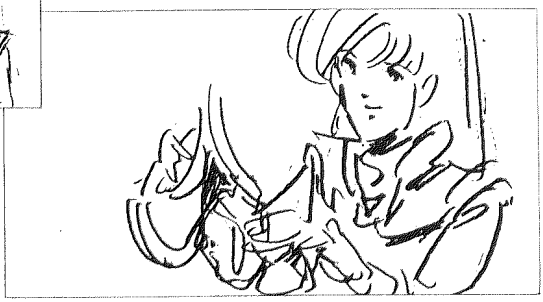
2万年という長い間、海底にあった異星人のキッチンは、未沙の知るそれと、変わらずに、懐かしい想いを未沙の胸にわきあがらせる。

未沙は、水から顔を出しているカップに手をのばしてみる。未沙の指を伝って、水滴が、小さな波紋を描いて流しに落ちた。

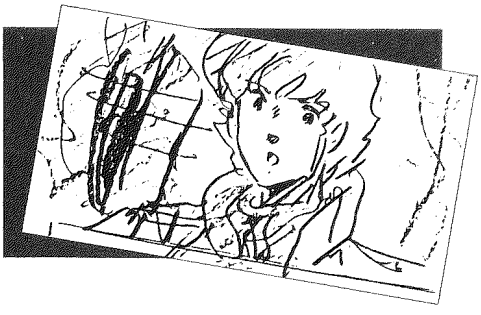


ティーカップだろう。小さなとっ手のついたカップ、それと同じデザインのティーポット。未沙は、ふたつを取り上げると、お茶をつぐまねをしてみる。

平和なある日の一日——そんな思い出が、未沙を微笑ませる。



輝「やっぱり、誰もいないみたいですね……。機械もほとんど使えないものばかり……」



輝が入口から顔を出す。そして中を見て、ちょっとびっくり。

テーブルの上の食器類――それらは磨かれて並べられている。そこは家庭――。

未沙「お帰りなさい」

未沙が、テーブルのむこうから笑う。

忘れていたものが甦えるような、未沙の仕草。最初はとまどった輝も、未沙の気持ちに気がつく。

輝は、ちょっとポカンとしたものの、すぐに答える。

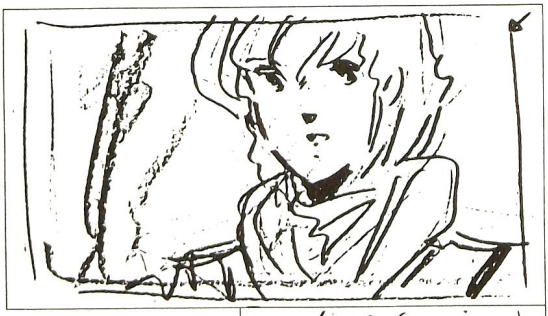
輝「ただいま」

テーブルの上の食器、そのむこうで楽しそうな未沙。今、地球には、ふたりきりしかいないということを、忘れてしまうような光景。

未沙「さあ……、食事にしましょう」

未沙は、テーブルに、輝の分もトレーの食器を並べている。未沙の浮き浮きした気分が、輝にも伝わってくる。

輝「……ああ……」



輝は、部屋に入り、テーブルの前につく。足もとにたまっている水が、やわらかな音を立てている。

ふたりは、テーブルをはさんで、むかい合ってすわる。未沙は、空のびんをかたむけて輝のグラスに、ワインを注ぐふり。ワイングラスとびんのふれ合う音。

未沙「どうぞ」

輝もまた、未沙のグラスにワインを注ぐまねをする。

ふたりは、グラスをとって、乾杯——。

SE（カチン）

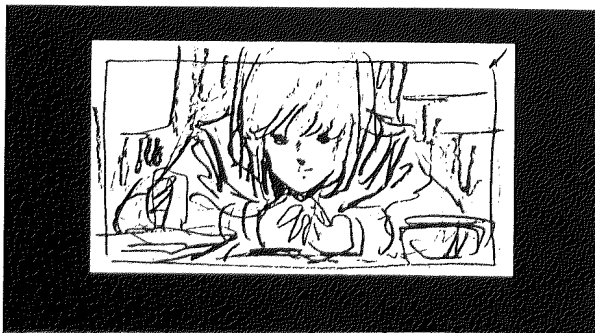
微笑みとワイン――昔、平和だったころの地球の優しい習わし。輝は、ナイフとフォークを取って、食事のまねごとをはじめる。

ＳＥ（チャポン）
ハッと顔を上げる輝。未沙のグラスが、水の中に沈んでいる。

未沙の心は、急に空しくなった。だれもいない地球、仲間は、まだはるか彼方――。

テーブルの上の未沙の手が、涙をこらえて握られる。

未沙「帰りたい……。みんなのところ……」



うつむいた未沙の手。テーブルの上でふるえている。その上に、輝の手が重ねられる。顔を上げた未沙の目の前に、微笑んでいる輝がいる。

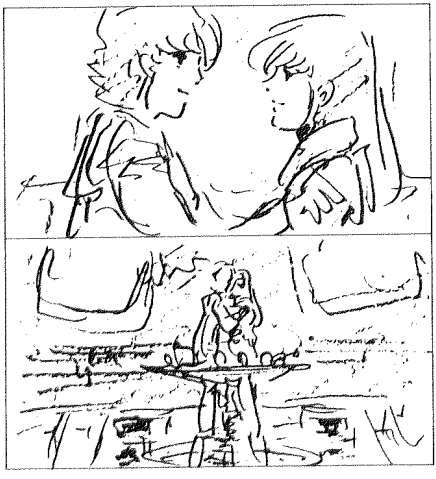
ちょっとうなずく輝——未沙の気持ちがわかるのだろう。

未沙「一条くん……」

未沙の瞳がうるんでいる。

重ねられたふたりの手——たがいに握り合う。

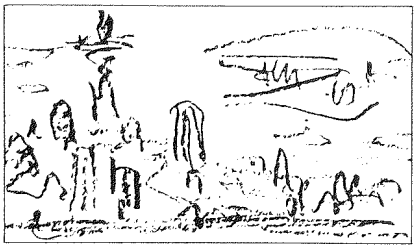
これまでのいさかいが嘘のように氷解していく。温かさに満ちた、ふたつの心。



テーブルをまわり、未沙のところへやってくる輝。輝の手が未沙の肩にかかり、ふたりは、しばらく見つめ合う。

ゆっくりと、ふたりは近づき、Kissをかわす。強く抱き合うふたりの周囲の水面が、陽の光を受けてキラキラ輝いている。

2万年も前に、すべての人々がいなくなった都市。そして、今や、全滅してしまった地球。死の世界に、たったふたり。



夜明け――異星人の都市が、青く明けていく空に、黒いシルエットとなって浮かんでいる。朝霧が廃墟の間を流れる。

ＳＥ（小さくゴォ～～～）

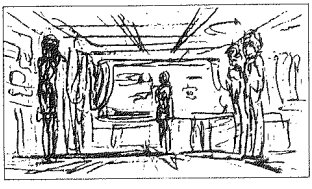
昨日の家から、未沙が出てくる。胸のジッパーを上げて、音源を探そうとキョロキョロしている。
未沙「また、動きだすのかしら」
輝「いや、この音は、空からだ……」

廃墟となったビル群のむこう。開け放たれた空に、巨大な影！
ふたり「……マクロス……!!」

未沙「早瀬未沙、一条輝、ただ今帰還いたしました！」

マクロスの艦長室。ふたりは、未沙の通信を聞いたマクロスによって救助された。

地球、異星の都市宇宙船の両方に、生存者のいないことを、未沙が報告する。



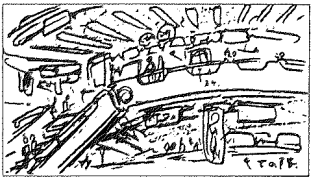
グローバル「そうか……。詳しい報告は後で受ける。まずは、ゆっくり休みたまえ」

帰ろうとするふたりの前に、クローディアが立つ。少し寂しそうな表情が痛々しい。

クローディア「ロイは、立派だった？」

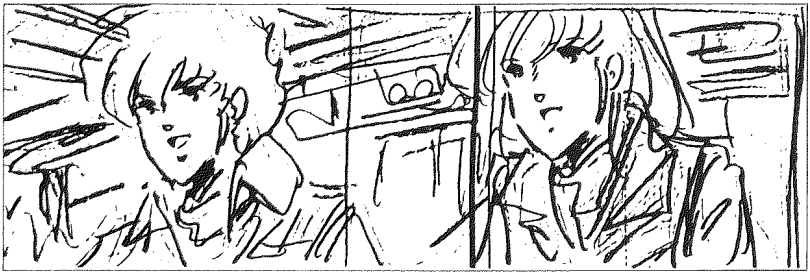
輝「……はい！」

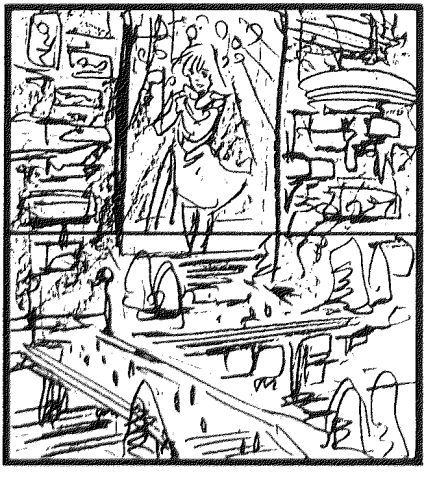
クローディア「ありがとう。それで十分よ」



艦内の街。相変わらずの活気。未沙と輝がテラスに出ている。嬉しそうなふたり。

街の音、空気、においのすべてが、ふたりには懐しい。
歌（シルバームーン・レッドムーン）





街の中。ビルの壁に設置された大型スクリーンに、歌っているミンメイの姿。

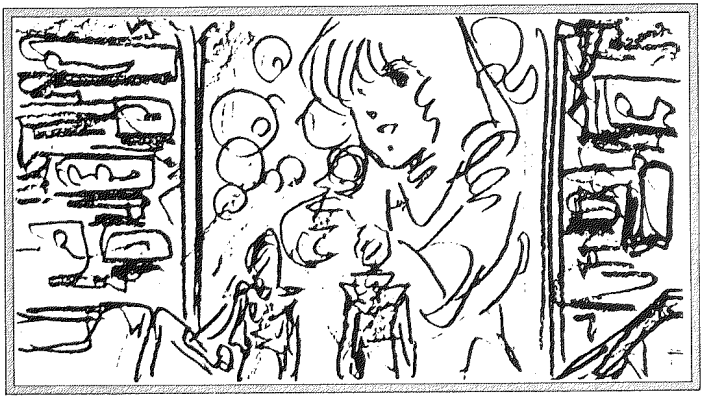
輝と未沙が、階段をおりかけて、ミンメイの歌に気がつく。未沙が顔を上げて、スクリーンの中のミンメイを見る。

輝「ミンメイ……」

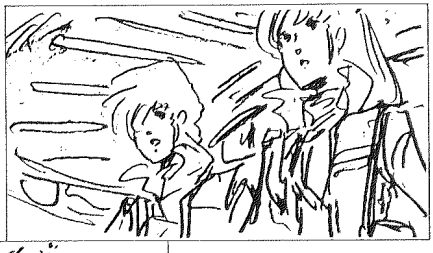
録画なのだ。ミンメイは、プリタイに連れ去られ、今はどうなったのかわからない。ふたりの胸に、何かがこみ上げてくる。

未沙も、じっとスクリーンに見入っている。
未沙「……」

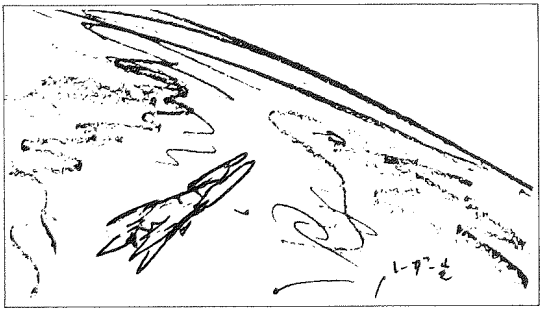
大きなスクリーンの上のミンメイは、まるでそこにいるように、生き生きと歌っている。
懐かしさと同時に、苦い思い。



未沙「不思議ね。ミンメイさんは、どこかに行ってしまったのに、今でも歌は流れている」
輝「……うた、か」
ふたりは階段をおり、再び見上げる。歌っているミンメイ。
未沙「まるで生きているみたいね」



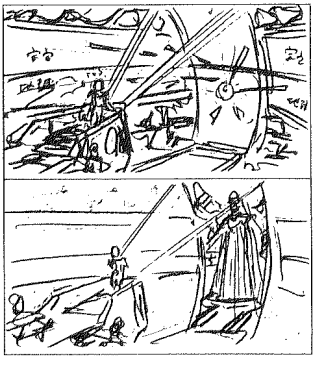
輝「あれから1か月しかたっていないのに、ミンメイといっしょに飛び出しときのこと、ずっと昔のような気がしてね」
未沙はうつむく。
未沙「そう……」



地球の衛星軌道。デフォールド光とともに、ミリア艦が出現する。

ミリアは、ラプラミズ司令の命令で地球に来たようだ。

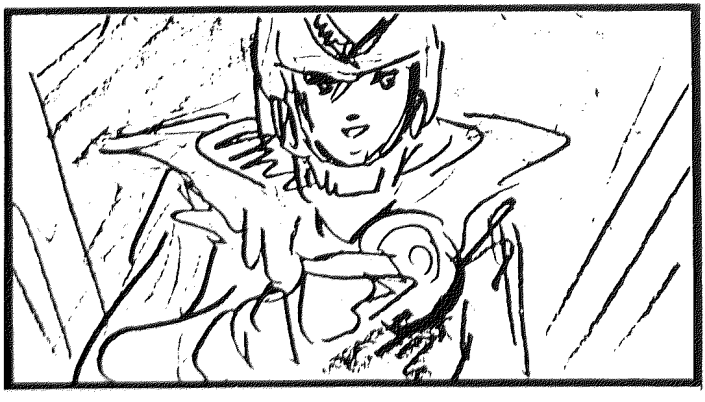
あの都市宇宙船の調査である。

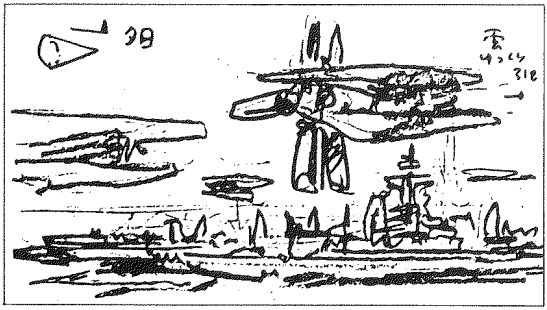


ラプラミズ「ナ・プロトカルチャー デヤンレカン、カールチューン デヤンチャーツ リンツアルケス。トオ メルトラン リンツ ウロルツ デヤンレカン」

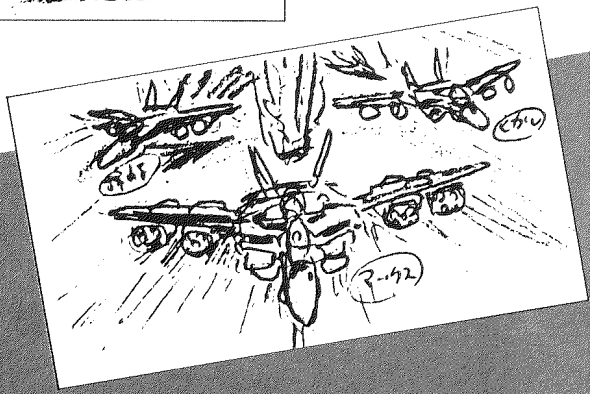
ミリア「サ、リンツ メルトラン マトラスカス！」

ミリアのクアドラン・ローが、艦を離れて、大気圏内に突入する。遺跡――都市宇宙船には、マクロスがいる!!

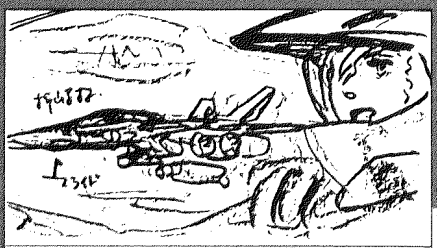


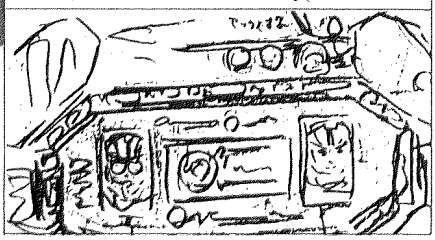


低く降りてきた雲のむこうに、マクロスが浮かんでいる。
ＳＥ（サイレン。ウィ～ン、ウィ～ン――）



ＳＥ（ゴォ――）
スカル小隊の３機―輝、柿崎、マックスが低空をスクランブル！





マクロスから、未沙の指示が伝えられ、３機は、衝撃波で海面を切り裂きながら目標にむかう。

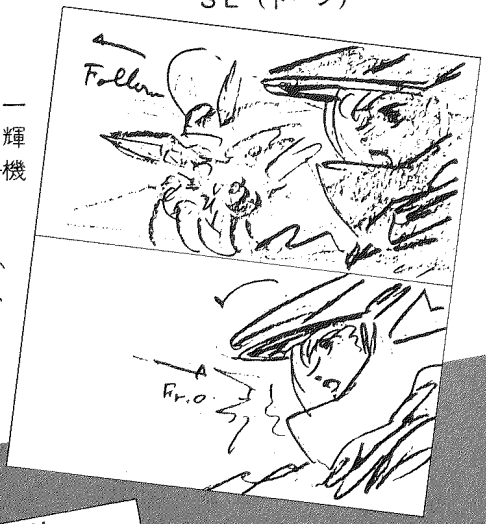
未沙「敵機捕捉、エリア27より海面付近を接近中。女性ばかりのメルトランディのものと推定される」
柿崎(off)「女ばかり……そりゃいいや！」
輝(off)「女ばかりだからって甘くみるなよ。あいつら、へたすりゃゼントラーディより手強いぞ」
マックス「ふっ、そいつは面白い」

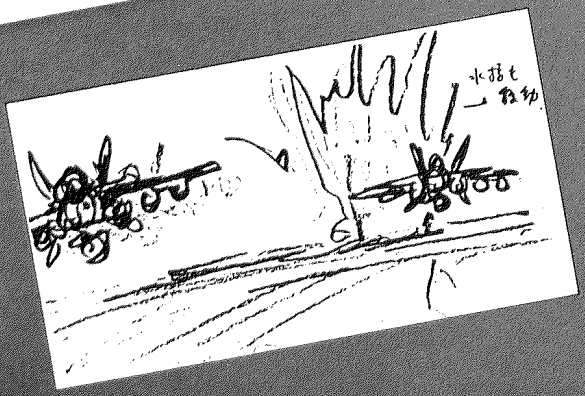
マックスは、輝の言葉を弱気ととる。それにあわせる柿崎。
柿崎「マックス隊長の言う通り。もしかすると女ができたせいかな。ヒヒヒ――わあっ!!」
笑い声が悲鳴にかわる。柿崎に直撃弾。
SE（ドーン）

輝「柿崎!!」

輝の右を飛んでいた柿崎機が、一瞬、光に包まれ、墜落していく。輝のバルキリーの右後方から、柿崎機が脱落していく。

空対空ミサイルらしい。明らかに、ミリアのクアドラン・ローから発射されたものだ。
火を噴く柿崎機は、ついにバランスを崩す。





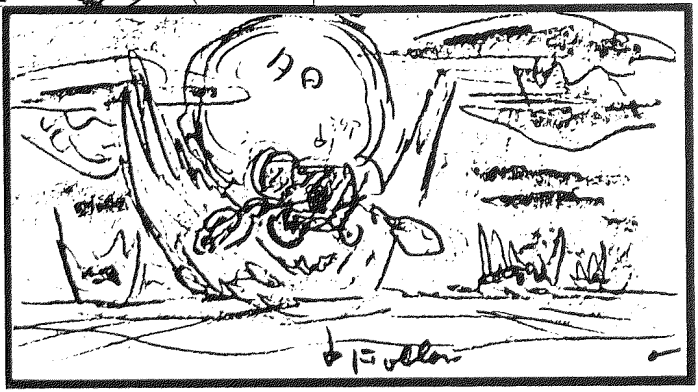
輝とマックスの機は、エンジンを全開して、ミリア機に正対する。

その後方に、巨大な水しぶきが上がる。柿崎機が、水面に激突したのだ！

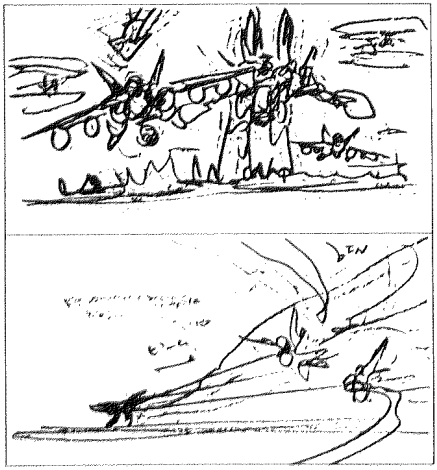
クアドラン・ローのコクピット内、バイザーの下のミリアの顔に笑いが浮かぶ。

ミリア「フン。エット　プロトカルチャー！」

ミリア機は、ブースターに点火。



海面スレスレを、夕日を背にミリア機が突進してくる。その機体から、幾筋もの白い航跡――マイクロミサイル群だ。



マックスの機が狙われている。マックスは、機をガウォークに変えると、逆噴射でかわす。

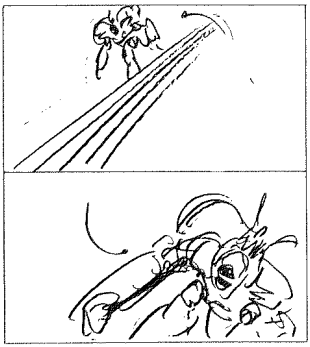
海面を白く泡立てて、マックス機が滑走。ミサイルは、後方で爆発する。その手前を、ミリア機が猛スピードですれ違い、マクロスにむけて飛ぶ。

マックスは、ミリアを追って、急速Uターン。

ミリアは、コクピットで、マクロスを見つめる。バイザーには、対空砲火の火花が映っている。

ミリア「!?」

ふと何かに気づいたミリアが、後方を振りむく。

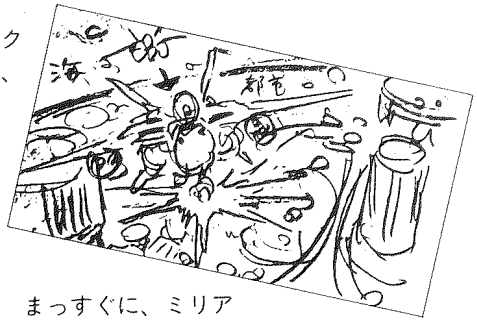


ミリア「ラック(なに)!?」

マックス「はずれた！」

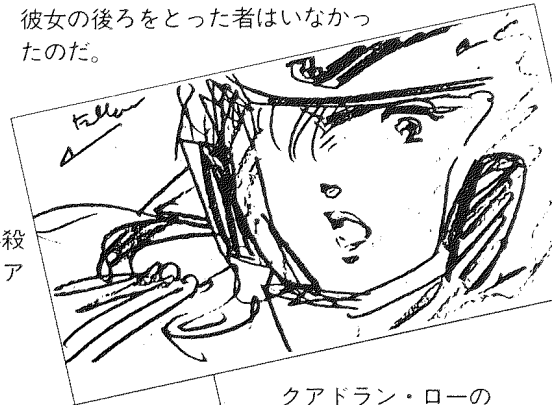
マックスにしても、彼の必殺の一撃をかわした敵は、ミリアが初めてである

2機は、一騎打ちに入る。



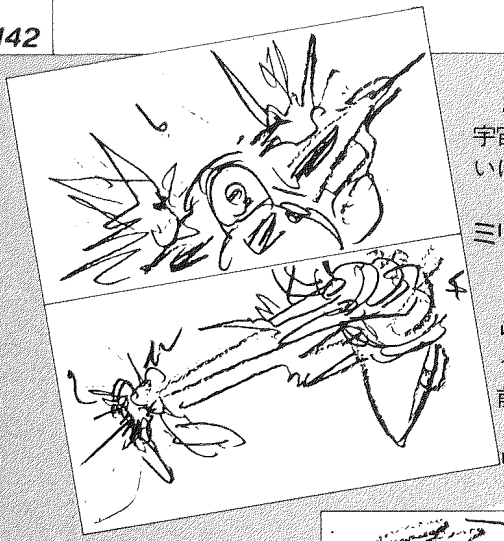
まっすぐに、ミリア機を狙って伸びるビーム。マックスの反撃である。

ミリアは、クアドラン・ローを空中でスライドさせ、ビームを避けた。だが、これまで、彼女の後ろをとった者はいなかったのだ。



クアドラン・ローのミリア、バルキリーVF-1Sのマックス——メルトランディと地球の両エースが、海を舞台に戦う。

ミサイルが、ビームが——海面を、空を切り裂く!!

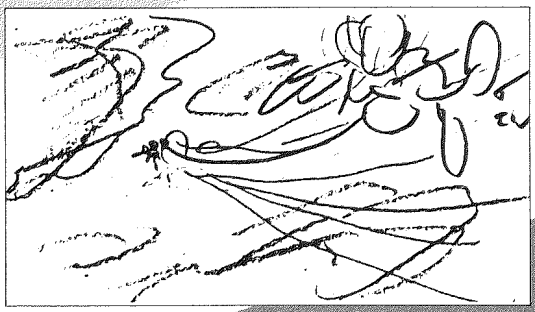


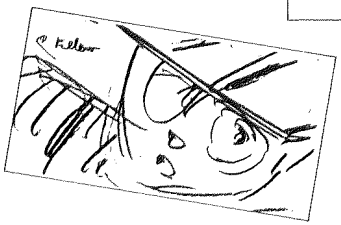
2機は、プロトカルチャーの都市宇宙船の上空で、激しく戦う。お互いに、有効打がない。

ミリア「デ・カルチャ」

ミリアは、マックスの腕が信じられずに、さらに意地になって追う。マックスのミサイルをかわし、前方からビームを放つ。

命中!!　しかし、マックスもミリア機にビームを命中させた。





ミリア「デムラン　デ・カルチャ!」

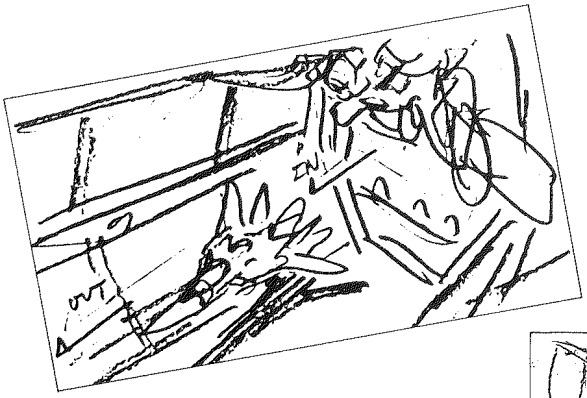
ミリア機の方が、被害は大きいようだ。ミリアは、雲にむけて上昇していく。これを追ってマックスも、スティックを引き、アフターバーナーを入れる。

マックス「逃がすものか!!」

マックス「ん!?」

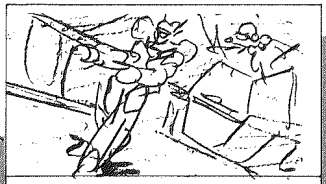
雲の切れ間に、マックスは、巨大な黒い影を発見した。ミリアは、それにむかっている。

マックス(off)「戦艦か!?」



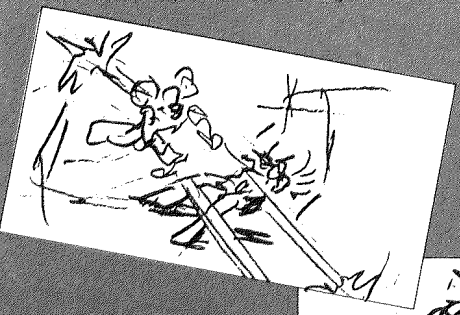
マックスは、ミリアを追って、敵艦内に侵入した。狭い通路を奥へと飛ぶバルキリー。

しかし、ミリアは、通路の天井にはりついて、マックスを待ちうけていた。



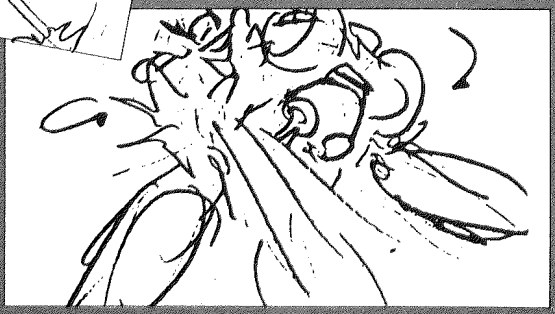
マックス機が、バトロイドに変形する。そのとき、入口のシャッターが音を立てて閉じ、照明が真紅に変わった。

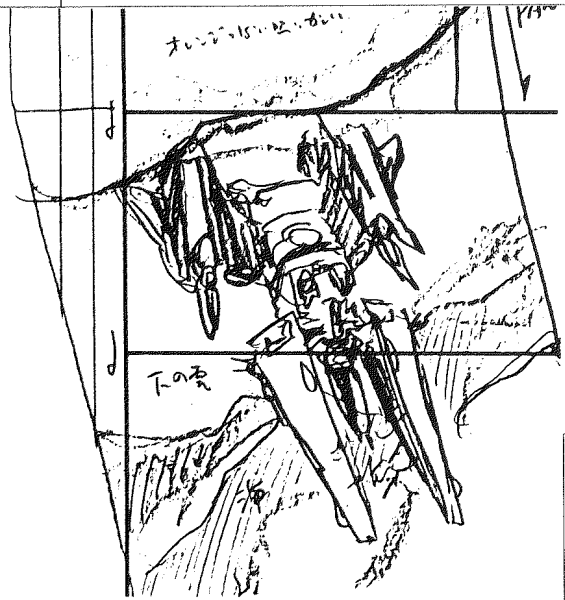
振りむくバトロイドめがけて、クアドラン・ローの銃が連射される。マックスは、床をころがって、これをよける。



もはや、決闘である。2機は、狭い通路いっぱいを使って、持てる技術のすべてで戦う。

ライトがふっ飛び、闇と化した中で、2機の銃火だけがまぶしい。



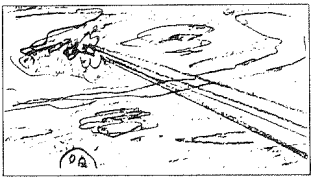


雲がたれこめている地表を見おろして、ミリア艦がゆっくりと前進する

その主砲は、すでにエネルギーをためて、スパークを発している。

ＳＥ(スパーク音、高まる)

スパークが限界まで高まると同時に、太い光の束が、雲を蒸発させて、地表へとむかう。主砲発射!!

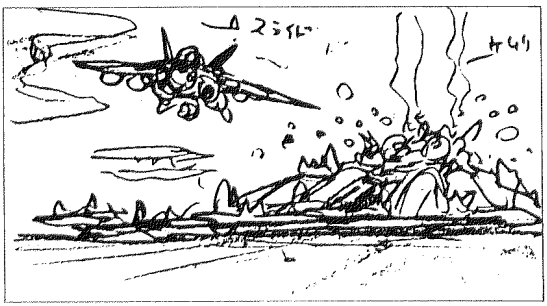


ミリア艦の放ったビームが、マクロスの主砲を貫き、その上半部が爆発して消える。すさまじい煙が、空へ立ち昇る。

強攻型になっているマクロスがその脚部を折るように、都市宇宙船の上へと落ちてくる。

墜落同然のマクロス周辺では、メルトランディと地球軍の戦闘が激しくなった。

輝「ちくしょう。このままじゃ……」

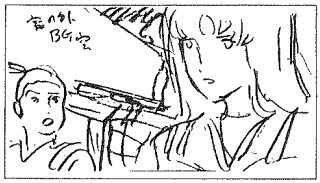


スキャットは　ブリッジにも流れる。
シャミー「なんなの、これ!?」
キム「どこの歌？」
未沙は、パネルに見入っている。
未沙「どうして、ミンメイさんが……」

ミリアのヘルメットが前後に割れて、ミリアの髪が流れ出す。その美しさに、マックスは、思わず息をのみ、１、２歩前へ歩く。
マックス「美しい」
ミリアが問う。
ミリア「うつくしい……？」

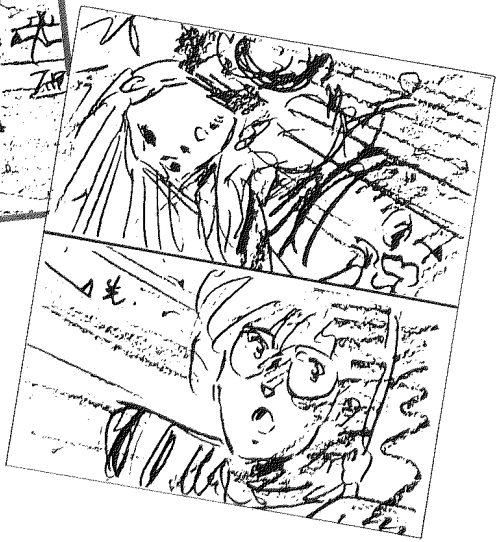
そのとき、輝の耳に、聞き覚えのあるスキャットが流れてくる。
ＭＥ（ミンメイのスキャット）

輝「!!」
確かにミンメイの声である。そして、その声は、戦うメルトランディ軍に、大混乱をひき起こす。



マックス「ハァ、ハァ、ハァ…」

マックスの立つ床の上に、ミリアの血が、ボーッと光って見える。傷ついたミリアが、マックスの前に倒れている。



ミンメイの歌を流したのは、ゼントラーディ軍であった。メルトランディに対する、兵器としての実験である。

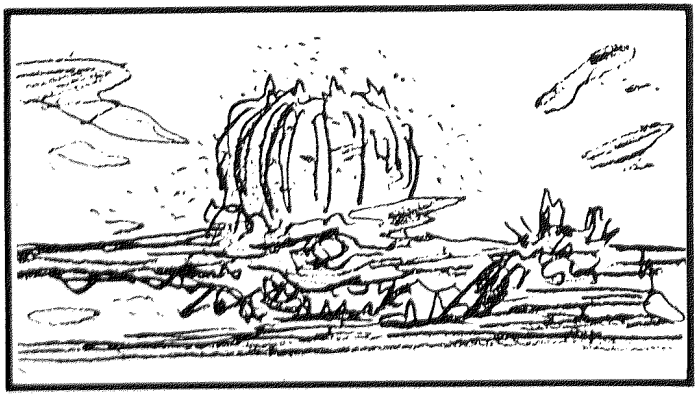
ボドルザー「フォダンツ、このミーゾーン(曲)にミンメイ(歌Jo)が言っていたカーシがそろえば、メルトランを降伏させられる」

ホドルザーの目が、キラリと光った。

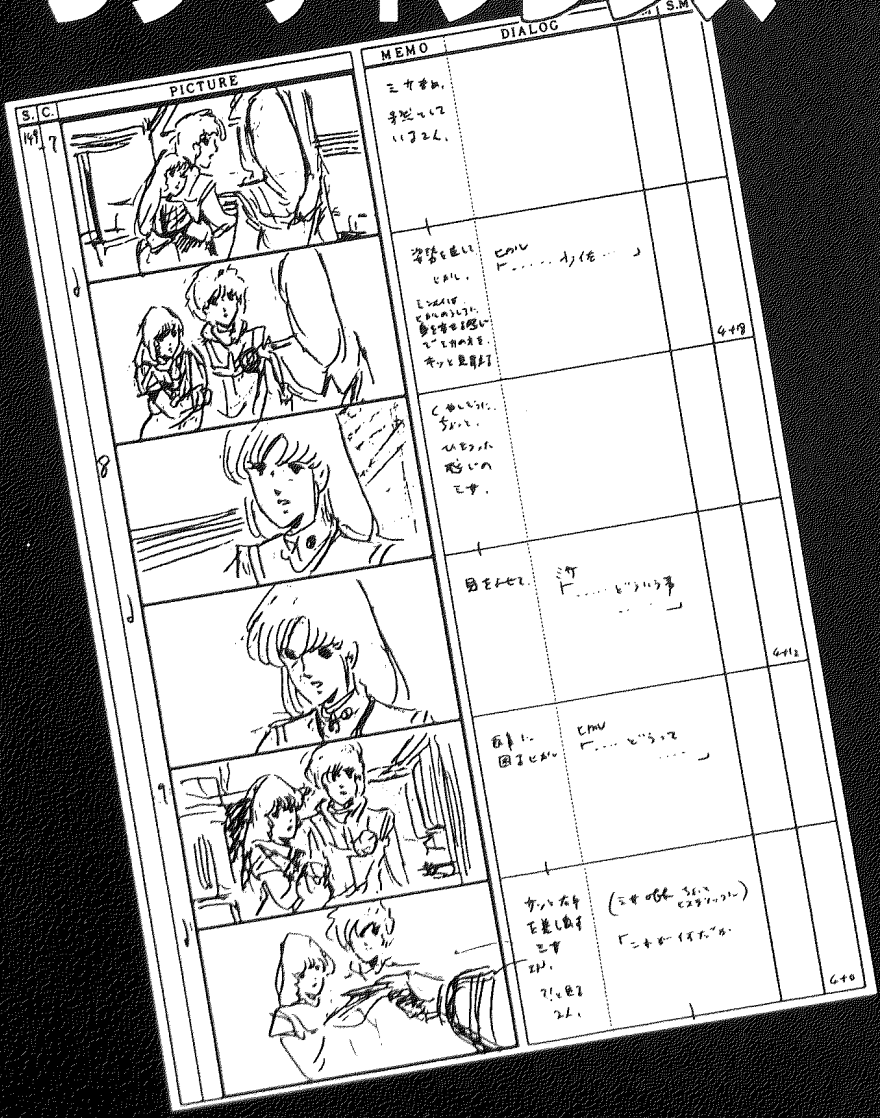
未沙「艦長、ゼントラーディ軍が、和平交渉を申し入れています」

マクロス艦隊は、喜びより驚きに支配された。事もあろうに、ゼントラーディ軍が和平とは――!!

グローバル艦長は、じっと前方をにらむ。水平線のむこうから、何か巨大なものが現れようとしていた。護衛の艦隊をひき連れたボドル艦である。



ラブ・ディフレンス



マクロスの艦内――大ホールである。テレビ・カメラとたくさんのマイクを前に、グローバルが立つ。

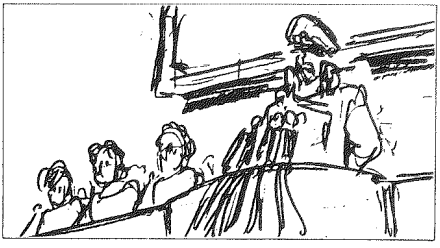
グローバルは、和平成立とプロトカルチャーについて語る。

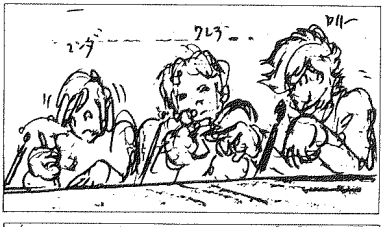
グローバル「彼らは、プロトカルチャーの驚くべき科学力によって、人間の遺伝子を変換操作して作りだされたのです」

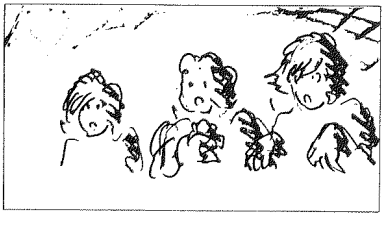
壇上には、3人の元ゼントラーディ兵士がいる。

マクロスに乗るすべての人々の目が、この放送にそそがれていた。そして人々はゼントラーディ、メルトランディの人々も、自分たちと同じ人間であることを知り驚く。

グローバル「彼らはプロトカルチャーの驚くべき科学力によって、人間の遺伝子を変換操作して造り出されたのです」





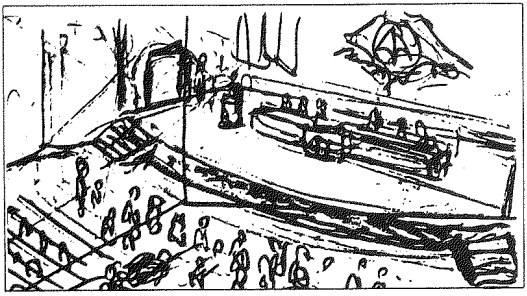


グローバル「ここに同席されている3名が、今、御覧になられたゼントラーディ人です」

どよめく記者団。

グローバル「彼らは、まったく文化を知らない戦闘人種であり、男と女というふたつの勢力に別れて、50万年もの間、戦い続けてきたものです」

ブリタイもこの放送に見入っている。3人のうれしそうな表情を見つめるブリタイ。



会場では、プログラムが進み、生還したミンメイが舞台にあがる。

「愛・おぼえていますか」のメロディにのってミンメイが話す。この歌が和平のかけ橋となるということを……。

そしてミンメイの話が終ると、司会者がオーバなセリフで未沙と輝を紹介する。

司会者「リン・ミンメイさんが待ちに待ったその人は、統合軍チーフオペレーター、早瀬少佐と、あのバルキリー、スカル小隊の一条中尉です！」

ミンメイ「!!」

ミンメイの目が輝をもとめて動きまわる。そして、それは舞台の袖で止まった。

パッとミンヘイに敬礼する輝、そして未沙。ふたりとも礼式用の軍服。純白のライトが映える。

ミンメイはマイクを握ったままふりむく。その瞳に近づいてくる輝。見る見る涙があふれ、ミンメイはなにもいえなくなる。

ミンメイ「……」

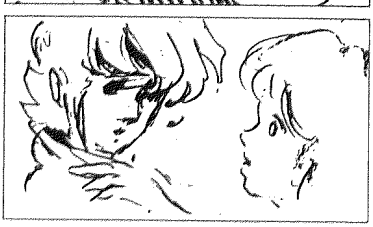
輝「ミンメイ……」

ミンメイの心に、懐しさと、そして、これまでは気がつかなかった感情が一気にあふれ出す。

ミンメイ「輝！」

そこがステージであることも忘れ、ミンメイは走り出す。駆けよるミンメイを見ながら複雑な気持の輝。しかし、ミンメイは輝の胸に飛びこんだ。

ミンメイ「輝……輝……輝……」

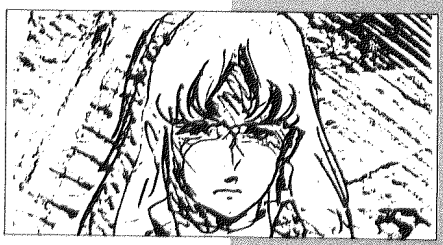


舞台の上の２人に記者団がどよめく。ミンメイは輝の胸で肩をふるわせている。しかし、輝はこまったような表情。

ミンメイ「輝……？」

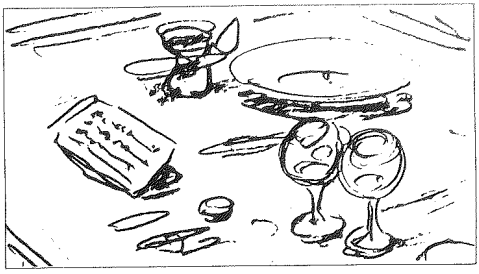
ミンメイが顔を上げる。

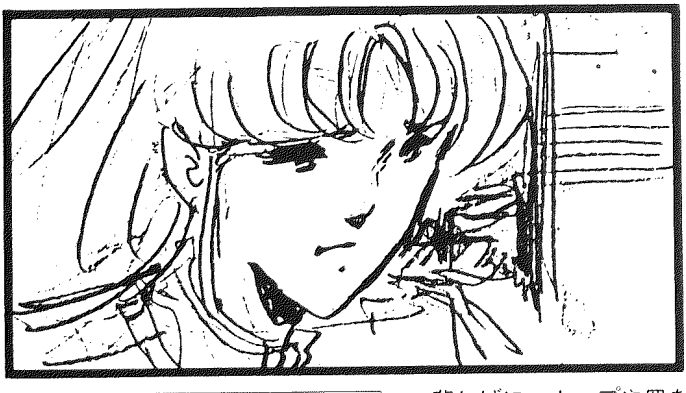
唇をかみしめている未沙。心の乱れを押さえている輝、未沙、ミンメイ。それどれの心を乱して、ステージの上に立ちつくす。

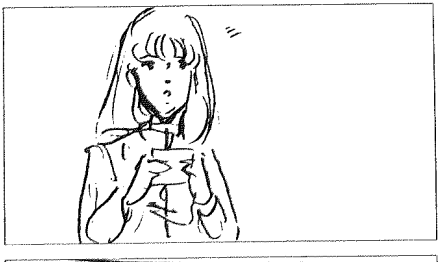


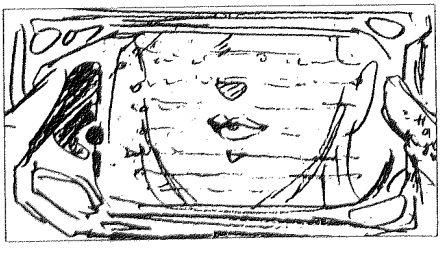
マクロス艦内では、ミンメイのもたらしたプロトカルチャーの曲に、詞をつける作業が始まっている。

そのメロディが流れる未沙の部屋。机の上に、遺跡にあった食器類。









悲しげに、カップや皿を見ている未沙。金属プレートを手にして見る。耳には、プロトカルチャーの曲――。

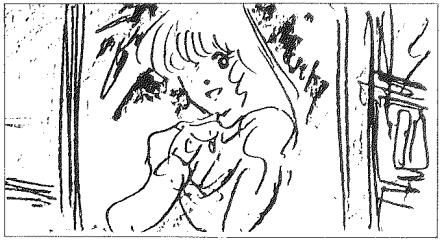
未沙「……おぼえていますか…目と目が……」

つぶやくように、訳しはじめた未沙が、途中で、ハッと表情を変える。一瞬、未沙は凍りつく。そして、曲に合わせて訳文を歌ってみる。ピタリと合うメロディーと詞!?

未沙「まさか!?」

輝の部屋。壁に張られたミンメイのポスター。輝にとっては、複雑な想いをつのらせるものになっている。

さっきから、輝は、ポスターを見つめて立っている。



輝(ため息)「ふうっ」

輝は、思い切ったように、ポスターに近づくと、それをはがしにかかる。そのとき——。

ＳＥ（チャイムの音。ピンポーン）

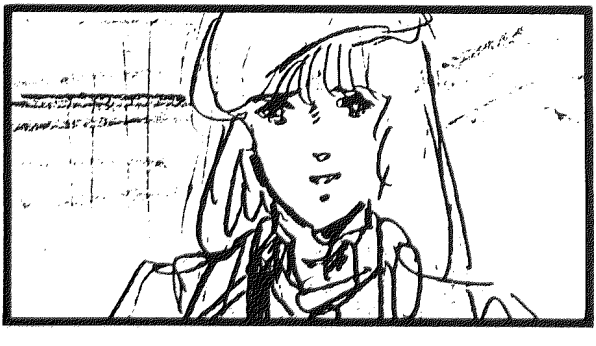
輝「はーい」

返事をしながら、輝はドアのほうへ歩く。

ＳＥ（ドア。カチャ）

輝は、ドアのノブを握ったまま、立ちつくす。

輝「ミンメイ……」

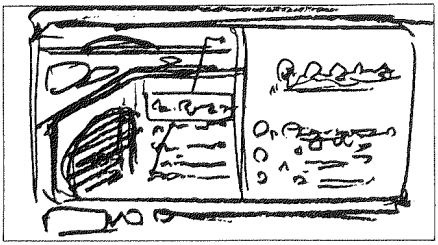


輝を見つめるミンメイは、どこか思いつめたような表情をしている。

ちょっと首をかしげた微笑も、いつもと違ってぎごちない。

同じころ、未沙は、自室のコンピュータ端末にむかっていた。キーボードのかたわらには、問題の金属プレートが置かれている。

未沙は、一心に解読を続けている。

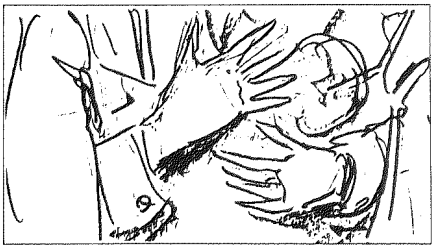


コンピュータのディスプレイの色が、さまざまに変化して、金属プレートの文字の上に、地球の言語がかぶさっていく。

一語一語とディスプイの中の地球の言葉がふえていく。

輝「今、けっこう忙しいんだろう。そういえば、例の歌の歌詞はできた？」

輝は、コーヒーメーカーから、カップにコーヒーを注いでいる。



その輝の胸に、ミンメイが後ろから手をまわす。

輝「！……ミンメイ」

ミンメイは、輝の背に頬をよせている。

ミンメイ「好きよ」

ミンメイの思い切った告白。迷いに迷って、輝の部屋にやって来たのだろう。

輝にとっては、複雑であった。ミンメイには、以前憧れていた。そして、恋をした。しかし、今は、彼の心の中には、未沙が住んでいる。ミンメイも、それに気づいているようだ。

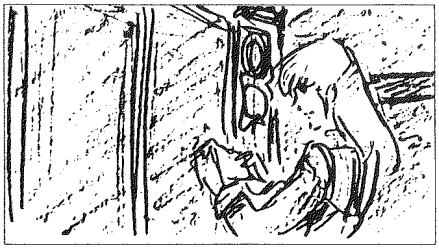
ミンメイ「あの人との間に、何かあったか知らないわ――」

輝は、ミンメイから、視線をそらす。

ミンメイ(off)「でもね……、それでもね……（ここからON）私は、あなたが好き……」

ミンメイは、また輝の背に顔をうめる。切ない思いが、輝の背を通して、伝わるかのようだ。

輝の手が止まっている。だいぶ前から、コーヒーがカップからあふれ、流れ出している。

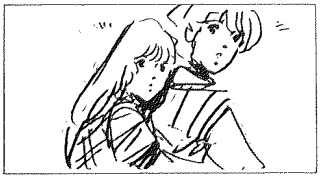


エレベーターの中。未沙が、手にした紙片を見つめている。
あの金属プレートの訳だ。そして、それは、ミンメイのもたらした曲の、歌詞らしい。

エレベーターが止まった。

輝は考えている。どう言おうか……。ミンメイは、不安と期待の心に耐えようと、輝の背に抱きついている。

輝「ミンメイ……。僕はね」
輝がようやく口を開いた。



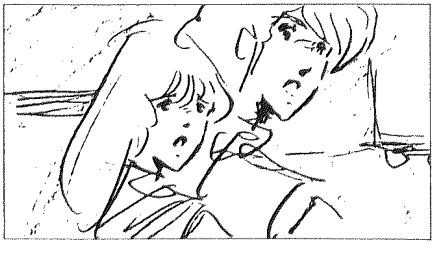
輝の部屋のノブがまわされた。その音に、ふたりは、ドアに目をやる。ドアが開いて、未沙が入ってくる。

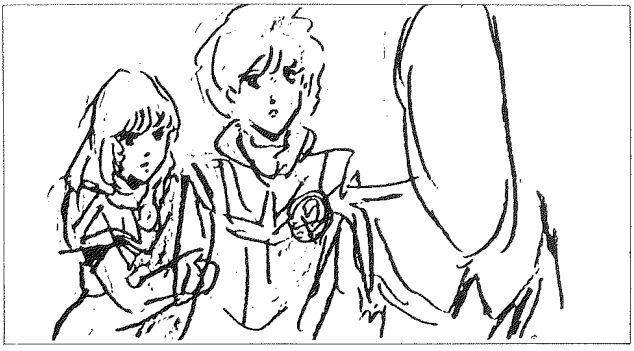
顔を上げた未沙がふたりに気づいた。
未沙「!!」
呆然と立つ未沙と、気まずい思いの輝、そして、ミンメイ。

未沙が閉めるドアの音が耳に痛い。

未沙は、ドアを閉めると、うつむいたまま輝のほうに歩み寄る。

立ち止まって、まだ輝の背に抱きついたままのミンメイを見つめる。ミンメイは、まだ呆然としている。



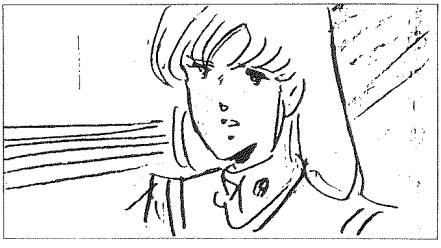


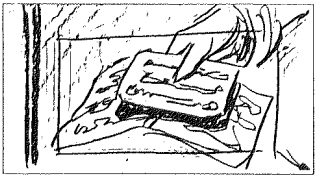
ようやく、ミンメイが輝から離れる。輝も、未沙のほうに顔をむける。

輝「……少佐……」

ミンメイは、輝の後ろで未沙を見すえている。

未沙「どういうこと？」





未沙「これが何だかおぼえてる？」

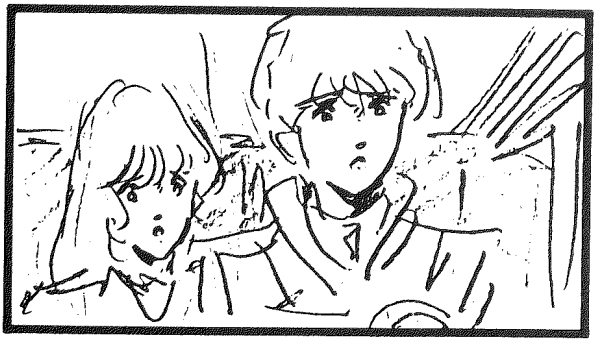
未沙は、輝を非難するように、金属プレートと訳詞をさし出した。

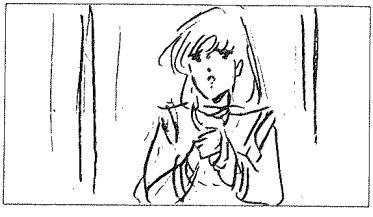
輝「あ!?　…ああ……」

未沙「遺跡の街で見つけたプレートよ！　これを解読したら、あの曲の歌詞みたいだってわかったから……」

未沙の心から、怒りが急速に引いていった。そのかわり、やりきれない悲しみが、心を押しつぶす。

未沙は顔をふせ、プレートと歌詞を握りしめる。





輝は、そんな未沙を見ていることに耐えられなくなった。思わず、1歩、2歩と前へ出る。

輝「ちょっと待って。違うんだよ。それは、きみの誤解……」

輝の言葉が、ミンメイの叫ぶような声にとぎれる。

ミンメイ(off)「違うだなんて！」

輝「!!」

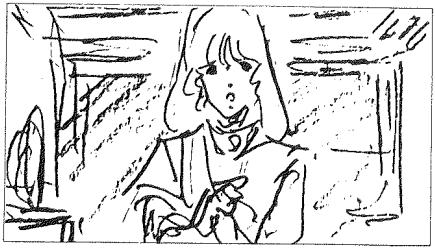
輝「……あの歌の……!?」

ミンメイ「……」

未沙の心は乱れる。高ぶった感情が、一気に吹き出すように、未沙は話す。

未沙「あなたに、最初に確かめてもらおうと思ったのに……」

一気に喋ると、未沙は崩れるように肩を落とす。倒れそうな体を、かろうじて手をついて支えているようだ。



ミンメイ「誤解だなんて……」

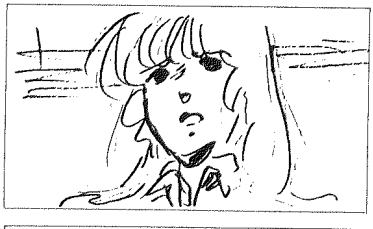
輝の言葉の中にある、未沙への思いが、ミンメイの立場をはっきりさせた。

ミンメイの目が、心なしかうるんで見える。

輝は、ミンメイの気持ちを考えなかった自分を、呪わしく思う。思わず見やるミンメイの目が、キラキラと濡れている。

未沙もまた、思わぬなりゆきに、ミンメイのほうへ視線をやる。

ミンメイの顔が、悲しみにゆがむ。



ミンメイ「あんまりだわ！」

怒りでもない、悲しみでもない——しいて言うなら、そのふたつがないまぜになったような感情に、ミンメイは叫ぶ。

ミンメイ「あんまりよ!!」

ミンメイは、今の輝の言葉をふりはらうように首をふると、ドアの外へと駆け出す。

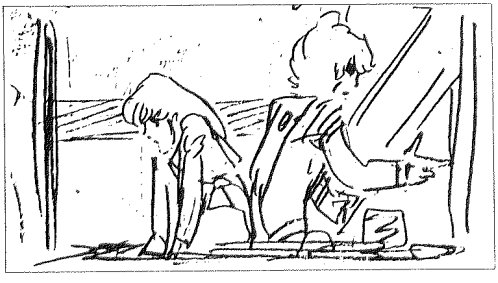
輝「ミンメイ！」

追おうとした輝の鼻先で、ドアが閉まる。

未沙「早く追いかければいいじゃない！」
　ドアのところで思い迷う輝に、未沙がはきすてるように言う。
未沙「せっかくまた会えたのよ。遠慮することないわよ！」
　輝は、じっと黙っている。
未沙「同情なんて、されたほうがみじめよ！」
輝「そんなんじゃない！」
　輝は叫ぶ。未沙は、ビクッと喋るのをやめる。

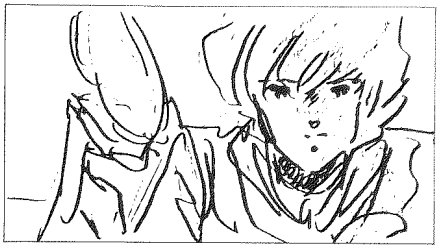
輝「そんなつもりじゃない……」
　輝は、未沙と背中合わせのままに話し続ける。

輝「――誰もいない地球をふたりでさまよい歩いて、なんとか無事にマクロスに戻れて、街の中でミンメイの歌を聞いたとき――」
輝(off)「スクリーンの中の彼女を見たとき……、わかったんだ」



壁にミンメイのポスター、そしてテーブルの上に、彼女の忘れていった帽子――。

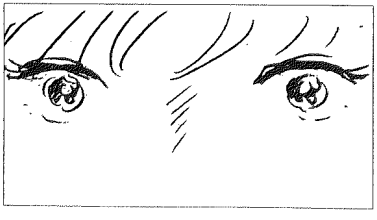
輝の後ろには、背中をむけた未沙――。



輝「いつまでもそばにいてほしいのは……、きみだってこと」

輝は、ようやく自分の心を未沙に告げた。

未沙の目が見開かれる。思ってもみなかった――でも、どこかで期待し、待っていた言葉。

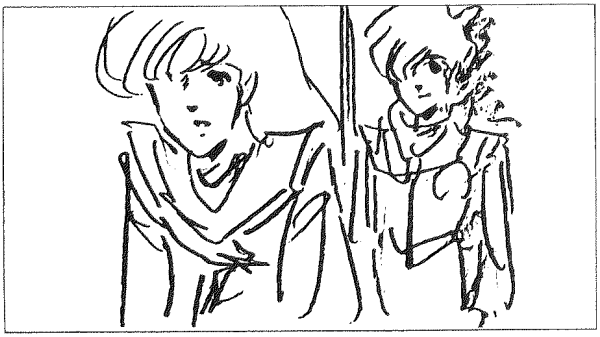


輝「今でも……、そのつもりだ」

輝は、気持ちが楽になる。ようやく言った、ようやく言えた。輝にとって大切な人は、未沙。

未沙「……本気なの……」

後ろをむいたままで、未沙はきいてみる。まだ、輝の顔が見られない、心のどこかで、別の答えを怖がっている。



輝は、未沙のほうに振りむく。その表情は真剣だ。

輝「いつ死んじまうかもわからないけど……、こんな僕でよければ……」

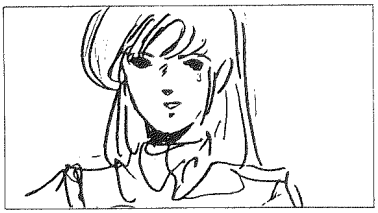
さすがに、ちょっと照れくさい。

未沙の目に、みるみる涙があふれる。涙を手で押さえても、気持ちが外に飛び出しそう。

未沙「……（息のもれる感じ）」

涙が少し流れる。

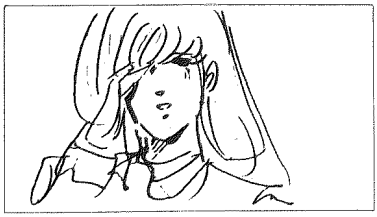
未沙「（しゃくり上げる）」

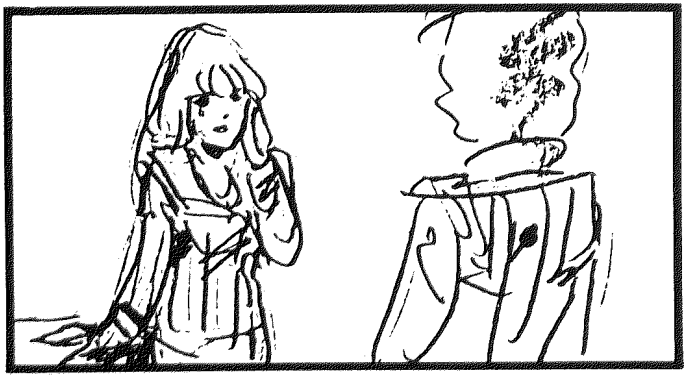


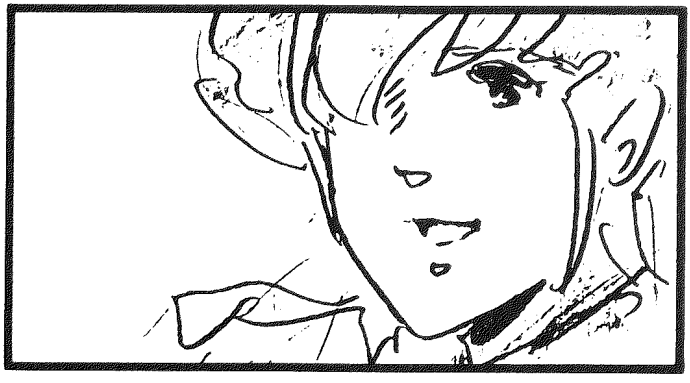
未沙「……フフッ……、どうしたんだろう……。おかしいね、輝」

未沙は、輝のほうに振り返る。体を手で支えて、息を整える。

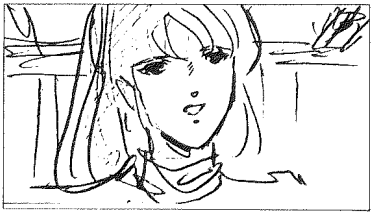
未沙「涙が、止まりませんよ……」





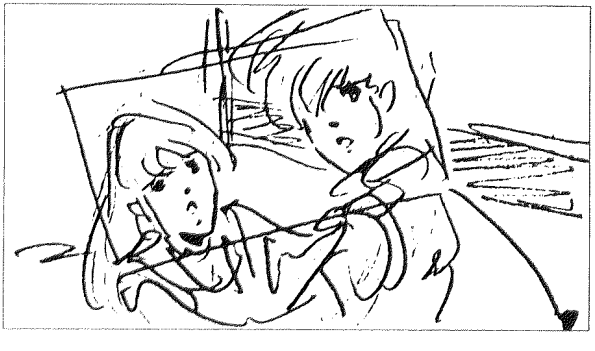


未沙の前に、今は、輝の笑顔がある。そして、未沙の名を呼ぶ。おそらく、輝にとって初めての〝未沙〟という言葉――。



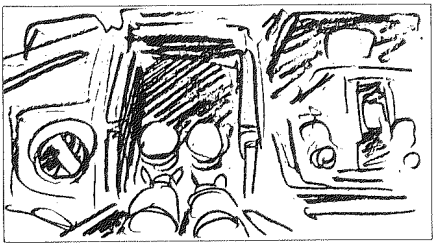
輝「未沙……」
未沙「……ああ……」
未沙は、輝の腕の中へ飛び込む。ようやく見つけた、温かい腕。
未沙(off)「……輝……」

未沙の手が輝の肩を抱き、輝が倒れそうな未沙の体を、柔らかく包む。



突然、部屋のスピーカーが、それまでの沈黙を破る。
ＳＥ（警報器の音。ピーッ）
思わず天井を見るふたり。
未沙「第１級非常態勢！」

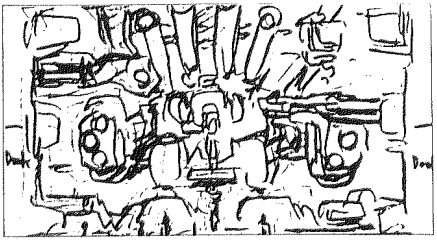
バルキリーの格納庫内。パイロットも整備員も、緊急事態の発生に応じて、飛びまわっている。翼をたたまれたバルキリーが2機、兵装チェンジ区画に入る。展開する主翼。



アナウンス「Attention! Attention! Take positions for maximum impact. This is not a drill. This is not a drill」

デストロイド・トマホークがミサイルを補充する。

巨大なモンスターが、4連装主砲をふりかざして、所定の位置へと移動していく。



アナウンス「A "Fold reaction" has just been identified. Many ships are approaching in a cluster formation. Supposed to have 60 second before」

警報は、全艦内に響いている。その中で、輝は、未沙の訳した詞を手にして、ミンメイを探していた。

未沙(off)「この歌詞をミンメイさんに」

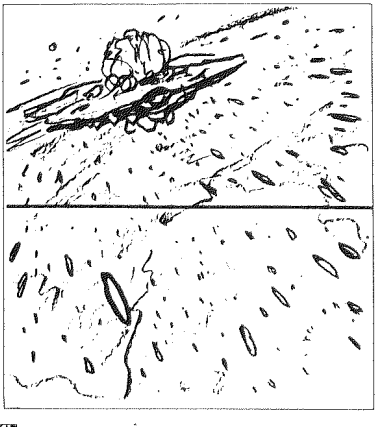
曲があり、それにピッタリの歌詞がある。そして、それを歌う人もいるのだ。

輝は、公園から走り出て、また別の方向へむかう。

地球上空にとどまっているボドルザーの艦。

ボドルザー「ヤック!? 歌詞ができていないだと!?」

ボドルザーの目が、ギロリと動く。部下の失策を責めているようだ。



声「サ、タルニ、あのリン・ミンメイが行方不明とのエルケルです」

ボドルザー「ダンソ デ・カルチャ!」

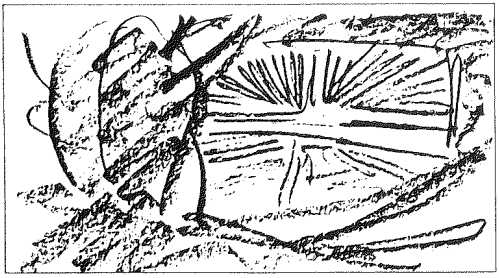
そのとき、さらに新しい報告が入る。

声「ズカラ ウゴルク メルトラン」

ボドルザーの目の前の、浮遊スクリーン上に、地球の水平線が映しだされている。

ボドルザー「!!」

そこに強烈な輝きが現れる!!



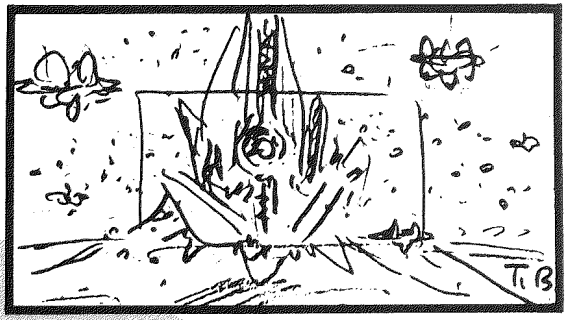
スクリーン上に、メルトランディ艦隊の、デフォールド光が映る。

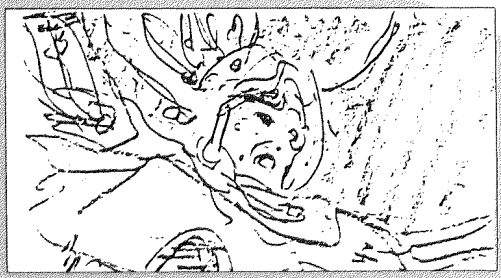
その中から、次々に出現するメルトランディの大艦隊。ラプラミズ隊である。

地球の上空は、あちこちにデフォールド光が輝く!!

そのメルトランディ艦隊の中央に、ラプラミズの巨大な艦が出現する。

他を圧して宙に浮かぶそれは、ボドルザー艦にも匹敵する大きさだ。





ボドルザー「メロディだけでも、発信せよ！」

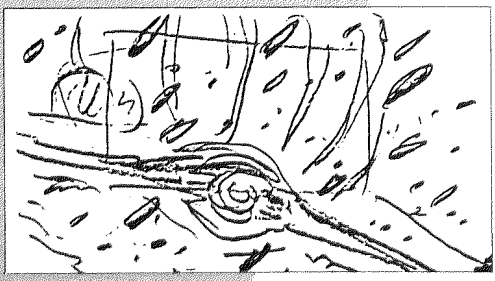
ラプラミズ艦隊にむけて、未完成ながらも〝歌〟の力で戦おうというのだ。

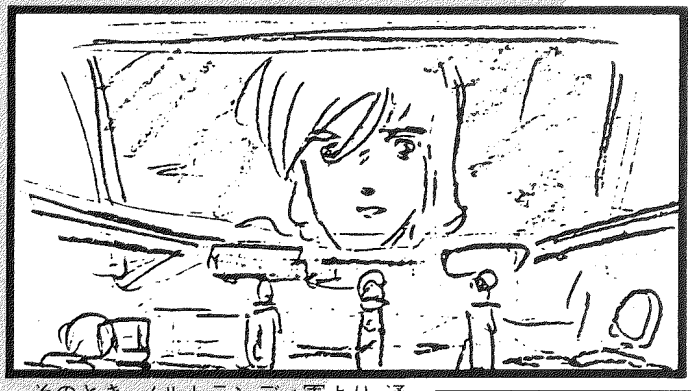
ボドルザーの命令に、ただちに部下が動く。

ボドルザー艦隊の中央部。周囲には、護衛の艦が浮遊している。

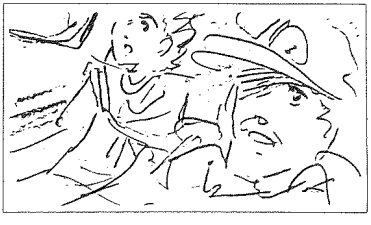
ＭＥ(「愛・おぼえていますか」のスキャット版)

同時に、艦隊が一斉回頭する。





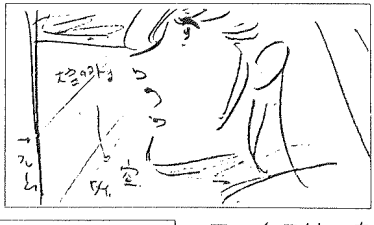
そのとき、メルトランディ軍より、通信がマクロス、ゼントラーディ両軍に入った。しかし、それは、女性の声ではなかった。それは、ミリアと戦って行方不明のマックスの声!!



マックス「メル……ンディ……り、ゼ……ディの……へ」

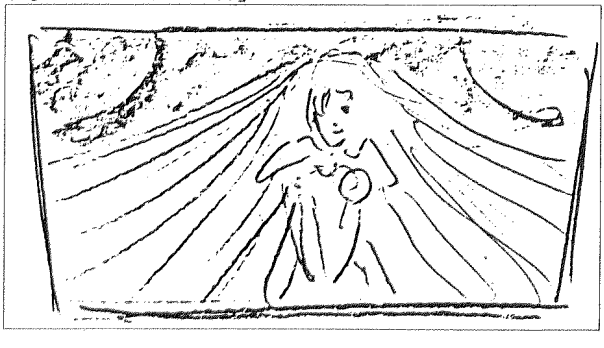
次第に声がはっきりしてくる。

マックス「メルトランディより、ゼントラーディのみなさまへ」



クローディア「マックス!!」

未沙「どういうこと!?」

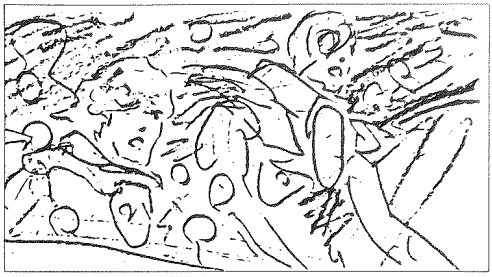


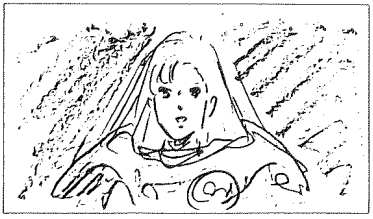
マックスは、自己紹介して、そして言う。

マックス「そして、彼女は――」

声と同時に、長い髪をなびかせたミリアが、画面に入ってくる。

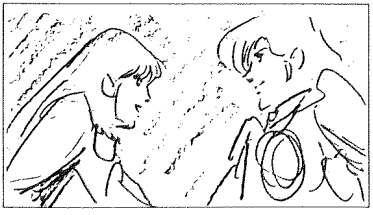
ミリアは、マックスの後を受けて話しだす。
ミリア「私は、ミリア437。これまでずっと、バトルスーツのパイロットとして、あなた方と戦い続けておりました。しかし、彼と出会って初めて――」





ミリア「――戦い以外にも、すばらしいことがあると知りました」

ミリアとマックスの通信は、マクロスだけでなく、ゼントラーディ軍の中にも驚きを生んだ。そしてそれは、さらに大きくなっていく。

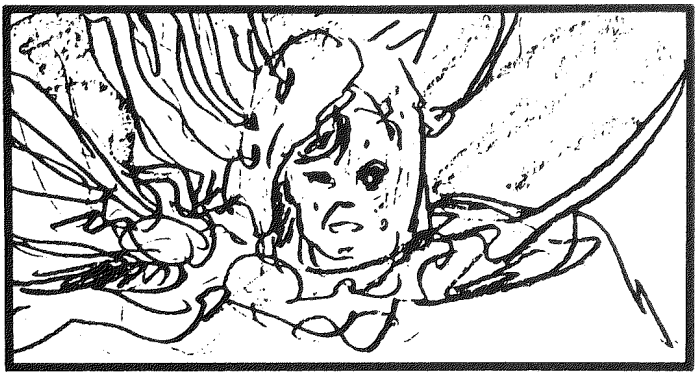


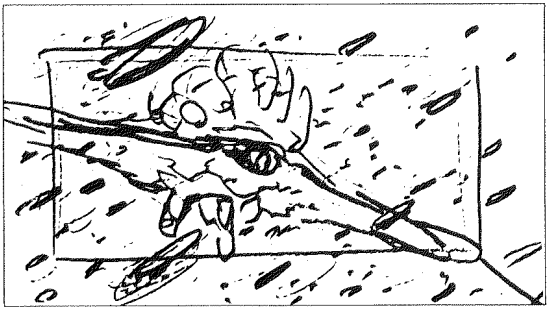
ふたり「わたしたち、結婚します」
マックスとミリアは、kissをする。

ゼントラーディ兵たち(off)「(どよめき)おお～～～～」

マックスとミリアの宣言に合わせて、メルトランディの兵士が、銃を投げ捨てる。
ふたり「ゼントラーディのみなさま。今すぐ武器を捨てて、ともに和平を結ぼうではありませんか」

シャミー「すてき……！」
だが、未沙は納得しない。
未沙「おかしいわ。こんなに簡単に……」
グローバル「うむ！」

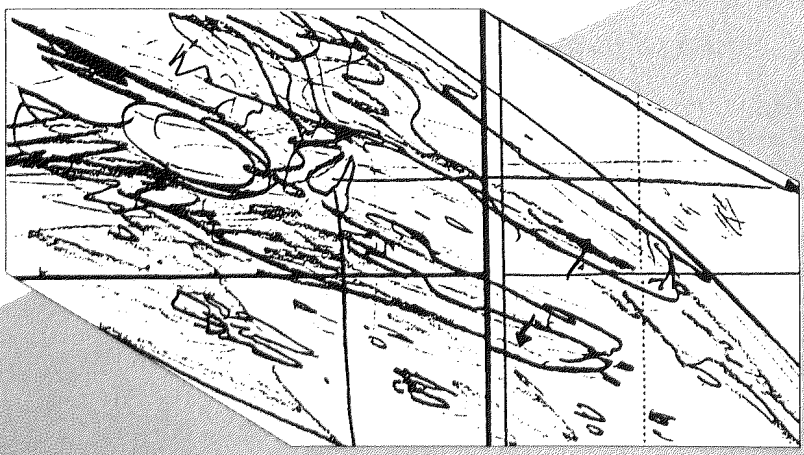




グローバルは、そこにメルトランディの作意を感じとる。

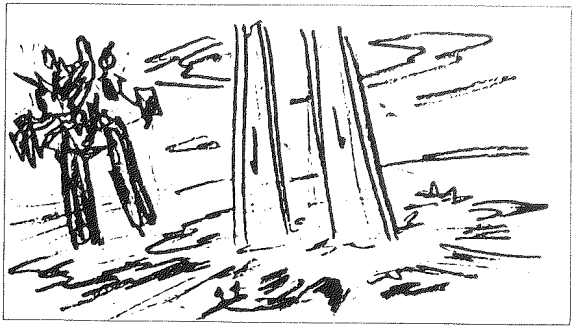
そして、ボドルザーも……!!

マクロスは、緊急発進し、ボドルザーは、マクロスとメルトランディを砲撃!!



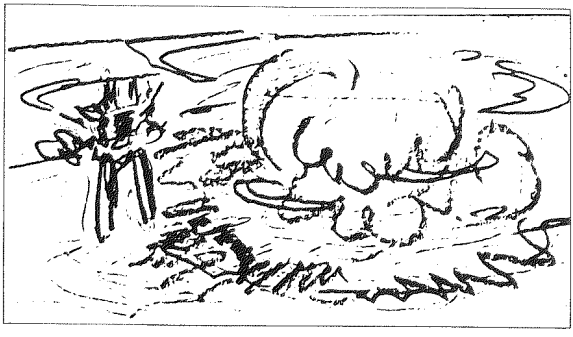
ゼントラーディ軍の砲撃は、大気を突き破り、都市宇宙船に迫った。

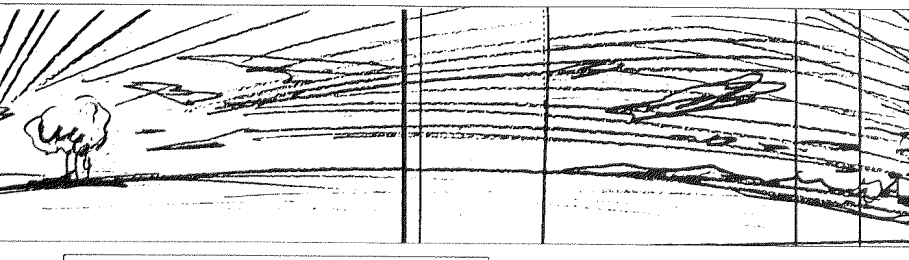
かろうじて発進したマクロスをかすめたビームの束が、都市宇宙船を消滅させる。

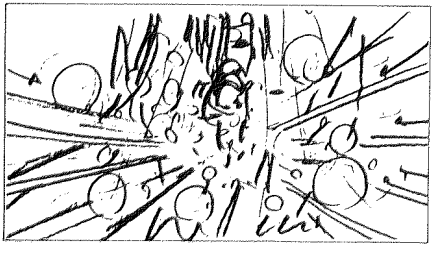


すさまじい光、そして、海上を抜けてゆく衝撃波!!

巨大なキノコ雲が成層圏にまで昇り、その上空では、ゼントラーディとメルトランディのビームが交差する。





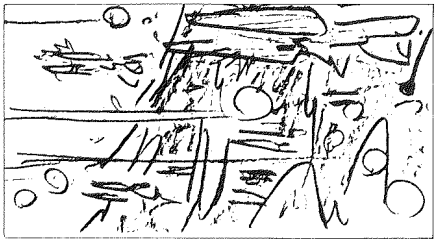


ラプラミズの直営部隊も、ゼントラーディ軍のビームの中に消えていく。

戦いは、すでに両司令同士の消耗戦となった。どちらが多く相手の手駒を殺すかだ。

ラプラミズ「クッ、デブラン ボドルザ！」

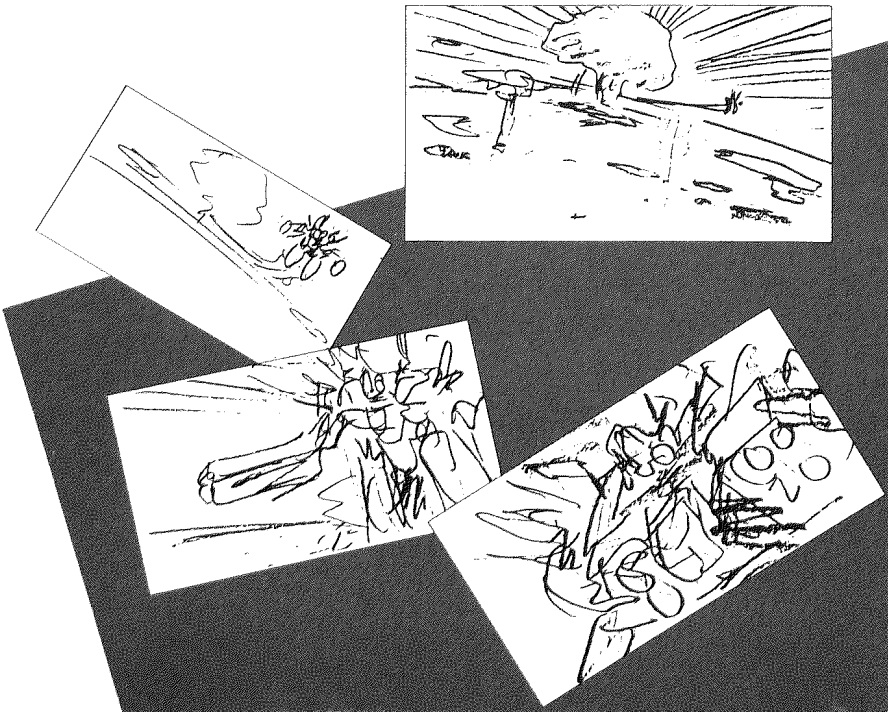
ラプラミズの直営部隊も、反撃に転じる。その艦首の主砲がゼントラーディ軍の中枢へと発射される。

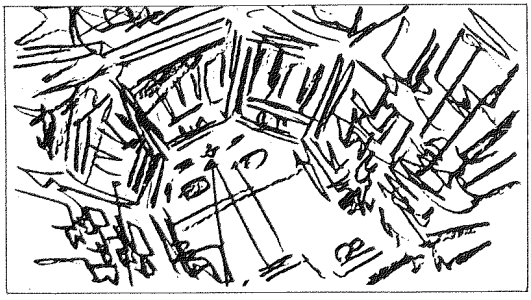


事のなりゆきに、マックスたちは、利用されたことを悟る。

ミリア「ラプラミズ総司令!?」

一方、マクロスは、戦場にむけて急上昇!!



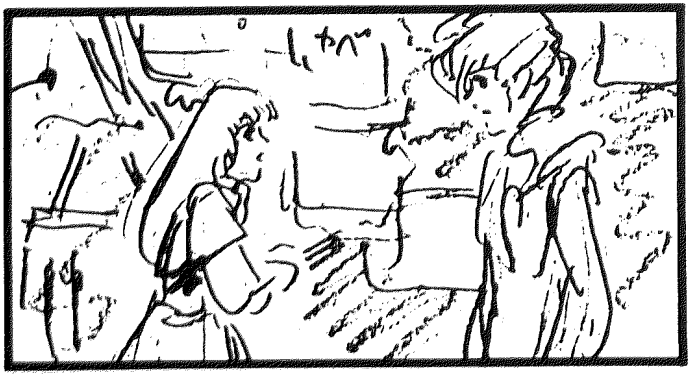


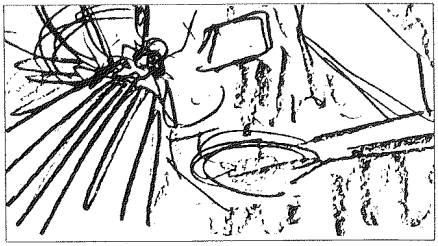
輝が、マクロス艦内を走る。ミンメイのいる場所は、あの日、土星を見た展望室と、輝は確信していた。

そして、ミンメイはそこにいた。シャッターの閉じた展望室。静まりかえった中で、ミンメイはすわっている。

そこに輝の足音――。

輝「ハァ、ハァ…ミンメイ」
ミンメイ「来てくれたのね。私のために、来てくれたのね……」
輝「きみに、この歌を……歌ってもらいたい……」
予想外の答えに、ミンメイはショックを受ける。





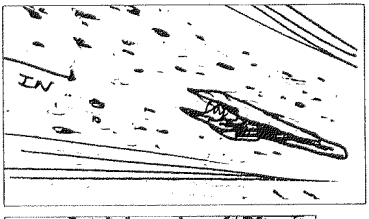
ボドルザーは、ラプラミズを葬るために、味方の犠牲をも無視した。

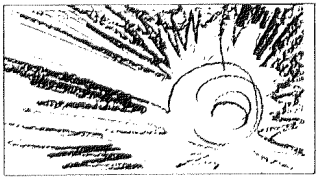
ボドルザー「かまわん！」

ガドラス！（撃て）」

味方を消しながら、敵旗艦に伸びるビーム！

ブリタイ「ヤック!?（なに）」

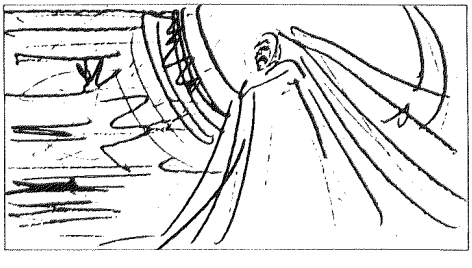




太いビームが、ブリタイ艦の脇を駆け抜けていく。そのビームはすでに味方の数万隻を葬っているのだ。

ビームは、ラプラミズ艦に直進する。そして、その護衛を消し、ラプラミズ艦本体へと達する。ドンと船体に穴があき、さらにビームは、ラプラミズを包み込む。

ラプラミズ「デ・カルチャーッ!!」



ミンメイは、うたうことをこばんでいる。

ミンメイ「そんなもの、歌ったって、勝てる見込みなんかないじゃない！」

輝「僕らだけの問題じゃない。マクロスに乗っているみんなのために……」

ミンメイは、顔を上げる。涙を浮かべた目で、輝を見る。

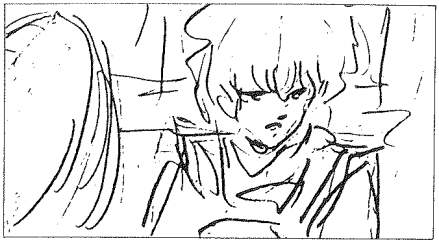
ミンメイ「そんなの関係ないじゃない！——どうして世の中にいるのが私たちふたりきりじゃないの。あなたと私以外、みんな死んじゃえばいいのに……」

パンとミンメイの頬が鳴る。

ミンメイ「キャッ」

輝の平手が、ミンメイに飛んだのだ。

少しよろけながら、ミンメイは、壁ぎわに手をつく。閉じていた目を開け、輝をキッと見すえる。その目に、ミンメイをぶった手を押さえ、肩をふるわせる輝の姿——。

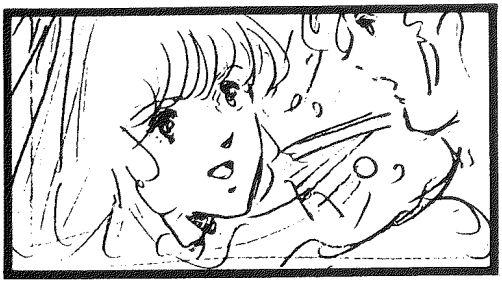


輝「先輩だって……、柿崎だって……、みんな死んじまったんだ……。やりたいことだって、いっぱいあったろうに……」

ハッとするミンメイ。そのとき、展望室のシャッターが被弾して砕け散る。重力制御も切れ、ふたりは透明の壁越しに、宇宙を背景に浮かび上がる。

ゆらりと、輝がミンメイに近づく。そして、肩に手をおく。

輝「きみはまだ、歌が歌えるじゃないか」



ミンメイは、うるんだ瞳で輝を見ている。そして、何かをふり切るように、軽い溜め息をついて……。

ミンメイ「ごめんね。輝……」

ふたりのむこうに戦闘の光。

ミンメイ「どうかしてたわ……。私……」

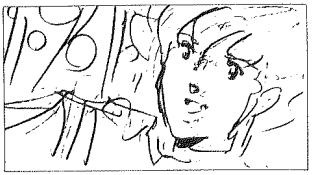
ミンメイ「自分から好きでこの道、選んだんだものね……」

輝の顔が、すうっと明るくなる。

ミンメイ「ここで歌わなかったら、死んじゃったお父さんやお母さん、浮かばれないわ」

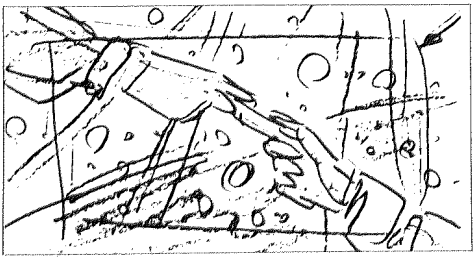
輝「ミンメイ……」

ミンメイは、いつもの笑顔に戻っている。輝もまた、友達同士のくったくのない笑顔。

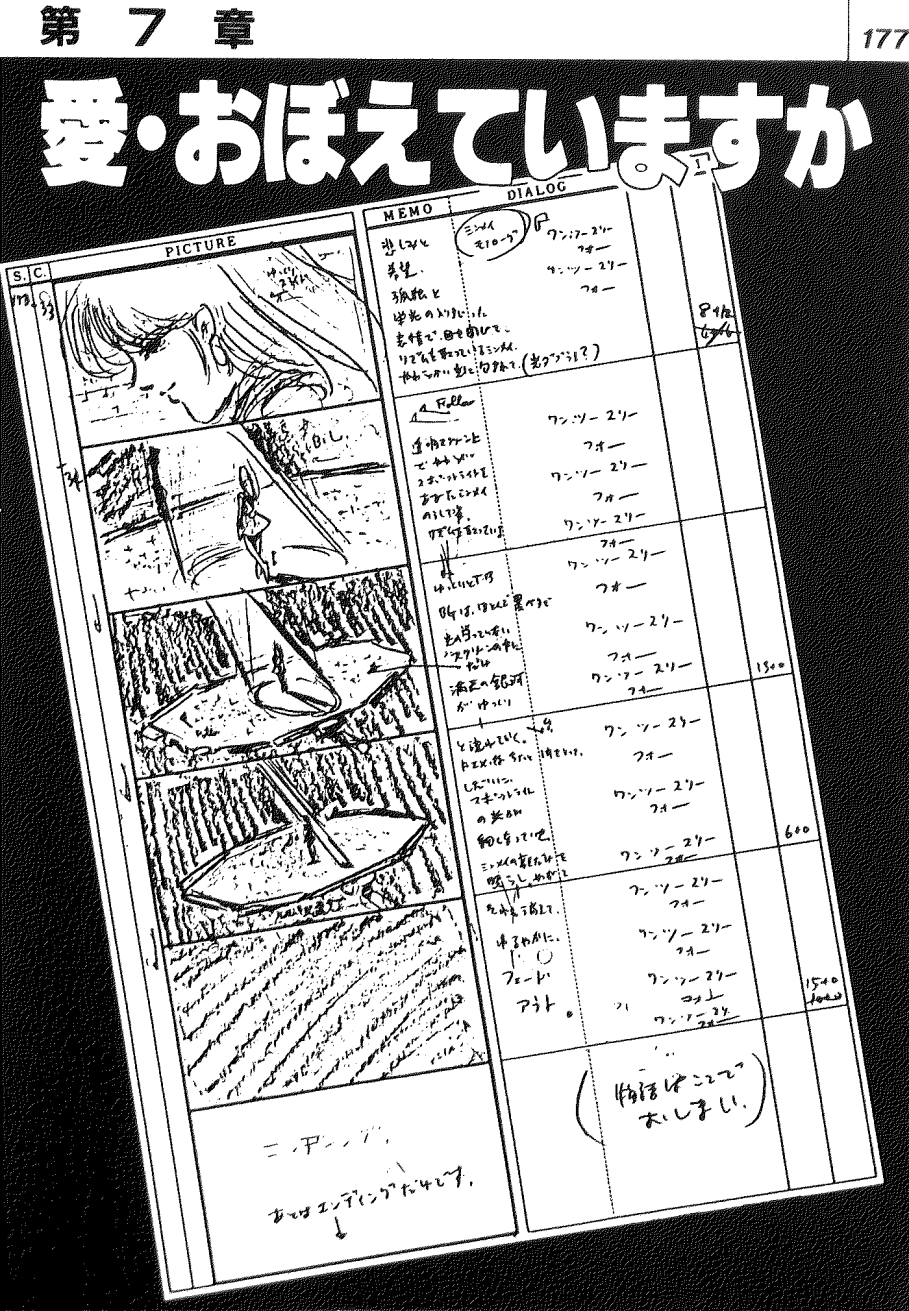


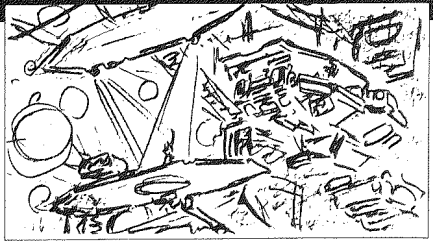
ミンメイ「私歌うわ。思いっきり！」

ミンメイの手に、輝から歌詞がわたされる。そのむこう——透明壁の外に、戦いの炎!!

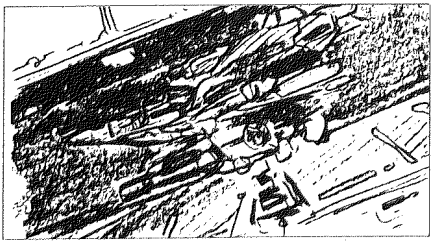


愛・おぼえていますか


S.C.
PICTURE
MEMO
DIALOG
ワンツースリー
フォー
ニンゲン。
おわり エンディングだけです。
物語はここでおしまい。

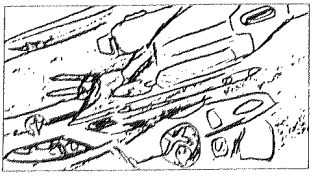


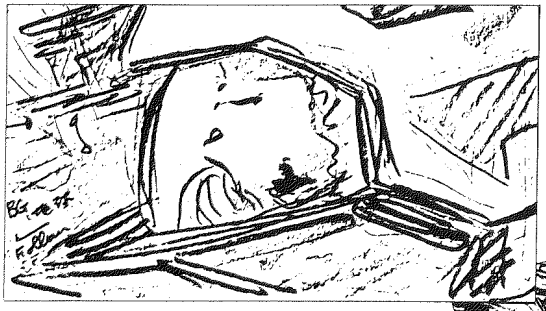
ME「愛・おぼえていますか」
ブリッジの特設ステージに、ミンメイが立つ。そこは、未沙の位置のすぐ下。お互いに顔の見えるところ――。



輝のバルキリーが、アームドⅠの発進位置につく。胴体のドクロのマークが光る。

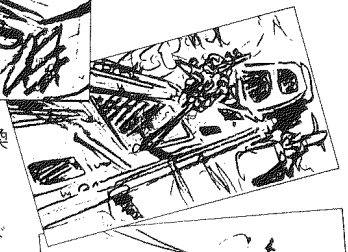
ミンメイの歌の前奏が流れ、未沙が、それを聞きながらパネルを操作している。
戦いの前の、緊迫した時間。





コクピットの輝も、音楽を聞いている。そして、発進!!

発進用アームから、機体が離れる。

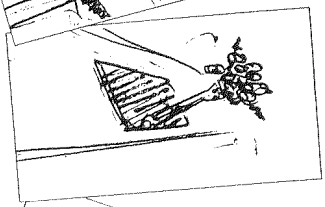


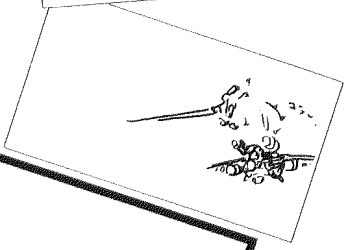
バーニヤを使って、ゆっくりと90度転換すると、ブースターに点火。

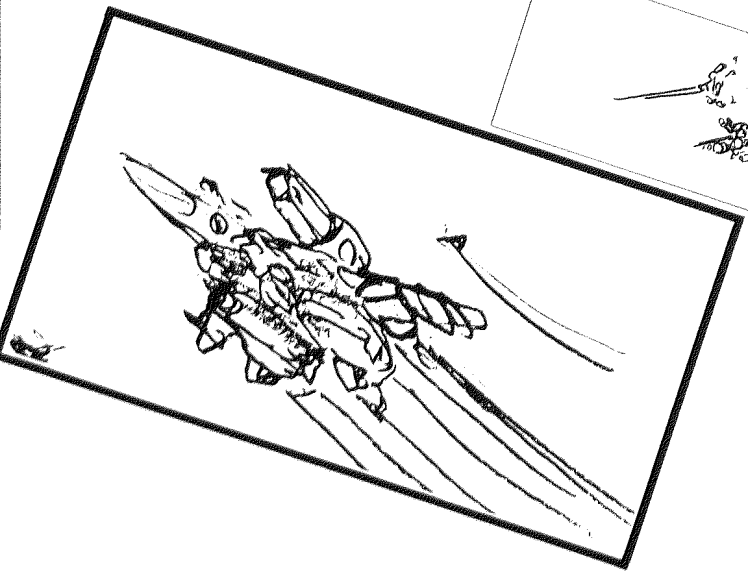
輝のバルキリーの白い機体が、アームドIの船腹をかすめて、前方の闇の中へと突進していく。

白く残る噴射煙に、ミンメイの歌が重なる。

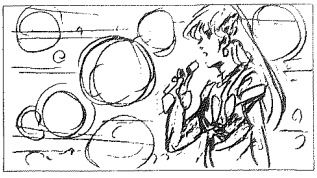
ミンメイ(歌)「今、あなたの声が聞こえる」



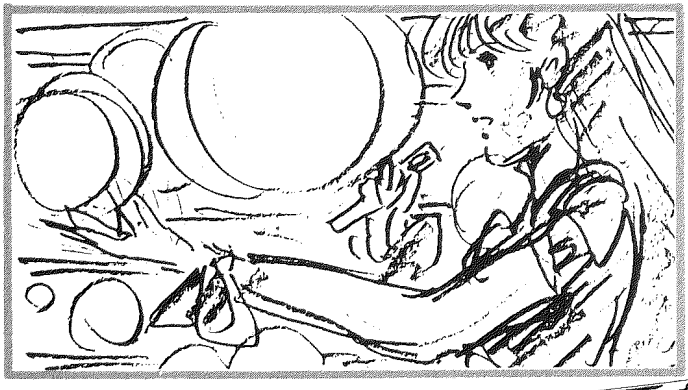




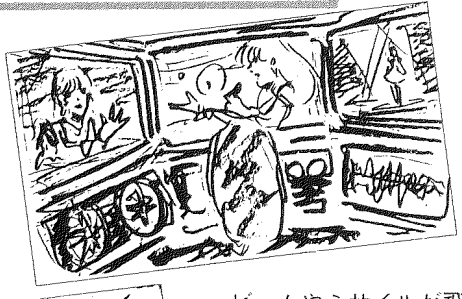
ミンメイ(歌)「――ここにおいでと――」



歌うミンメイの後方――ブリッジの外は、すさまじい光の乱舞。そのひとつひとつが、爆発するバトルスーツやバルキリーである。

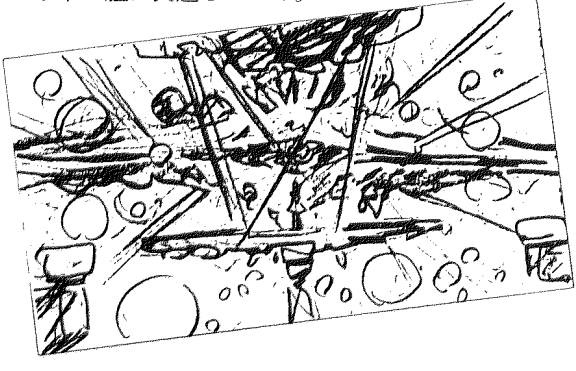


ブリッジの近くの放送用メカブース。カイフンが、ミンメイの画像を調整している。



ミンメイ(歌)「寂しさに負けそうな私に――」

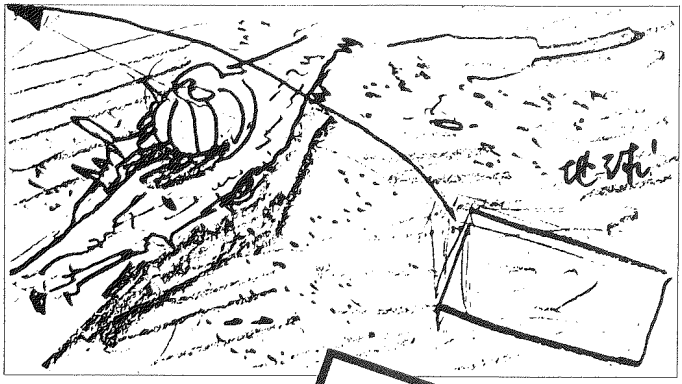
マクロスは、歌を流しながら、ボドル艦に突進していく。



ビームやミサイルが飛びかい、爆発光が広がる空を、マクロスがいく。

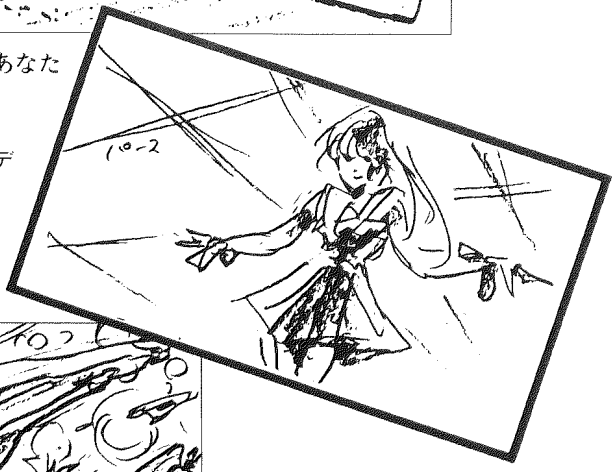
そのブリッジで、戦場を見つめながら、ミンメイは歌う。

間奏――大きく体をゆらして、左手をさっと突き出すミンメイ。



ミンメイ(歌)「今、あなたの姿が見える――」

戦闘中のヌージャデル・ガーとクアドラン・ローが、ミンメイの歌に、思わず振りむく。



その2機を包み込むように、いや、戦う者のすべてを包み込むように、ミンメイの歌が流れる。
ミンメイ(歌)「――歩いてくる　目をとじて待ってるわ――」

呆然とするゼントラーディ・パイロットとメルトランディ・パイロットの顔。

ミンメイは、無心に歌う。それは、ミリアとマックスの耳にも届く。

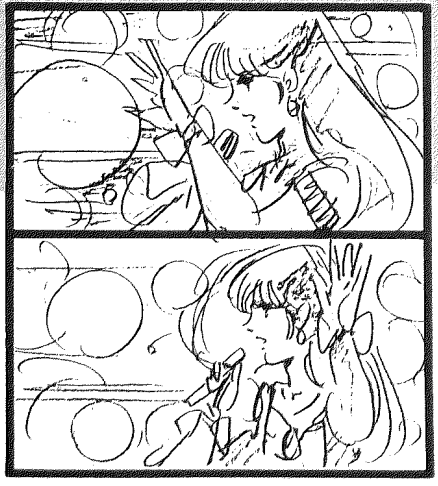
ミリア「これは……？」
マックス「ミンメイの歌だ……」
ふたつの心に、ひとつの歌が染み通っていく。

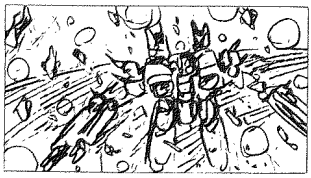
歌うミンメイ。スーッと左手を上げ、それを開いていく。

ME（伴奏）

マクロスがいくのは戦場――しかし、そこに歌が流れる時、戦場は戦場でなくなっていく。

ミンメイの歌を聞いたゼントラーディ、メルトランディ両軍に、やがて変化が現れる。

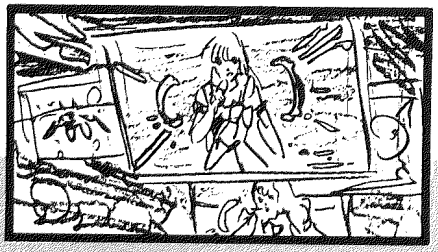




地球を背に、強攻型のマクロスが、爆発光を押しのけるように前進する。そのマクロスから放送されるミンメイの映像が、ブリタイ艦内のスクリーンに映し出されている。

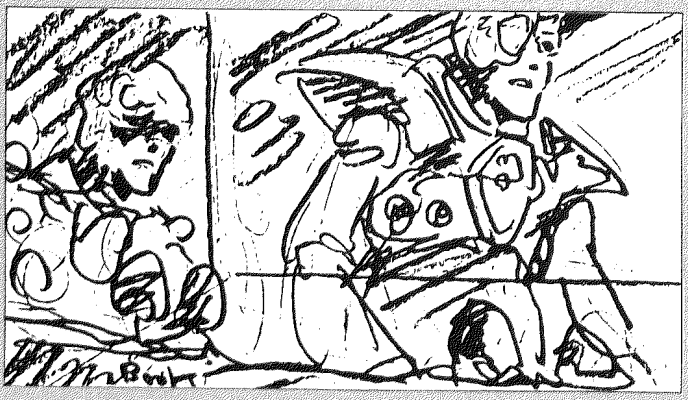
ブリタイ「不思議だ……この歌……」

いつの間にか、ブリタイは、身を乗り出している。



ブリタイ「ずっと昔、聞いたような気がする……。なぜだ……!?」

ミンメイ（歌）「きのうまで涙でくもっていた　心は今――」



ブリタイとエキセドルの胸に、何かが甦ってきた。

ブリタイの胸部につけられたパネルが、ミンメイの歌のリズムに合わせて、明滅を繰りかえしている。

ブリタイとエキセドルは、なおも歌に聞き入っている。

ミンメイ（歌）「おぼえていますか、目と目があった時を――おぼえていますか……」

ミンメイの左手が、歌のリズムをとって大きく横に開かれる。

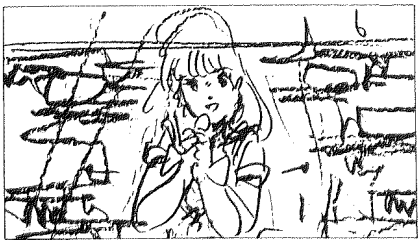
それをスクリーンに見るブリタイの胸のパネルが、光を強める。

マクロスもまた、ミンメイの歌にのるかのように、地球を離れてゼントラーディ陣営の中へと、突入してゆく。

ミンメイ、体でリズムをとる。

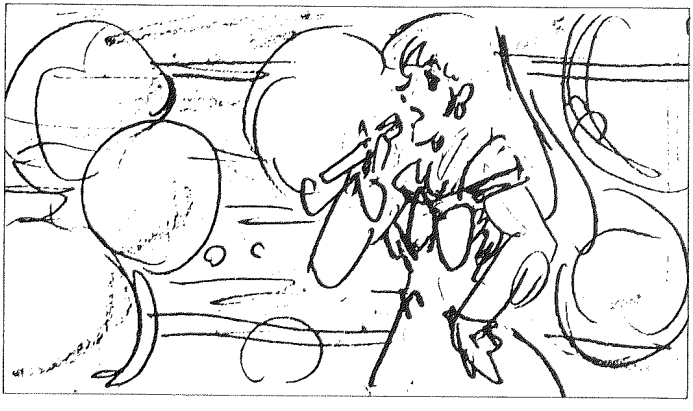
『愛・おぼえていますか』は、ゼントラーディの中に、たったひとつ残された〝文化の断片〟。それが今、はるかな時空をへだてて甦ろうとしている。

ミンメイは、文化を呼ぶ。



エキセドル「わかりました」
ブリタイ「!?」
エキセドル「我々の遺伝子提供者のカール(意識)チューンが……呼びさまされているのです」
ブリタイ「なに!?」
遠い過去の記憶——文化の復活であった。
エキセドル「50万周期の時を超えて……」
ブリタイ「我々にも、文化が甦るのか!!」

ミンメイ（歌）「おぼえていますか——」

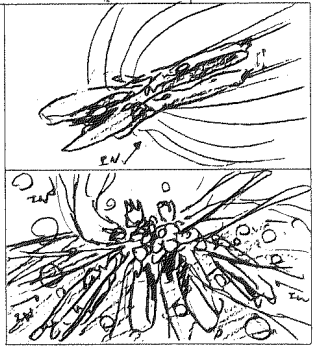


ミンメイ（歌）「——手と手が触れあった時
それが初めての愛の旅立ちでした——
I love you so—」

ミンメイ、スッと左手をかまえて、頭上へ上げる。そして、正面にさしのべる。まるで愛を手渡すかのように。

2コーラス目へ、間奏が盛り上がる。

マクロスは、ボドル艦に接近。すでに、敵艦の射程内である。



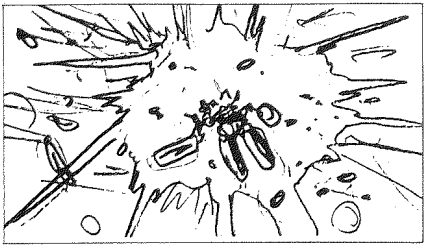
ボドル艦を囲んだ戦艦群が、マクロスに対して砲門を開く。マクロスにむかって、ビーム、ミサイルが次々に飛んでいく。

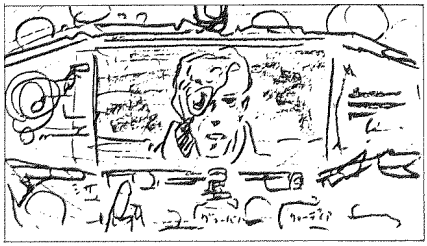
強攻型のあちこちに、パッパッと弾着の炎が見える。

マクロスに命中した一部は、外板から、その下の装甲を破り、ついに街の中へ！

市街地の中心部に、天井を破ってきたビームが突きささる。一瞬、街の中がまっ白な光に包まれる。

シェルター内の人々は、その異様な振動に、不安な表情――。





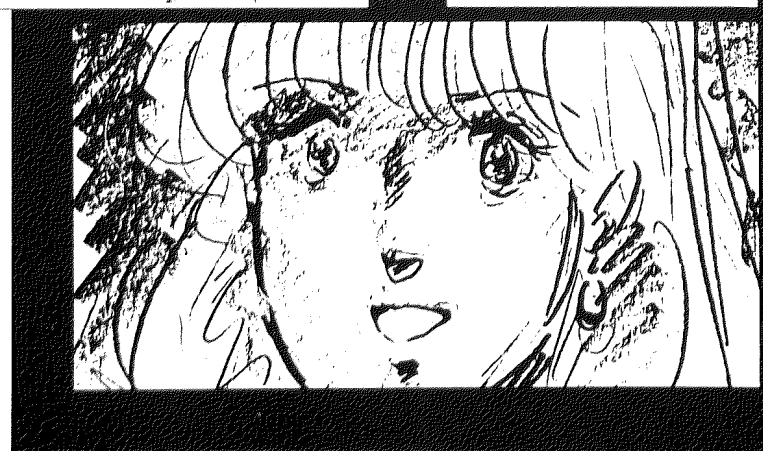
マクロスに肉迫しようとする中型砲艦が、何者かのビームに貫かれた。そして、マクロスのブリッジに、ブリタイからの通信が入る。

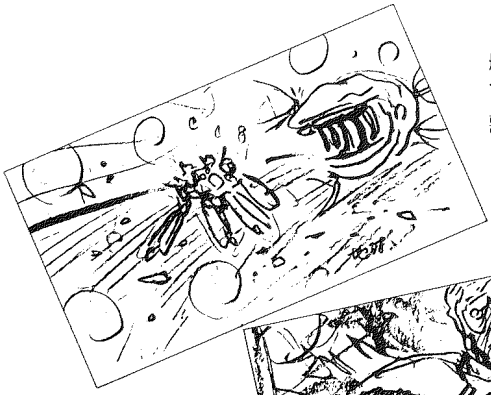
ブリタイ（ジム・ゼム・イン・バン）「7018アドクラス艦隊よりマクロスへ。これより貴艦を援護する！」

エキセドル「プロトカルチャーの文化を失うわけにはまいりません」

間奏の中に、ミンメイは、ブリタイとエキセドルの声を聞く。

その顔が、パッと明るくなる。嬉しい！　嬉しさが、心の底からにじみ出てくる。

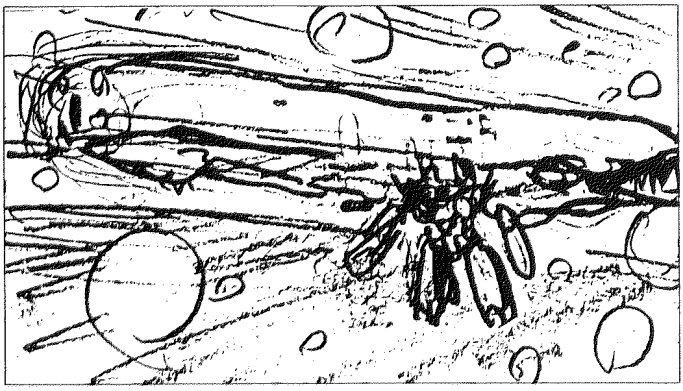


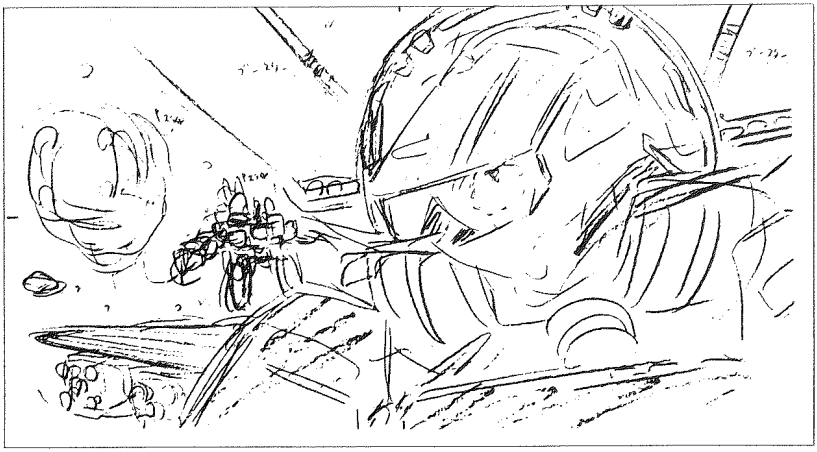


ブリタイは、敵、味方の全艦に呼びかける。
ブリタイ「リン・ミンメイの歌を聞く、すべての者に告げる」
マクロスとすれ違い、回頭しようとするブリタイ艦。

ブリタイ艦が、回頭するためのバーニヤをふかす。
ブリタイ(off)「我らの敵はただひとつ！　ゴルグボドルザを倒し（ＯＮに）再び文化を取り戻すのだ!!」
ブリタイの手は、グッと握りしめられている。

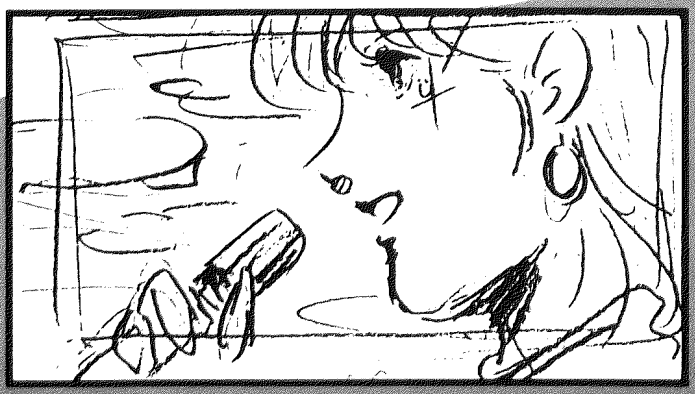
今、マクロスの横を、ブリタイ艦が並進しはじめる。





輝のバルキリーが、マクロスとブリタイ艦の前方をいく。コクピットから輝は振り返って見る。
並んで進む２艦――。
輝は、嬉しそうに笑う。

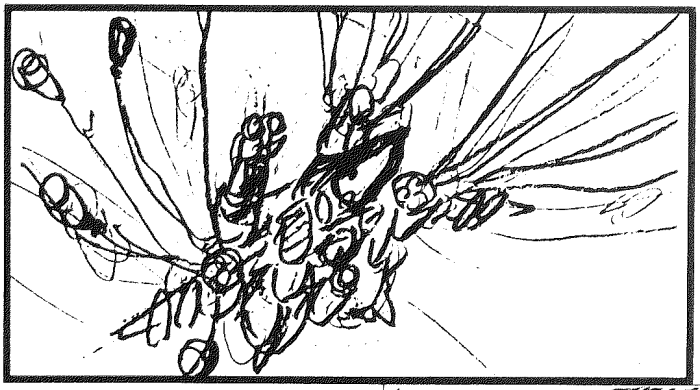
マクロス内。やはり嬉しそうなミンメイ。マイクを持ちなおして、歌いだす。



ミンメイの歌の中、マックスとミリアの2機のクアドラン・ローが、ボドル艦にむかう。腕につけた銃を撃ちながら、絶妙のチームワークで2機が飛ぶ。

ミンメイ（歌）「今、あなたの視線感じる――離れてても」

ニッコリと微笑むミリア、そしてマックスの種を超えたカップル。ミンメイの歌は、なお続く。



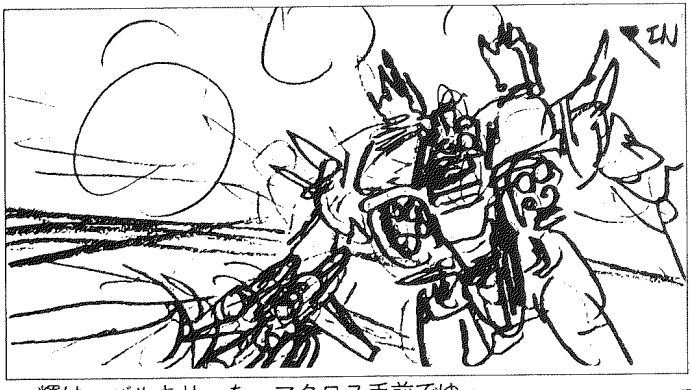
敵のミサイルを、激しいスピンでかわして、輝のバルキリーが前進する。

ミンメイ（歌）「遠くから　見守ってください――」

輝のバイザーに、今、発射したミサイルの航跡。

ゼントラーディの重攻撃機にむかっていくミサイル群。次々に、吸い込まれるように、重攻撃機に命中。
重攻撃機は、一瞬に四散する。

ミンメイの歌に力づけられるように、マクロスが、戦場を横切ってくる。輝は、反転すると、マクロスのほうへと機種をむける。



輝は、バルキリーを、マクロス手前でゆっくり減速して、バトロイド体形に変える。

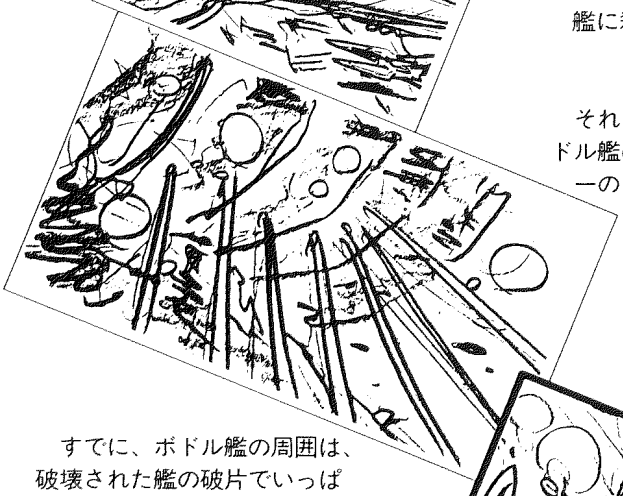
そして、ブリッジの外で、並進位置につく。

コンソールの前にいた未沙が、輝に気づき微笑みをなげる。

再び前方を見る未沙、そして、発進する輝！

ミンメイ（歌）「昨日まで　涙でくもってた世界は今――」

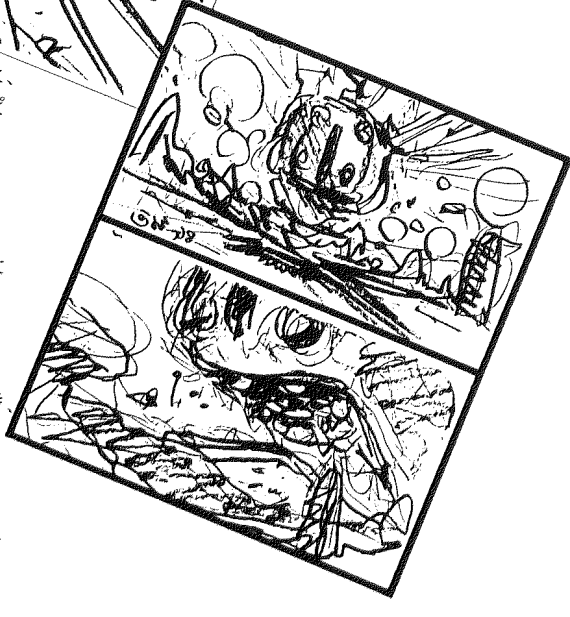
マクロスを中心とした、ゼントラーディ・メルトランディ連合艦隊が、無数の噴射煙を引きながら、ボドル艦に殺到する。



それらの艦に対して、ボドル艦の対空砲火がシャワーのように浴びせられる。

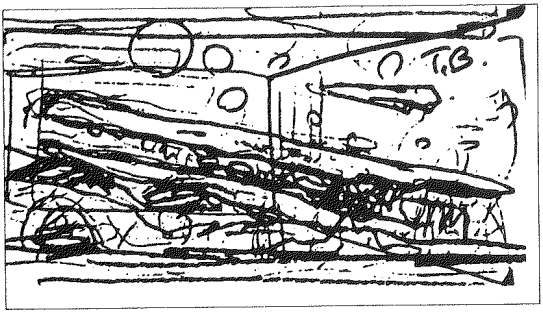
すでに、ボドル艦の周囲は、破壊された艦の破片でいっぱいである。

その中を、ブリタイ艦が、強行着陸を試みる。ブリタイ艦に集中するビーム。だが、ブリタイ艦は、スピードを落とさない。



ミンメイ（歌）「おぼえていますか。手と手が触れあった時、それは初めての――」

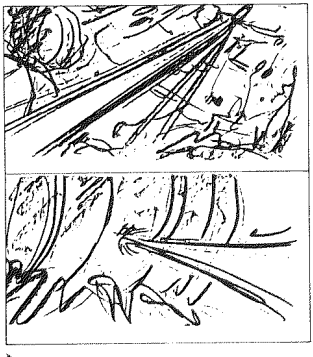
ブリタイ艦の艦首主砲が、カッと口を開き、ボドル艦にむかっていく。



ブリタイ艦は、ボドル艦の甲板上に、強行着陸した。
船腹から、どちらの艦のものか、破片が舞う。

なおも、ブリタイ艦に、ボドル艦のビームが命中する。ブリッジ内も、炎が舞っている。

ボドル艦上に着陸したブリタイ艦の主砲に、スパークが走る。



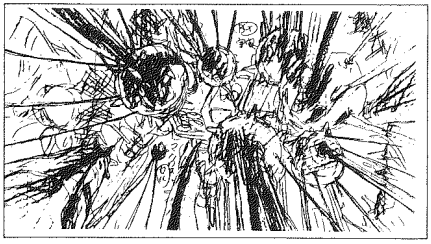
ミンメイ(歌)「――I love you so
――もう　ひとりぼっちじゃない」

ブリタイ艦から、すさまじいビームが伸びる。ゼロ距離射撃だ。ビームは、ボドル艦の装甲を貫いて、奥へ走る。

ミンメイ(歌)「――あなたがいるから」
マクロスが、ブリタイ艦の開けた穴をめがけて突入する。

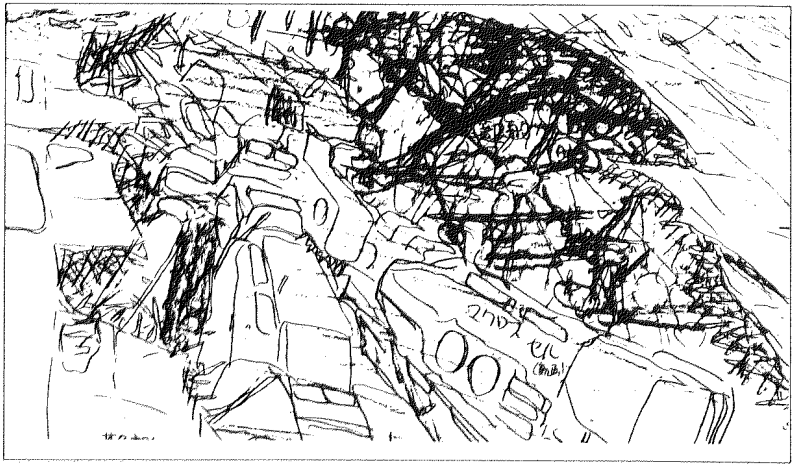
巨大なボドル艦――小惑星ほどもあろうかと思われる船体も、中に入ってしまえば、その分厚い装甲も意味を失う。

マクロスは、ボドル艦の隔壁を破って突入した。マクロスの船体に、無数の構造物の破片が当たる。



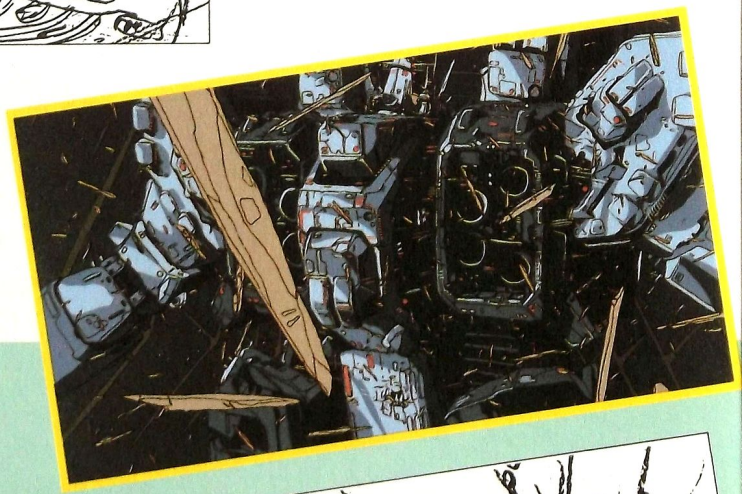
マクロスは、甲板上に多数のバトロイド、デストロイドを配置し、一斉射をかけながら内部へと突入していく。

そのブリッジでは、ミンメイが、歌いつづけている。歌が、宇宙に流れる。



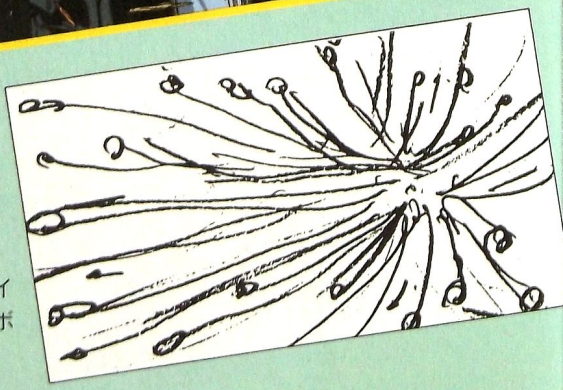
ブリッジの中で、ミンメイは歌う。そして、その外を、ガンポッドを連射しながら、輝のバルキリーが、マクロスの進路を確保していく。

甲板上――デストロイド・モンスターが4連装主砲を撃つ。アームドⅠのすべてのミサイルが、ボドル艦の内部にむけて、次々と発射される。



ミンメイの歌に合わせるように、マクロスの大型ミサイルハッチが開く。

そこからのぞく、ミサイル弾頭！



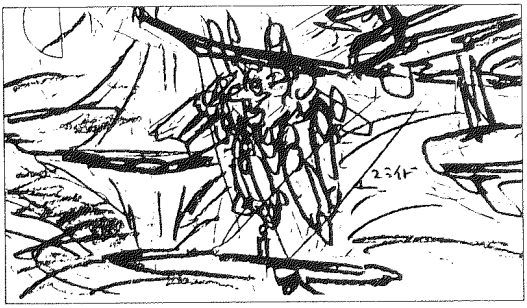
一斉に発射されたミサイルは、円形に広がって、ボドル艦に突っ込んでいく。白い噴射煙がからみ合い、伸びてゆく。

ミサイルは、無数に浮いた破片と、構造材の間をぬうように飛ぶ。そして、奥の闇に一度は見えなくなる。

やがて、闇の中に、爆発光が広がっていく。

ボドル艦内の下面プレートが、爆圧に耐えきれずにふくれあがり、ついに裂ける。下から噴き出す炎。

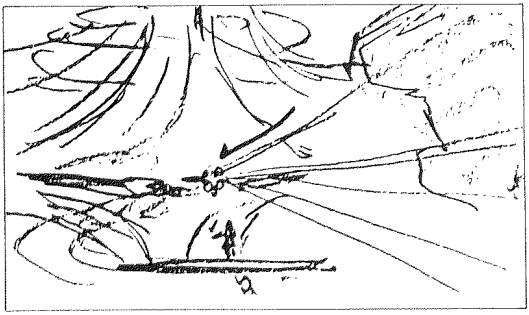
その炎の中を、マクロスが姿を現す。船体は、破片とガスの粒子で、よごれているようだ。



マクロスは、ボドル艦内に擱座した。そのブリッジから、未沙が輝のバルキリーを見守っている。

それに応えて、バルキリーが敬礼する。

ミンメイ(歌)「I love you so――」



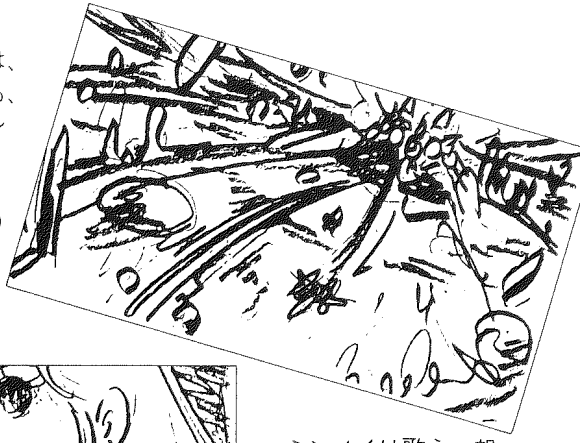
歌に合わせて、腕をおろした輝機は、振りむきざまに加速、ファイターに変形しながら、ボドル艦の中央船殻を目指して遠さかっていく。

輝のバルキリーは、全速で目標へとむかう。目標――それは、この艦と一体となった、ボドルザーである。

輝のバルキリーが、ボドルザーめがけて飛ぶ。機体上面のブースターが、全エネルギーを噴射にかたむける。

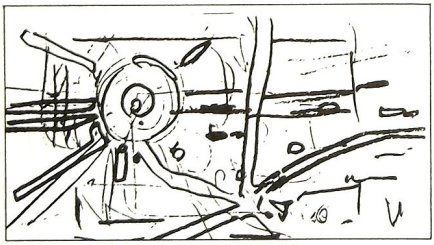
マクロスのブリッジからは、もう輝は見えない。それでも、輝の無事を祈るように、ミンメイが歌っている。

ミンメイ(歌)「もう　ひとりぼっちじゃない――」



ミンメイは歌う、想いをこめて……。ミンメイの脳裏に、今、中央船殻にむかっている、輝のバルキリーがある。

ミンメイは、マイクを握りしめる。



マクロスのブリッジ。未沙の上部コンソールに、輝のバルキリーと、ボドルザーの相対位置が示されている。

未沙は、コンソールを操作して、輝に情報を送る。

未沙「メイン・ターゲット――A－１３３、Z－１６５」

未沙の心が、通信を通して輝に伝わる。輝は、情報と同時に、愛を聞く。

未沙の心にむけて、輝は、コクピットの中からうなずいた。

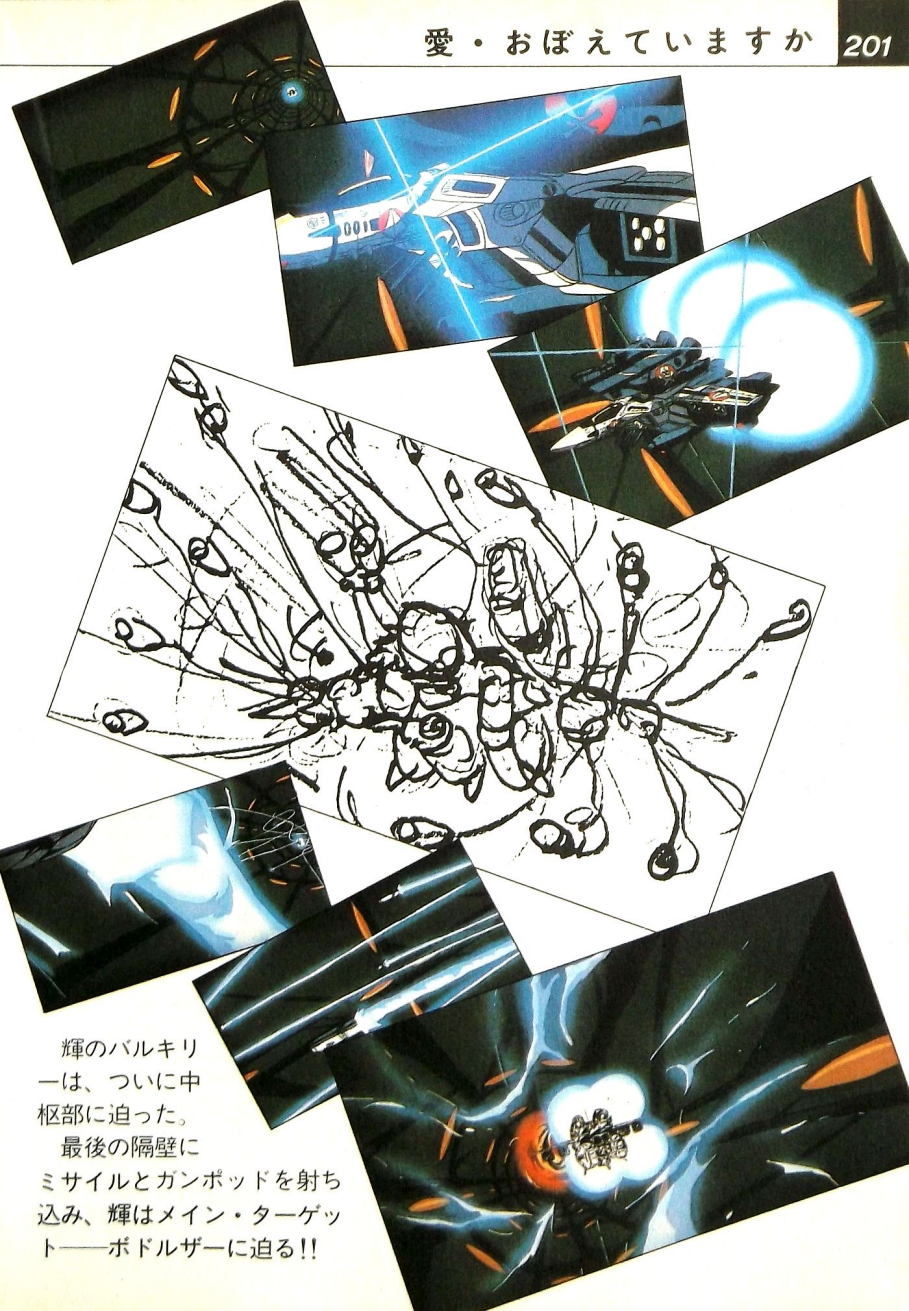
左手が、スロットルを押し込む。マキシマムパワーで、バルキリーはドンと加速される。

ボドルザーに通じるパイプの中へ、青白い噴射炎を引いたバルキリーが突入した。

それを見送るように、ミンメイの歌が追いかける。

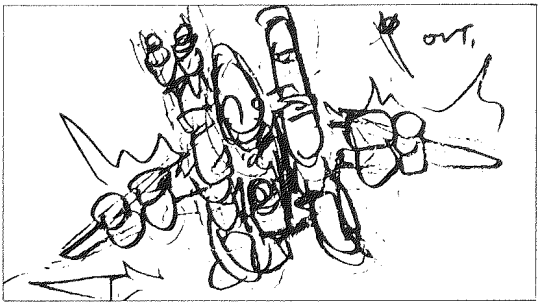
ミンメイ(歌)「もうひとりぼっちじゃない――もう　ひとりぼっちじゃない――」

確かに輝は、ひとりではなかった。



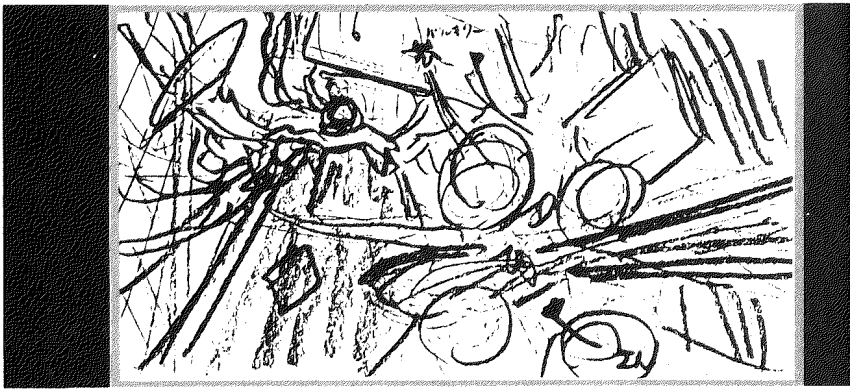
輝のバルキリーは、ついに中枢部に迫った。

最後の隔壁にミサイルとガンポッドを射ち込み、輝はメイン・ターゲット——ボドルザーに迫る!!



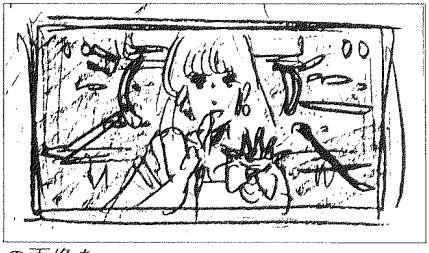
ボドル艦中央へのハッチが、ミサイルで吹き飛んだ。そして、その炎の中を、輝のバルキリーが突っ込んでくる。

さらに、ボドルザーめがけて、バルキリーは垂直上昇――目標まで、あとわずかだ！



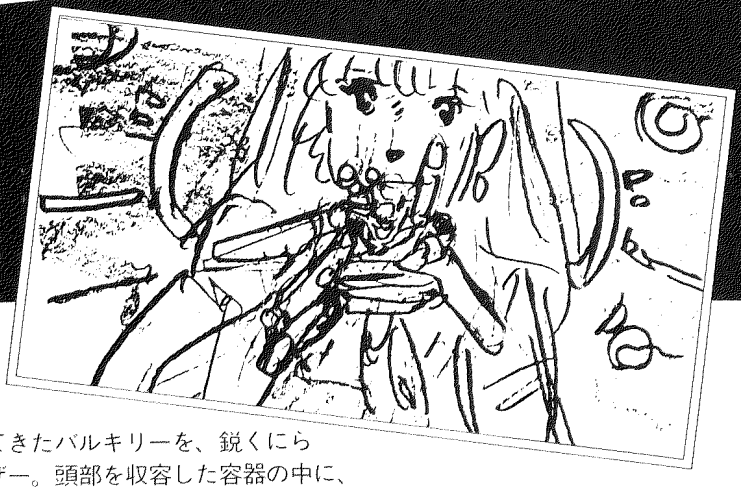
ボドルザーの前に、大きなスクリーン。その中央に、ミンメイが映っている。

ミンメイ(歌)「　　あなたがいるから　　」



左手をさしのべて歌う、ミンメイの画像を突き破って、輝のバルキリーが現れる。

間髪を入れずに、ガウォークに変形して急制動――その眼前には、ボドルザーの巨体がある。

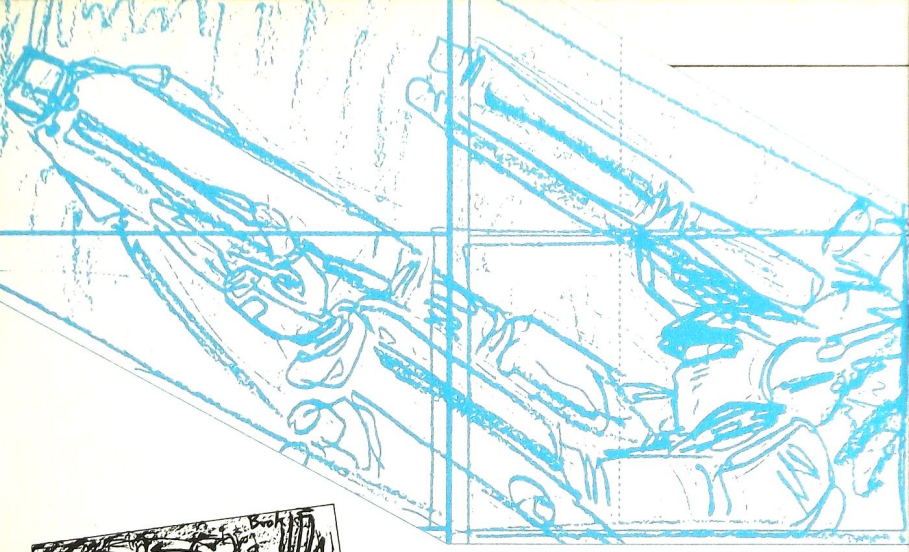


侵入してきたバルキリーを、鋭くにらむボドルザー。頭部を収容した容器の中に、白い泡が躍っている。

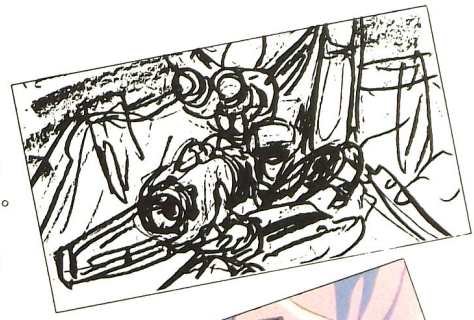
輝は、ガウォークからバトロイドにチェンジすると、ガンポッドをかまえた。

ボドルザー「プロト…カ・ル・チ・ヤー！」

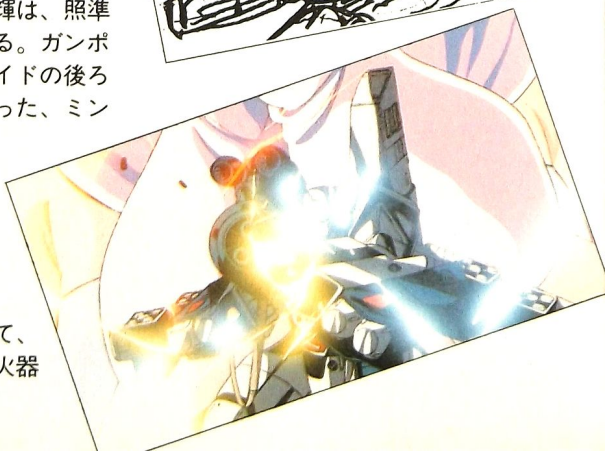
ボドルザーを狙って、ガンポッドの銃口がゆっくりとあがっていく。



グーッと持ちあがったガンポッドが、ピタリと静止した。その射軸上には、ボドルザーの頭部がある。



コクピットの中で、輝は、照準用スクリーンを凝視する。ガンポッドをかまえたバトロイドの後ろには、スクリーンに映った、ミンメイの姿——。

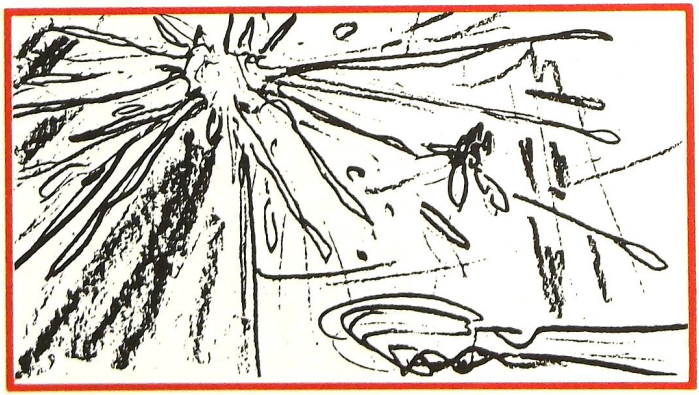


輝の両手が、ガンポッド、ビーム砲の引き金にかかる。

一瞬の静寂——そして、バトロイドのすべての火器が、火を噴いた。

ボドルザーの頭部といわず、胸部といわず、あらゆるところに弾丸が当たった。頭部を覆っていたガラス状の容器が壊れ、光る液体が飛び散る。

ボドルザー「ウォ、ワァーッ」



目を閉じて、ラスト・フレーズを歌うミンメイ。

ミンメイ(歌)「あなたが　いるから――♪」

思い切り歌った――ミンメイは、マイクを持つ手を、高く高くさしのべる。

頭上にさし出されたマイクが、ミンメイの心を表すかのように、キラリと光る。

ボドル艦のブリッジ。そこは今、崩壊の中にあった。

パネルが、パイプが、コード類が、次々にボロボロになって崩れていく。艦そのものがボドルザーの体だったのだ。

やがて崩壊は、外の装甲にも達した。外板が光に包まれ、消滅していく。まるで、シミが広がるように、ボドル艦の表面に白い光が現れ、次の瞬間には、骨組を除いた部分は消えうせる。

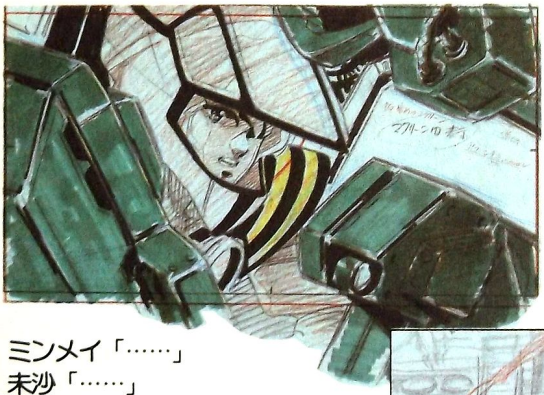
ＳＥ（ドドド……）
ＳＥ（パパパパ……）

不時着したブリタイ艦が離れる。

瓸座していたマクロスも、下部の壁が消えて、自由になった。骨組の間に、マクロスは浮かんでいる。

輝の目の前のボドルザーも、白く変色し、まるで灰で作った人形が崩れるように散っていった。

そこに浮かぶ輝のバルキリー、さらに骨組のむこうにマクロスが見える。



輝は、任務を完了した。その興奮のために、口調は逆に落ち着いている。

輝「スカル１よりデルタ１へ」

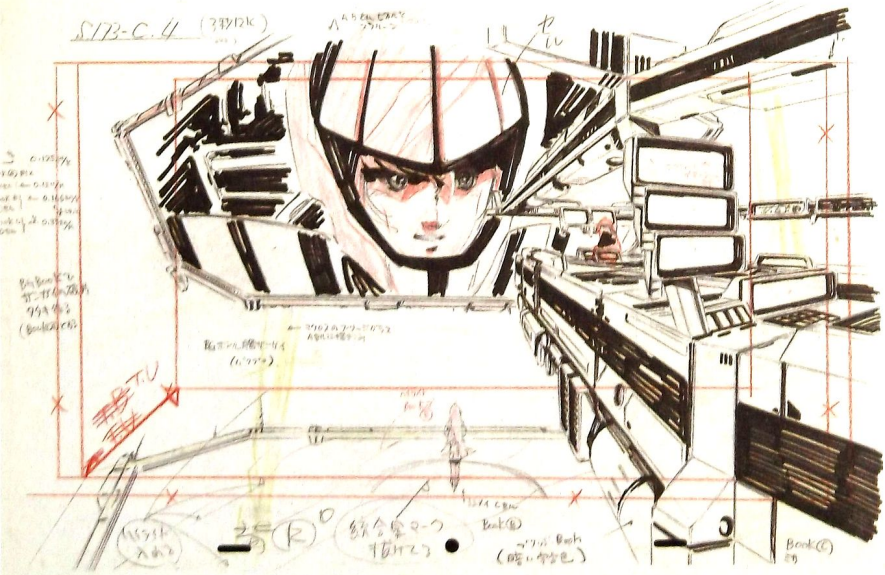
輝の声にミンメイと未沙が顔を上げる。

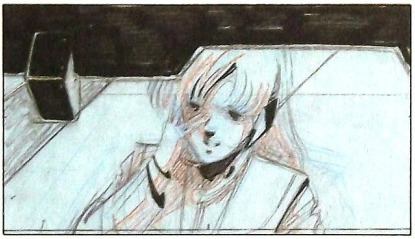
ミンメイ「……」

未沙「……」

ブリッジの大スクリーンに、輝の顔が映っている。

輝「任務完了!!　これより帰艦します！」



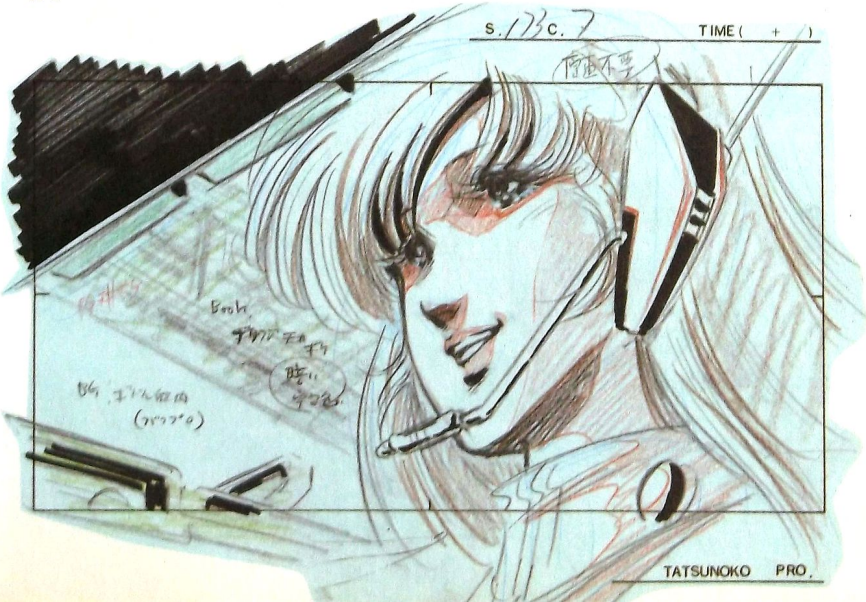


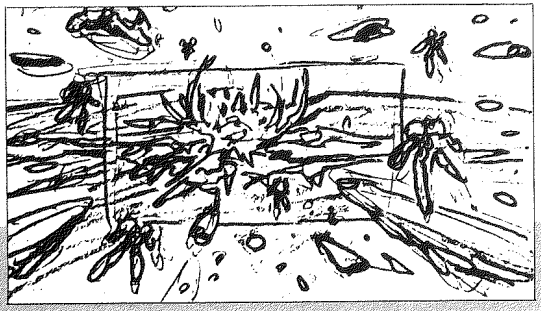
未沙は、嬉しさのあまりホッとため息をつく。
未沙「……あっ……」
そして、顔を上げてパネル操作。
未沙「こちら、デルタ１、了解」

今、戦いを終えた輝が、〝家〟へ帰ってくる。

コクピットで微笑む輝。そして、ブリッジで、瞳をうるませながらも、微笑みをもらす未沙――。

たった今、戦いが終わり、たった今、本当の愛が始まる。星々の光の中に、マクロスの影。





歓声「（大きく）ウワァーッ！」

残骸と化したボドル艦の周囲――無数の艦、バトルスーツから、喜びの声があがっている。歓声はなおも続く。

マクロスのブリッジ内。疲れた足どりのグローバルが椅子にすわる。未沙が、ヘッドセットをゆっくりとはずす。

ひと息ついた未沙の前に、微笑みを浮かべたクローディアの顔。

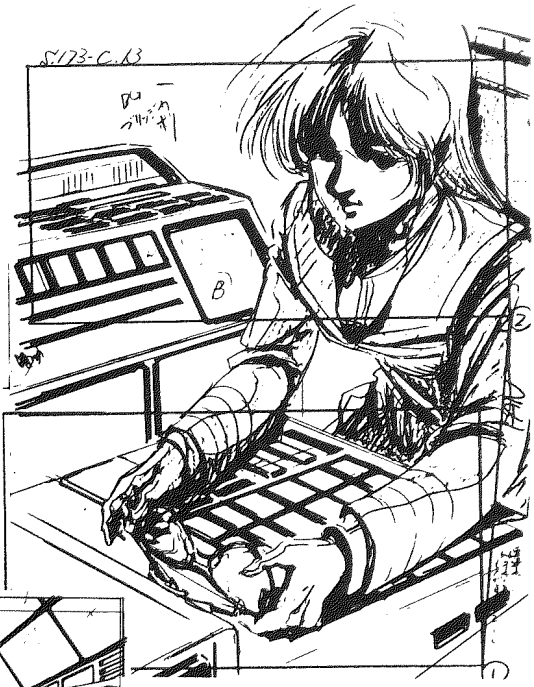
輝と未沙のことを喜びながら、フォッカーの死への悲しみに、少しだけ笑顔がくもる。そう、ほんの少しだけ……。

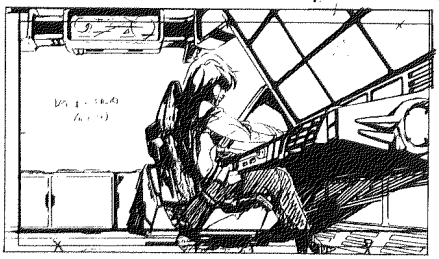
そんなクローディアの優しさに、未沙はゆっくりとうなずく。

ヴァネッサは、眼鏡をはずして、ふきはじめた。

オペレーターとして、気の休まる暇もなかった、この数時間の後に、生きているという実感を、ヴァネッサは、眼鏡をふくことで味わっている。

さっきまで、忙しく明滅していたコンソールも、今は、ひっそりとなりをひそめている。

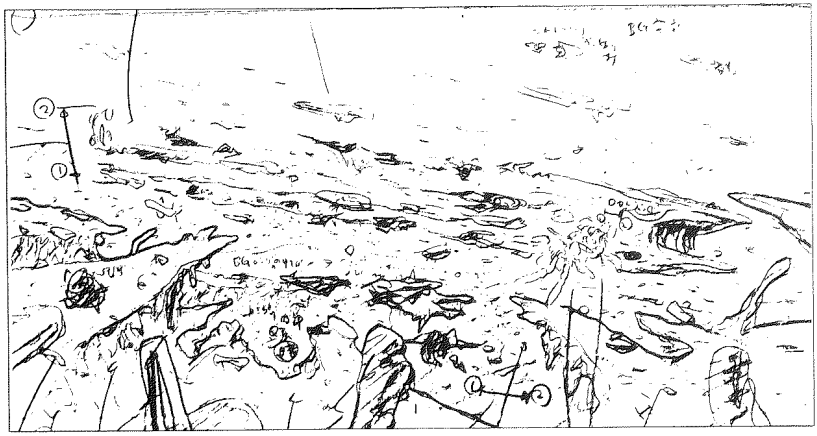




キムは、大きく伸びをする。そして、そのままシートを倒し、あおむけになってしまう。

すでに、灯を落としてしまったようなシャミーのコンソール。キーボードのかたわらに、ヘッドセットが置かれている。

そして、シャミーは、コンソールにもたれて、眠っている。



ブリタイ艦の周囲では、ゼントラーディ、メルトランディの両方の兵士が、お互いに助け合って、撤退していく。

エキセドル「これからが大変ですな」

ブリタイ「ん!?」

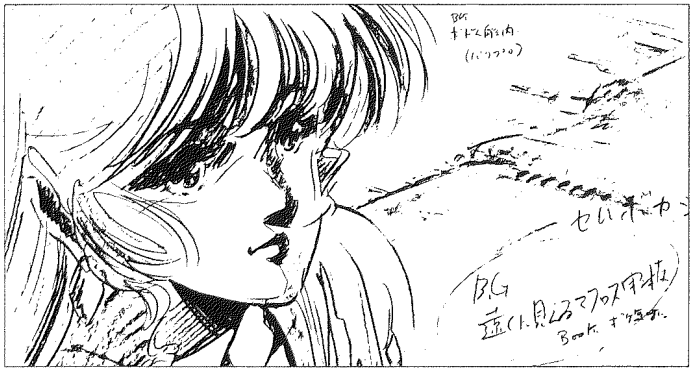
エキセドル「この銀河系内だけでも、ボドルザーやラプラミズ・クラスの機動要塞が、1千艦隊以上は稼動しているはず……」

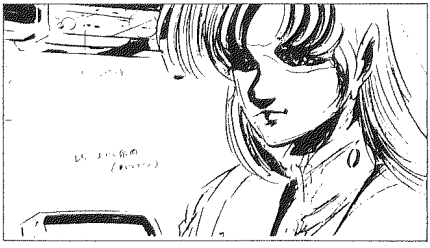
ブリタイは、エキセドルの言葉に、ゆっくりと顔を星空にむける。

ブリタイ「確かにな……。しかし、歌ひとつでさえ、これだけのことができたのだ。文化の力を信じるしかあるまい」

ブリタイは、エキセドルだけでなく、自分にも言いきかすように言った。

新たな日々が始まろうとしているのだ。艦外では、撤収作業が続いている。

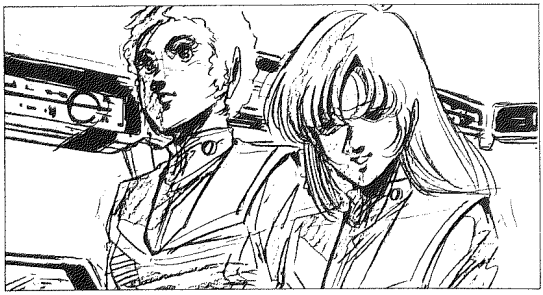




ミンメイは、ブリッジの未沙を見上げる。未沙もまた、ミンメイの視線をとらえる。

ミンメイは、ゆっくりと歌詞カードを頭上にかかげる。さまざまなメッセージがこもった動作――。

未沙は、笑顔でそれに応えた。ミンメイの頬に、喜びがあふれる。今、ふたりの心が結ばれた。



クローディア「結局、なんだったのかしら？……あの歌」

未沙は、ちょっとため息をつく。そして微笑みながら、クローディアに言う。

未沙「ただの流行歌よ」

クローディア「流行歌!?」

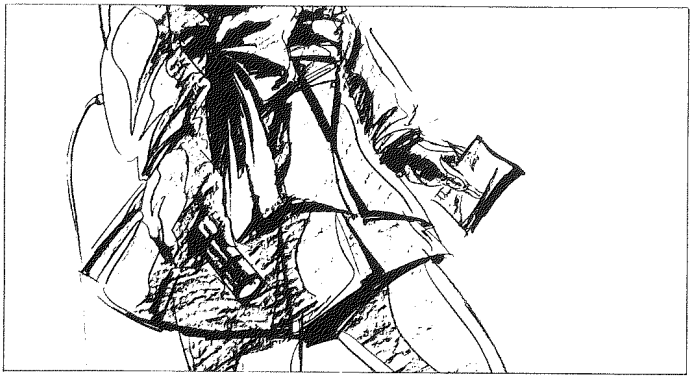
未沙は、遠く時の彼方を見るように、ゆっくりと語る。

未沙「何万年も昔に、異星人たちの街ではやった……」

未沙の心に、さまざまな思いがわきあがる。

未沙「あたりまえの——ラブソング……」

画面には、きらめく銀河の渦——時の流れを感じさせるような光の集団。

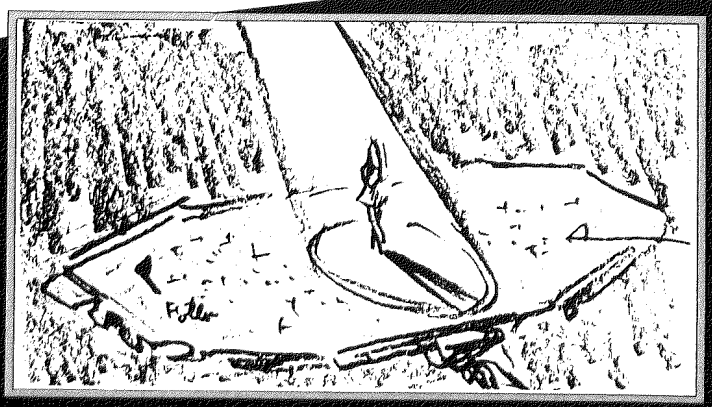


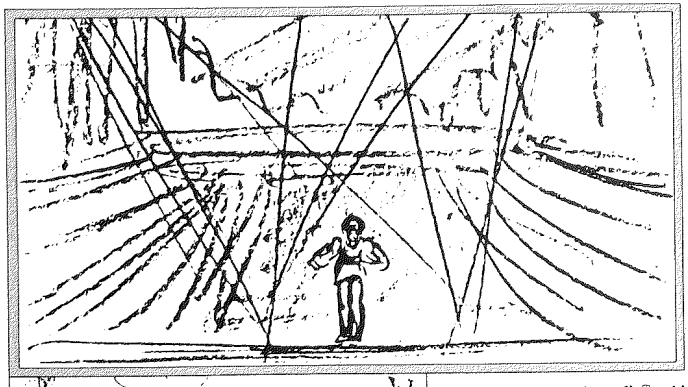
ミンメイの足が、リズムを刻んでいる。右手にマイク、左手にはあの歌詞カード。悲しみと希望、孤独と栄光――そんなものの感じられる表情のミンメイ。足がリズムを刻む。

ミンメイ「ワン・ツー・スリー・フォー、ワン・ツー・スリー・フォー・ワン…」

やがて画面は暗くなり、ミンメイの声だけ。

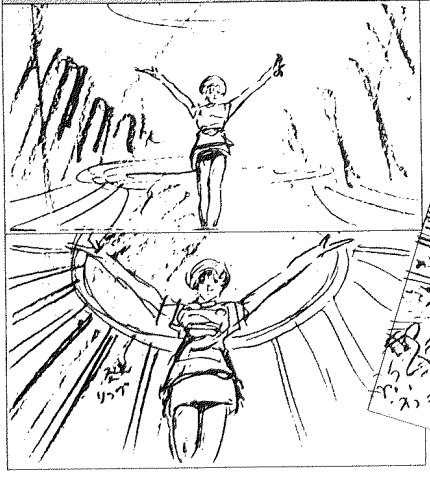
ミンメイ**「ア・ワン・ツー!!」**　　END

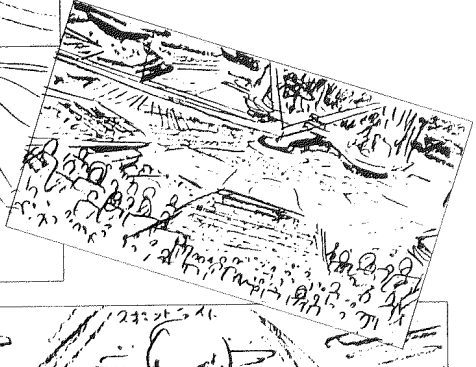




ME（ミンメイの歌『天使の絵の具』）

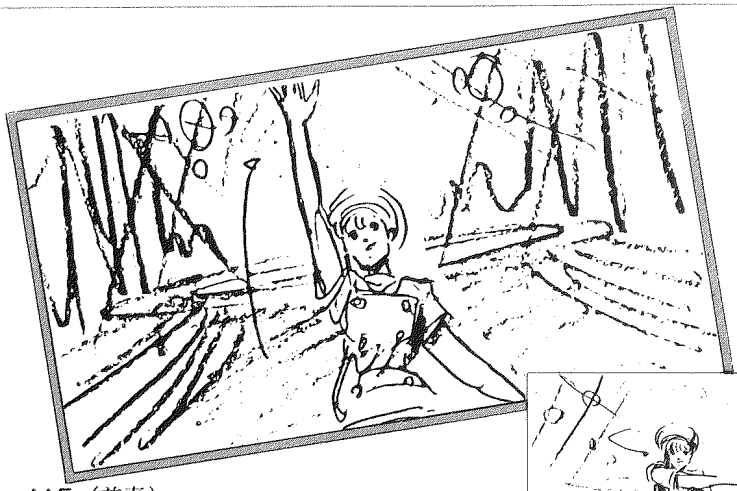
真っ暗な中、前奏と同時にスポットライト。右と左から舞台を照らす。舞台中央、中腰になったミンメイ。





ME（前奏）

ミンメイが両手を広げて、ライトの中に立つ。コンサート会場は満員。30万人以上入れる野外コンサート会場には、地球人、巨人の両方が肩を並べて舞台を見ている。



ME（前奏）

左手を上に、そこから体の前で左右に振る。流れる前奏、きらめくライトの中で、ミンメイは、ゆっくり顔を上げる。

ＭＥ（前奏）

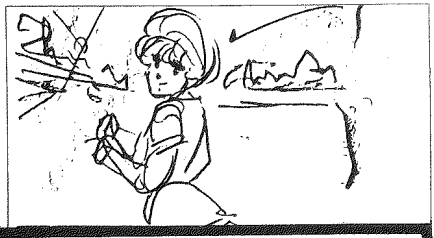
ミンメイの後ろのバンドは、なんと地球人と巨人の混成メンバーである。戦いの後、ゼントラーディ、メルトランディ、そして地球人が、ひとつになろうとする過程がうかがえる。

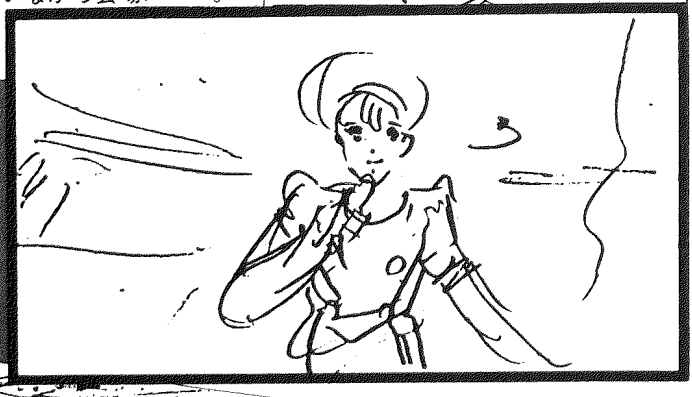
ミンメイは、両手を前で交差させ、次に上にはね上げる。観客の中の地球人と巨人が、拍手をしながら立ちあがる。

ME（前奏）

ミンメイ、舞台の奥へ。前奏の終わりで、クルリと回る。

コンサート会場上空に、花火のような光がきらめく。光の粒が、キラキラ舞いながら会場に……。





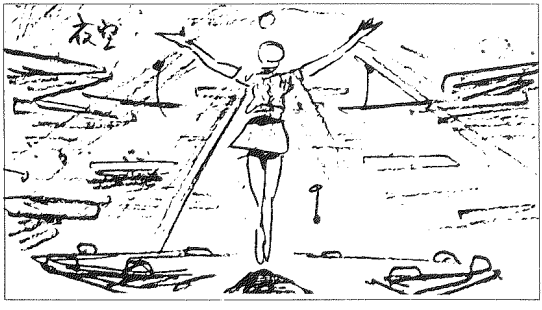
ME（たそがれうつす窓辺へと舞いおりる――）

光の粒は、まるで雪のように舞って、ステージに、光のカーテンを作り出す。

ME（伴奏）

降ってくる光の粒の中で、体をゆらしながら歌うミンメイ。

ステージの上から客席が見える。その客席にむけて、ミンメイは、両手を広げる。そして、ジャンプ。



ME（きらめく　そよ風　すいこんで――）

左手を上げるミンメイ。その後ろには、混成バンドが演奏している。

リズムに合わせて、ステージの上を動くミンメイ。ヒラリと上げた左手の動きが美しい。ミンメイのバックは、ライトにかわり、やがて左手を、大きく上げたところで、パッとスポットライトが、ミンメイを照らす。

ME（空を　見るとき――）

スポットライトの中で、歌うミンメイに、カメラが寄っていく。強いライトの中のミンメイ以外は、闇の中にかくされて見えない。

ME（伴奏が続く）

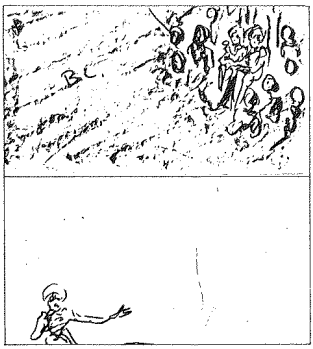
ステージ後方より、ミンメイの後ろ姿。むこうには、歌に聞い入る人たち。

ミンメイは、左手を高く上げ、次に真横へ。そして、前へとさし出す。

歌うミンメイに、カメラが近づいていく。

うす暗く見える客席には、ミンメイファンの、地球人、ゼントラーディ、メルトランディがつめかけている。

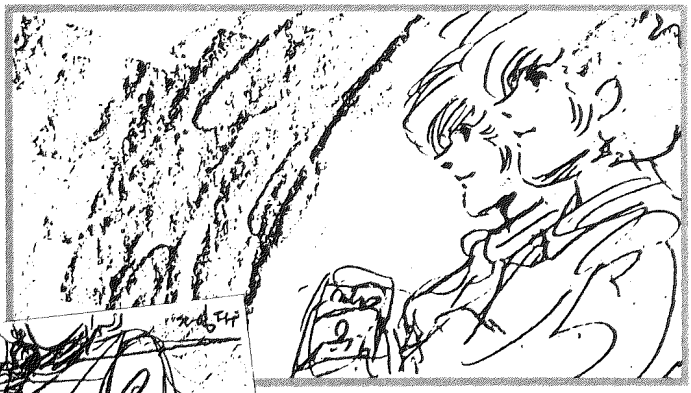
平和になった地球、戦いを離れた巨人たち——ようやく前進をはじめたプロトカルチャーの子孫たちの、建設途上の休日である。

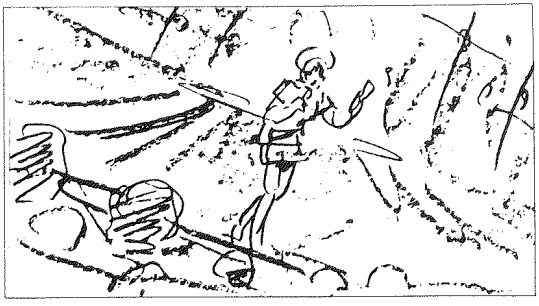


ＭＥ（悲しいできごとが　ブルーに染めた心も――）

暗い客席。並んですわっている新婚さんらしいカップルがいる。未沙と輝である。未沙は手に、コンサートのプログラムを持ち、その上に輝の手が重なっているようだ。

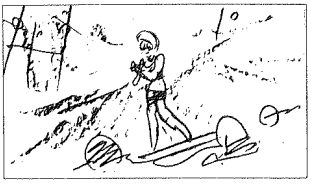
ミンメイの歌の中に、何かを感じているようなふたりの視線が、じっとステージに注がれている。





ME（天使の――）

体の前で、左手を大きくまわすミンメイ。節の区切りで、ひじを曲げてピタリとポーズをきめる。



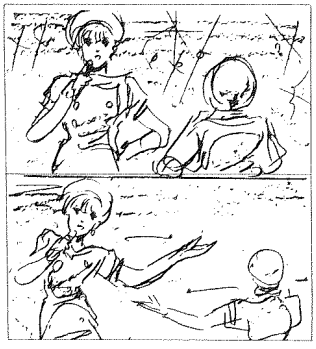
ME（伴奏）

客席から見たステージ。カメラが、右に左に傾けられる。

ME（絵の具で　塗りかえるよ）

ライトが、まるで波打つオーロラのように明滅している。

思いをこめて歌っているミンメイ、すっと顔を上げていく。ライトの光が、リング状に輝く。



ＭＥ（思いのままに）

カメラがミンメイを２方向からとらえる。画面左は正面から、右手は後ろから――。

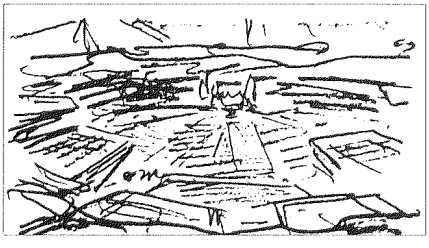
重なりそうだったふたつの画像が、やがてゆっくり左右に別れていく。

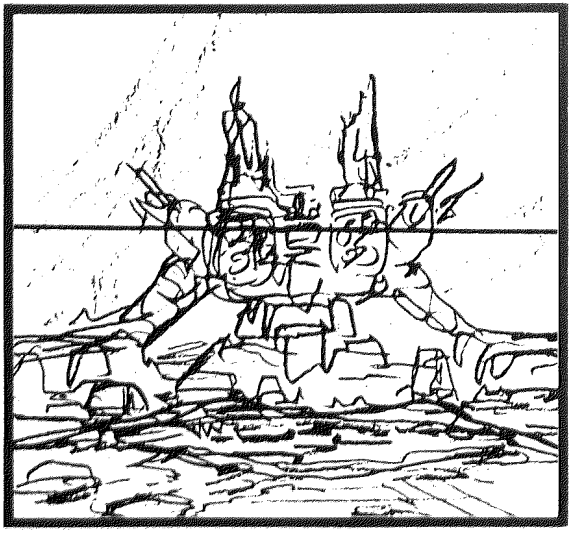
ミンメイは、腰にあてていた左手を、スッと前へ持ってくる。そして、歌いながら、今度は横へ開く。

優雅なしぐさと歌が楽しい。

ＭＥ（間奏）

ずっと上空から見たコンサート会場。カメラが引くと、そこはクレーターの中である。戦いの後、ようやく復興しはじめた大地――夜景が美しく広がる。





ＭＥ（間奏）

コンサート会場のむこうに、巨大な何かがそそり立っている。マクロスだ。戦いを終えたマクロスが、安らぎの時を迎える。

ＭＥ（２番に――）

スタッフのテロップが流れだす。

あとがき

たかだか1時間50分程度の映画を作るのにも、その製作過程には、ぼう大なステップと多くのスタッフが必要です。テーマを明確に定め、プロットを作り、ストーリー構成を固め、シナリオを書き、キャラクターや世界のデザインを生み出し、それらをもとに脚色し、絵コンテをきり作画打ち合せを行い、レイアウトをとって、原画を描き、演出、作監の手を経て動画、仕上げ、そして背景と合わせて撮影、現像、編集、アフレコ、ダビング、リテイク、プリント……etc、（実際にはもっと複雑ですが……）。

今回の本は、絵コンテやレイアウトの段階を中心にまとめられていますが、もともと映画の製作過程のひとつひとつのステップにすぎず、それ自体では完成品とは呼べないものである以上、一冊の本としてまとまるように大幅に再編成していただきました。

また、ここに収録されているストーリーは、最終的な形になる、ひとつ前の段階のものです。この段階のコンテを描き終えてから2か月ほどたって、やや客観的な視点でコンテを見返した結果、テーマを明確に表現するには今一歩に思えました。そこでもう一度構成に手を加えいくつかのシーンを描き直し、ゼントラーディ語を導入して、現在の形に近づけ、さらに1時間50分位に収めるために、いくつかのシーンをカットする事になりました。この時点ですでに作画は進行中だったため、作画、演出スタッフには、御迷惑をかける結果になってしまいました。

これ以外にも、はじめて監督をする不慣れな私の要求に、スタッフの方々のご苦労は、並大抵ではなかったと思います。そして、初めての映画を、これだけの形で世に出せるという幸福を手にした今、改めて、スタッフの方々の熱意と実力に、深く感謝しています。

ここで、映画をご覧になった方はもうお気づきと思いますが、この本には載っていて、映画にはないエピソードのひとつにエンディングのコンサートシーンがあります。これだけは、自分の意図に反して、作業が間に合わないためカットせざるを得なかったシーンであり、作品作りを最後までまっとうしきれなかった自分の力不足が最大の心残りです。

昭和59年7月25日　河森正治

劇場版 超時空要塞マクロス
愛・おぼえていますか

ストーリー&絵コンテ

EDITORIAL STAFF
構成■辻　壮一(スタジオ・アッシュ)
文■門井　勉(湘南工房)
デザイン■野知喜樹(スタジオKIKI)
大橋博之(ISTVAN)
生田泰男
カバー・表紙デザイン■宮本義貴
EDディレクター■宮本義貴

日本音楽著作権協会許諾番号第8451061-401号
定価 980円
ISBN 4-09-101564-6
昭和59年9月22日初版第1刷発行

©ビックウエスト　1984

編集兼発行者　相賀徹夫
印刷所　大日本印刷株式会社　PRINTED IN JAPAN

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋2の3の1
振替(東京8　200)
TEL 販売03(230)5737 編集03(292)9242 製作03(230)5331
小学館

造本には、じゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえします。

●大好評アニメシリーズ刊行中

THIS IS ANIMATION ザ・セレクト

太陽の子エステバン（上・下）
宇宙戦艦ヤマト（総集編・完結編）
超時空要塞マクロス（上・中・下）
超時空世紀オーガス（上・下）
以上　定価(各)780円

超時空騎団サザンクロス
——スペシャル・ガイドブック　定価1,000円

THIS IS ANIMATION オリジナル・イラストレーション

超時空要塞マクロス(キャラ・メカ編)　定価(各)880円

THIS IS ANIMATION 設定大全集

超時空要塞マクロス資料集①②　定価(各)1,200円

アニメ・ノベルズ

超時空要塞マクロス(TV版)
全3冊　定価(各)380円

超時空世紀オーガス
全2冊　定価(各)390円

テレビ名作／アニメ版

太陽の子エステバン　全4冊定価(各)690円
超時空要塞マクロス　全7冊定価(各)690円
超時空世紀オーガス　全5冊定価(各)690円

劇場版・超時空要塞マクロス

- スペシャル・プレビュー　定価800円
- ザ・セレクト
  愛・おぼえていますか　定価1,000円
- アニメ・ノベルズ　定価480円
- ストーリー&絵コンテ　定価980円

雑誌コード　65285—64
ISBN4-09-101564-6 C0274 ¥980E

定価980円